

387-256



1200501457575



始







國譯禪學大成





國譯禪學大成第二十五卷凡例

一、本大成第二十五卷には、前の第二十四卷に次いで、圓滿本光國師見桃錄卷之四の譯文

及び原文と永源寂室和尚語錄四卷とを收載せり。

見桃錄に就いては、前の二十四卷の凡例及び解題に於て大略述べたれども、本卷收載

の卷之四に就いて一言せん。即ち見桃錄卷之四には、預請の秉炬と題して、其の生前

に於ける下火及び秉炬一百九篇と、附録と題して、後奈良天皇の宸翰以下、妙心寺及び

臨濟寺山門疏など數篇を收録せり。之によつて觀れば、何れも皆國師の典雅なる文章

に接し得ると共に、師は又如何に多くの衆生を濟度したるかを知るに足るべし。

永源寂室和尚語錄は又『寂室錄』とも略稱し、近江の永源寺開山、寂室和尚の語要を

輯録したるものにして、禪師の滅後、十一年目の永和三年、僧性均なるものが初めて

二卷本として開版せり。其の後、寛永二十一年再版に附するに際して一絲和尚の禪

師行狀を之に添ふ。又元祿十年に至り、頭注を加へて『頭書寂室錄』と題し、四卷本とし

て刊行せり。更に寛延四年に至り、元祿の頭注本を重刊冠注と改めて出版せり。其

の外、寛文元年刊の三卷本、正保二年刊の二卷本、享保元年刊行の二卷本などあ

387-256



り。今次、國譯するに際しては、寛延の刻本を底本となし、之に寛永の刊本を以て校合せり。

一、寂室和尚は當時、詩文の名手を以て聞えしかば、本録の如きは宗派の如何を問はず、治く僧俗の間に愛讀せられ、本邦禪林の語録中、本書の如く廣く世に流布したるものは希なり。而して本録卷の一及び卷の二には、偈頌、佛僧贊、自贊を收め、卷の三には、小佛事、説及び書簡を録し、卷の四には法語、跋及び増補などを収録し、終りに佛頂國師(一絲)作の寂室和尚行狀を添附せり。故に之等によつて、何れも和尚の崇高なる徳風と卓絶せる文藻とを窺ふことを得べし。

昭和五年十月

編者 佐藤黄楊識す

# 國譯禪學大成 第二十五卷

## 目次

國譯圓滿本光國師見桃錄 (卷之四) 下 ..... 二六七—三三七

圓滿本光國師見桃錄原文 (卷之四) 下 ..... 一五四—一九六

國譯永源寂室和尚語錄解題 ..... 一—三

國譯永源寂室和尚語錄 ..... 一—二〇三

永源寂室和尚語錄原文 ..... 一—一〇三



國譯圓滿本光國師見桃錄卷之四

遠孫比丘衆等重編

預請の秉炬

西隱秦公座元、預め、百年後の秉炬の語を求む

「透過す百二十の秦關、無所從來那處にか還る、石火電光追へども及ばず、等閑に陽倒す鐵圍山。共しく惟れば、西隱秦公座元、形容枯槁、手段鞅頑、大龍を滄海に制し、靈鷲を塵寰に接す。或時は孤峯頂に向つて草庵を盤結す、口、三世佛を呑む。或時は一心田を開いて荆棘を剷除す、業、五無間を滅す。這裏に到つて、甚麼の徳山の棒、臨濟の喝をか用ひん、什麼の釋迦の富、彌勒の慳をか管せん。然も是の如くなりと雖も、向上の一曲子を聴かんと要すや。丙丁童子高く擊節す、虚空唱へ起す菩薩蠻。」咄。

東陽院頭月峯珠公首座の下火 預請

國譯圓滿本光國師見桃錄 卷之四

① 死後といふが如し、尙ほ預請なれば、百年忌の意をも含む、隨分面白い流行である。人間も此の邊迄徹すればよろしいが、それに反して此の時代の天下の形勢は所謂戰國時代で我が國二千五百年の青史上、最も亂脈を極めたる時にして、君臣父子の道の棄れたること、是れより甚だしきはなし、彼の春秋時代に真く相類



「一顆の明珠本自ら圓かなり。徑雲深き處龍淵を出づ、鐵鎚擊碎して後の消息、臘月花開く火裏の蓮。夫れ惟れば、東陽院殿月峯珠公首座、權有り實有り、黨も無く偏も無し。東陽の清規を學ぶときは、則ち野外に綿繭す。南方の佛法に參するときは、則ち風顛を擒住す。首座道を行す、威音已前、生死即ち涅槃、水流れて元海に入る。涅槃即ち生死、月落ちて天を離れず。正與廢の時、什麼の聲聞果、緣覺果とか説かん、什麼の如來禪、祖師禪をか論せん。若し未だ然らすんば、火把子の敷宣を聽け。」火把を抛つて、「此れは是れ長生眞の秘訣、冰桃實を結ぶ歳三千。」喝一喝す。

賢仲啓聚首座預請百年後乘炬の語

「地獄天堂一聚の塵、塵塵解脫す本來人、好し西嶺千秋の雪に和して、鐵鑄の梅花火裏の春。夫れ惟れば、賢仲啓聚首座、流を截る香象、浪を衝く錦鱗、自を利し他を利す、膝下の黄金之れを用ふれども盡くる無し。佛を殺し祖を殺す、眉間の寶劍磨すれども磷かす。涅槃の明鏡を打破し、生死の苦輪を脱卻す。箇箇轉處に立在す、密密要津を把定す。舜若多神面皮黒し、燈籠口を開いて笑閻閻。然も怎麼なりと雖も、向上の一路如何

す、有爲轉變の世の現象として又然るべき事にや。

④ 釋迦の婆婆往來八千遍、四十九年の横説説の演法に對し、彌勒菩薩は龍華樹の下に成佛後、只だ三會の説法をなされて入滅し給ふ、故にその富と慳とを軽く言はれたるなり。

⑤ 東陽德輝禪師、元統三年秋、順宗の詔を奉じて百丈清規を修す、龍翔寺の住職大詒、又勅を奉じて之れを校正し、師又重れて命を奉じて之れを編修すといふ、今日行はるゝ勅修清規は即ち是れなり。

⑥ 梵語 Śūnyatā なり、空性と譯す、二轉あり、其の一は虛空の實體を指して空性と名づく、空即性の持業釋なり。其の二は、諸法の空無を指して空といひ、空の性を空性と名

が指陳せん。火把を抛つて、「溪聲は廣長舌、山色は清淨身。」咄一咄。

鳳林超公書記の下火 預請

「泥洹の一路轉身の時、石火光も猶ほ鈍運、地獄天堂昨宵の夢、風驚き花落つ杜鵑の枝。夫れ惟れば、鳳林超公記室禪師、濁世の鳥跋、叢林の白眉、肘後の符を懸けて禍を避くと雖も、禪本草を讀んで未だ醫することを得ず。佛日慧日頓に癡暗を破す、大藏小藏僅に瘡痍を拭ふ。積翠強ひて三關を設く、屋頭の山色豈に清淨に非ざらんや。永明誤つて六字を唱ふ、門前の湖水即ち是れ寶池。凡聖 朕迹を留めず、自他何ぞ毫釐を隔てん。露髀裸赤條條、全く菩提の證す可き無し。清寥寥 白的的、寧ろ生死の離る應き有らんや。脚下實地に踏著す、機前須彌を陽倒す。緊要の時節、向上の鉗鈍子、如何が提持し去らん。」火把を抛つて、「紅爐放出す鐵鳥籠。」喝一喝す。

秀岳梵才書記の下火 預請

「此れは是れ宗門直指の才、當機陽倒す涅槃臺、無陰陽の地春風轉す、火裏の優曇朶開く。夫れ惟れば、秀岳梵才書記、翰墨の任に居して棟梁の材を負ふ。多福の話頭を提撕して、三年受用、只だ竹を栽う。少室の祖意を漏泄して、一日の工夫、半は梅と爲る。生也、石火光中留むれども住ま



らす。死也、閃電機裏喚べども回らず。向上の鉗鉗下に觸れて、虚空消し鐵山摧く。這裏に到つて何物か恁麼に去り、何物か恁麼に来る。書記、還つて會す麼。」火把を抛つて、「燈籠壁に沿うて天台に上る。」

大初最公藏主の下火 預請

「最初の一句、最後の牢關、直に透過して看れば、綠水青山、夫れ以れば、大初最公藏主、道肥えて貌瘦せ、年老いて心間なり。大小の藏鑰を掌り、東西の序班に列る。方袍の 藹苜、圓頂の梅檀、位、十地已上に超ゆ。前輩の芍藥、後生の 茉莉、時二佛の中間に丁る。因は則ち因を用ひ、果は則ち果を用ふ。愚にして愚ならず、頑にして頑ならず。破草鞵三文兩文、雲無心にして軸を出づ。折拄杖七尺八尺、鳥飛ぶに倦んで還ることを知る。此れは是れ藏主平生著力底、若し復た向上に轉せば、文殊、普賢其の境界を失し、徳山、臨濟猶ほ塵寰を隔つ。這裏に到つて妙と説くも、罪過罪過。禪と道ふも、慙慙慙慙。手を長空の外に撒す、望む可し攀づ可からず。然も恁麼なりと雖も、虎斑は見易し、誰か人斑を窺はん。」火把を抛つて、「聞くや、雪峰は南趙州は北、還郷の曲菩薩蠻。」咄一咄す。

掬月軒主徳良藏主預請乘炬の語

「良男矣。七佛の師、倒に金毛の獅子兒に跨る、忽ち轉身を解する底の時節、一聲吼裂す五須彌。夫れ惟れば、掬月軒主、先聖を重せず、何ぞ舊規に拘らん。仙山五色の瑞雲、不老の藥を鍊る。寶泉一滴の甘露、破戒の厄に洒ぐ。應變自在、殺活時に臨む。三千刹界の袈裟、横に拽き豎に拽く。十二街頭の尺八、順に吹き逆に吹く。拄杖舞を作し、燈籠眉を開く。如來禪、祖師禪、水を掬すれば月手に在り。煩惱濁、衆生濁、花を弄すれば香衣に滿つ。畢竟是れ何物ぞ、端的相知らず。此れは是れ藏主平日の作略、更に格外の玄機有り、試みに山僧が提持するを看よ。」火把を抛つて、「咄咄、萬燈爐中の鐵蒺藜。」

迦葉佛、釋迦牟尼佛、是れ也。  
①名字を曉出するなり。于良史の春山月夜の詩に曰く、「春山勝事多し、賞玩して夜歸るを忘る、水を掬すれば月手にあり、花を弄すれば香衣に滿つ」と、自然妙得の義にたとふ。  
②蒺藜はばまびし、藥草也、三角の刺ある實を結ぶ、鐵蒺藜は鐵にて其の形に作れる兵具。

慶實藏主百年後の下火

「實相眞如體本然、百年三萬六千遷る、端無く棒頭に觸著し去つて、東海の鯉魚跳つて天に上る。實藏主實藏主、涅を不生と言ふ、翡翠踏躡す荷葉の雨。實藏主實藏主、槃を不滅と云ふ、杜鵑啼破す竹林の煙。」火把を抛つて、「向上の一路、佛祖不傳。」喝一喝す。

明谷叅公侍者預請乘炬の語

此郎廿五白雲の端、倒に驢兒に跨つて活路寛し、少林の無孔笛を吹き起して、還郷の一曲萬年



歡夫れ惟れば、明谷叅公侍者、青燈燒き盡し、黃卷讀み残す。南山に一條の龍鼻蛇有り、撿縦與奪。西川に八角の烏頭子を出す、甘苦辛酸。其の如來禪に參することは易く、蓋し祖師意を會することは難し。即佛即心、何ぞ彌勒五月の降誕を待たん。生に非ず滅に非ず、疾く瞿曇雙樹の涅槃に入る。鐵團圓百雜碎、百雜碎鐵團圓。虛空筋斗を翻し、日月朱欄に轉す。火把を抛つて、會すや、叅侍者叅侍者、門前の刹竿を倒卻せん。喝一喝す。

賀屋玄慶禪人の下火 預請

「金剛傳ふる外の事如何、慶喜の間端葉波を瞞す、刹竿頭に向つて身を轉じ去る、教海と禪河とを踏躐す。慶禪人還つて會すや、若し會得すと道はど、達磨、禪を會せず。梅瘦せて春を占むること少し。若し不會と道はど、瞿曇已に成道。庭寛くして月を得ること多し。會と不會と都來是れ錯、滅と不滅と畢竟佗に非ず。淨裸承當を絶す、空空空の時、眞も也た立せず、赤洒酒窠白没し。玄玄玄の處、妙も也た須らく呵す可し。水は竹邊より出で、風は花裏より過ぐ。喝一喝す。石女舞成す長壽の曲、木人唱へ起す太平の歌。」

①雙峰衆に示して曰く、南山に一條の龍鼻蛇あり、汝等諸人に須らく好看すべし。長慶曰く、今日堂中大いに人有つて喪身失命す。僧玄沙に舉以す、沙曰く、須らく稜兒にして始めて得べし、然も是の如くなりと雖も、我れば即ち不慧慶。僧曰く、和尚作麼生。沙曰く、南山を用ひて作麼かせん。雲門拄杖を以て峰の面前に據向して怕るる勢を作すと。雪峰は南山に一條の龍鼻蛇あり、諸人適切に看取せよといふ、長慶慧稜と玄沙師備と雲門文偃師との三師玩弄して、一は蛇の全威を是認し、一は蛇の全威を併吞し、一は蛇をして活氣あらしむ、自ら心中の主人公を借りて蛇となす、心の作用一に弄するもの、活手に待つものを示す。

三翁德惠庵主の下火 預請

「竺乾の猛將陣堂堂、惠劍光寒し三尺の霜、生死涅槃秋一夢、火中の菡萏覺めて猶ほ香し。惠庵主、惠庵に承當せよ。倘し復た未だ承當せずんば、頻に小玉と呼ぶも只だ檀郎を要す。鞭語の魯直帷帳中に坐す。或時は燕寝螺甲、沈水隨身の兜率、袈裟角に裏む。或時は魚行酒肆姪坊、看るや、山色清淨、聞くや、溪聲廣長、轟直に轉じ去れ、思量に涉ること莫れ。凡聖に通せず、封疆を把定す。然も是の如くなりと雖も、向上の田地に到らんと欲せば、山僧爲に擧揚せん。火把を擲つて、昆侖奴齊しく怒發して、門外の金剛を推倒す。」

柏庭祖永尼首座の下火 預請

「永劫の無明淨法身、法身覺了すれば卻つて塵を生ず、到頭霜夜前溪の月、龍女の寶珠磨すれども磷かす。夫れ惟れば、柏庭祖永尼、市中に隠をトし、屋裏に春を藏す。松源の餘波を海東の外に傳へ、蘭溪の剩馥を河内の民に施す。蓋し以れば、吾が首座、靈樹に到る。尼長老の聖因に住するに勝れり。有餘涅槃、無餘涅槃、花間夢を作す雙胡蝶。大善知識、小善知識、棒頭敲き出す玉麒麟。迷悟を立せず要津を把定す。慈慶の時節、慈慶の阿鼻の依正とか説かん、什麼の苦海の沈淪をか論せん。生涯洒洒落落、心地歴歴明明。此れは是れ祖永大姊、三萬日を斷送して、十二辰を使ひ得る底。別に西來意を會せんと要せば、

②梵語「ゲアウラ」の譯、金中最剛の意、堅と利との二義あり、堅は萬物能く是れを碎破し得ざるが故に、利は能く萬物を擊破するを以てなり、多くは佛智、大智慧、摩訶般若等に譬ふる語なり。



柏樹子の成佛せんことを待つて、汝に向つて指陳せん。火把を擧して、虚空筋斗を翻し、燈籠笑つて悶悶。火把を抛つて、「因。」

久庵桂公尼首座の下火 預請

「少林の煥桂久昌昌、眞丹と搏桑とを蓋覆す、昨夜毘嵐忽ち吹き倒す、百年一夢醒めて猶ほ香し。夫れ以れば、久庵桂公尼、精神掬す可し、意氣當り難し。末後の牢關是れ放開、是れ捏聚、本來の面目。濃抹に非ず、淡粧に非ず。生死を截断して金剛王を抛つ。塵塵無垢世界、歩歩涅槃會場。青山緑水、體露眞常、此れは是れ大姉の間受用。若し向上に轉じ去らんと要せば、別に山僧が擧揚を聴け。火把を抛つて、黄金鑄出す崑崙鐵、火裏の龜毛數尺長し。」咄一咄す。

宗銀尼首座の下火 預請

「天堂地獄假銀城、遊戲神通傀儡棚、春夢一場頻に喚起す、曉鶯枝上花を出づる聲。夫れ惟れば、寶生尼寺住持宗銀尼首座大姉、晚節保ち難し、坤徳、利貞なり、少林門下の總持肉を得たり。法華會上の菩薩名を求む。一枝の佛法的、百草の祖意明明。山として雲を帯びすといふこと無し、人人具足、水有り皆月を含む。箇箇圓成、須彌燈

①放開の反對、つまり集むること。  
②眞如常住の簡語、佛法究極の意、第一義諦を示す。  
③坤徳は女徳をいふ。  
④一切萬象の意にして、差別界の事象を概括する語なり、語はもと麗居士の「明々たる百草頭、明々たる祖師意」といふに基づく。從容錄第四則の頌に「百神頭上邊の春、手に信せて拈じ來つて用ひ得て親し」と。又信心銘拈古に「殺活の杖子を提起して、百草頭上に向つて七穿八穴橫拈す」と。

王佛、鍼孔に入り、勝熱婆羅門の火坑を出づ。會す麼。火把を抛つて、「自己清淨を認むること莫れ、直に毘盧の頂を踏んで行く。」喝一喝す。

檀溪宗香尼首座の下火 預請

「法身堅固本來の香、郁郁乎として十方に薰徹す、試みに心頭の火を滅却して看よ、鑊湯爐炭自ら清涼。夫れ惟れば、檀溪宗香尼、温面標語、石心鐵腸、散花の天、維摩の黙黙を勘破す。半杓の水、末山の嬢嬢を賺過す。無明即明、梅檀木を焼いて猗蘭の臭氣を奪ふ。諸相相に非ず、桃李の實を貪つて梅花の孤芳を忌む。出生入死、窠臼を存せず、戒皮定肉、分張するに一任す。正與廢の時、丙丁童子を撈倒し、閻羅大王を棒殺す。丈夫の作略、誰れか肩て抵當せん。然も恁麼なりと雖も、更に眞歸の處有り、山僧が擧揚を聴取せよ。火把を抛つて「玉樓翡翠を巢はしめ、金殿鴛鴦を鎖す。」咄一咄す。

①心頭を滅却すれば火も又涼しの意。  
②高安天愚の法嗣、筠州の人。  
③天台宗にて法華經の意によりて立つる三種の佛性、一には緣因佛性（智慧を緣助して益も明かならしむる六度等の修行）、二に了因佛性（眞如の理を照了し、證悟する智慧）、三に正縁佛性（一切の衆生が具へたる眞如の理これ正しく佛となるべき本性なり）をいふ。

桃谷周仁尼首座の下火 預請

「千年の桃核舊時の仁、惡錯鈍に觸れて點塵を絶す、靈雲不疑の地に到らんと欲せば、花は開く空劫以前の春。夫れ惟れば、桃谷周仁尼、預め未來の苦果を懼れて、頓に佛性の三因を了す。靈山の



法華會中に臨むときは、則ち無垢の勝光佛を壓倒す。洋嶼の蘆竹篋下に觸るときは、則ち秦國大夫人を冷笑す。或時は南方界に化を最め、或時は北斗裏に身を藏す。赤洒酒、紅絲綿を斷す、活鱖、鐵磨の輪を碎く。然も與麼なりと雖も、千里不傳の處、大休歇の地に到るを要すや。試みに火把子の指陳を聴け。火把を抛つて、雲破れ月來つて花影を弄す、寒山手を拍して笑問。喝一喝す。

玉英祥瑤尼首座の下火 預請

「大乘の法器魯の珮瑤、本有圓成君自ら看よ、未だ一錠を下さざるに錠碎し了る、青山月上つて影團團。夫れ惟れば、玉英祥瑤尼、竹の節有るに似、環の端無きが如し。春嶺梅に入る、村獺の虛能、明鏡を打破す。雪庭柏を埋む、野狐精の達磨、空棺を蓋卻す。悉有佛性、佗の瞞を受けず。淨裸裸、承當を絶す、甚の真如解脱とか説かん。赤洒酒、窠臼没し、什麼の菩提涅槃をか論せん。然も恁麼地なりと雖も、向上還つて事有り、心肝を吐露し去らん。火把を抛つて、石女雲中に舞を作し、木人萬年歌を奏す。咄一咄す。

桃雲宗悟尼首座の下火 預請

「迷悟を分たす凡聖を絶す、百歳の光陰春夢の中、春夢醒め來つて一年無し、桃花舊に依つて面皮紅なり。夫れ惟れば、桃雲宗悟尼、心鏡清淨、戒珠玲瓏、一氣を警轉して、劉鐵磨の作略を具す。

五障を掃除して橋壘彌の遺蹤を躡む。智行運動、理事圓融、文殊に二文殊無し。胸中吉祥の宅、彌勒に半彌勒有り、天上の兜率宮。了了の時、霞碧落を穿ち、玄玄の處、月清風を拂ふ。會すや、石火も及ぶこと莫く、電光も通すること罔し。火把を抛つて、喝一喝す。

花屋宗因尼首座の下火 預請

「這の野狐精不味の因、大雄峯下驢身を解す、端無く踏倒す涅槃の窟、鐵樹花開く火裏の春。夫れ惟れば、花屋宗因尼、金剛の圈を透り、鐵磨の輪を轉す。濁世の糞糠を掃除して、馬祖の簸箕跳不出。形山の一寶を秘在して、龍女の明珠磨すれども磷かす。幻生幻滅、線路を放開す、不去不來、紅塵を截斷す。更に送行の句有り、山僧が指陳を聴け。火把を抛つて、夜深けて一片、虚樞の月、寫し出す梅花面目の眞。露。

春芳宗椿尼首座の下火 預請

莊椿一萬六千歳、昨夜毘嵐吹倒し來る、試みに聴け無上眞の曲調、花間の胡蝶三臺を舞ふ。夫れ惟れば、春芳宗椿尼、形枯木の如く、心死灰に似たり。兜率の三關を透過するときは、則ち葵花眼無うして日に隨つて轉す。臨濟の一喝に觸著するときは、則ち芭蕉耳無うして雷を聞いて開く。鏝湯爐炭一時に滅し、劍樹

①馬祖道一禪師、簸箕を作る家に生れたるを以て、馬祖を馬簸箕と稱し、轉じて大馬祖の口唇の簸箕に似たる點より、又馬祖の言説をも馬簸箕といふ。  
②格子より洩る、月。  
③兜率從悅禪師、三つの機關を設けて學人を接待す、一、撥草參玄は只だ見性を圖る、即今上人の性、甚の所に在る、二、自性を識得すれば方に生死を脱す、眼光落地の時、什麼が脱せん、三、生死を透得すれば、便ち去處を知る、四大分散して何の處に向つてか去ると、是れなり。



刀山一時に摧く、是れ甚麼の時節ぞ。看よ看よ、燈籠露柱笑哈哈。錯錯。

雲仲心 祥尼首座の下火 預請

「率陀天上の雲を劈破して、行に臨んで一朶好し君に呈するに、龍華三會夢中の説、殘漏聲沈んで曉色分る。祥首座祥首座、夢中の説、還つて聴取すや。三世の諸佛も亦夢を説く、前臺花發けて後臺に見る。六代の祖師も亦夢を説く、上界鐘清うして下界に聞く。山僧も亦夢を説く、漆園の胡蝶若箇影を分つ。末後慈だ慇懃、槐國の蟻蟻多少群を作す。生死涅槃昨夢のごとし、鐵枷三百斤を脱脚す。淨裸裸拘束没し、赤洒酒功勳を絶す。與麼の時節阿鼻獄卻つて夢宅と成る。丙丁童子笑閻閻。」喝一喝す。

希溪善灌尼首座の下火 預請

「迅機截斷す灌溪の流、最後の牢關去つて留まらず、但だ看る百年三萬日、樅花半は照して夕陽收まる。夫れ惟れば、希溪善灌尼、繡佛晋を欺き鐵磨劉を瞞す。博く毘尼を究めて西天の、苾芻草を學ぶ。先聖を帶累して東福多子の榴を劈く。是なるときは則ち總持肉を得、非なるときは則ち演若頭を失す。玄玄玄の處、又須らく呵す可し。涅槃に入らざる清淨の行

①龍華は彌勒菩薩成道の際に於ける菩提樹の名。

②漆園は莊子をいふ、嘗て漆園の吏となる故にいふ。

③槐國は槐安國をいふ、淳于棼、廣陵に家す、宅の南に古槐樹あり、棼醉ひて其の下に臥す、夢みらく、二使者曰く、槐安國の王、遣へ奉ると、棼、使に隨つて空中に入る、榜を見らる、曰く、大槐安國と、其の王曰く、吾が南柯郡の政事理らず、卿を屬し守となして、之れを治めしめんと、棼、郡に至りて凡そ二十歳、送りて歸らしむ、遂に覺む、因りて古槐下の穴を尋ぬるに、洞然として明瞭なり、一榻を容るべし、一大蟻あり、乃ち王なり、又一穴を尋ぬるに直ちに南柯に上る、即ち棼が守りし所の郡なりと。

者、了了了のとき、了可き無し。地獄に墮せざる破戒の比丘、五逆消滅萬機罷休す。火把を抛つて、會すや、向上の那一路、何の處にか蹴由を免めん。喝一喝す。

前住明禪玉宗琳尼藏主、預め百年後乘炬の語を請ふ

「百歳の光陰瞬息の中、五蘊有に非す又空に非す、鐵鋒頭上轉身の路、歸らば便ち歸る可し兜率宮。夫れ惟れば、宗琳尼、衆流を截斷して、偃跛脚を瞞す。正法を扶起して岳嶺翁を慕ふ。一雙の胡蝶葵花に上る。堅固法身長有り短有り。兩箇の黃鸝翠柳に啼く。真如自性始無く終無し。赤洒酒拘束没し、淨裸裸維籠を絶す。與麼の時節、向上の那一句、如何が君が爲に通せん。火把を抛つて、看よ看よ、丙丁童子面門紅なり。喝一喝す。

一宗秀統尼藏主の下火 預請

「釋門の正統苾芻尼、冷笑す少林の尼總持、夜半人有り負ひ將ち去る、鐵鋒頭上の五須彌。夫れ惟れば、一宗秀統尼、預め鶴林滅度の相を示して、龍華下生の時を待たす。眼裏の花を掃除するときは、則ち劍樹刀山、即ち眞如界。心頭の火を滅卻するときは、則ち鐵湯爐炭、清涼池と變す。這裏に到つて甚麼の五障とか説かん、什麼の三祇をか論せん。機輪轉する處閃電も猶ほ遅し。尼藏主還つて會

④唐詩選飲中八仙歌に、蘇晉長齋繡佛の前、醉中往々進禪を愛す」と、繡佛は刺繡せる佛像をいふ。

⑤印度所生の草、此の草五徳を具ふと、之れを出家人にたとふ。

⑥ちんばあしをいふ。

⑦菩薩が佛果を得給ふ途程たまた修行の年時なり。



すや。火把を抛つて、「花の來處を問はんと欲すれば、東君も亦知らず。」喝一喝す。

寶山珍尼藏主の下火 預請

「寶山に秘在す滄海の珍、靈光一點縹緲せず、端無く紅爐の雪に和卻して、百鍊し將ち來つて色轉た新なり。夫れ惟れば、寶山珍尼藏主、末山の頂を坐斷し、鐵磨の輪を推轉す。清淨本然、十方三界、世尊の面、常照寂爾、萬象の中、獨露身頭、顯露物物、全眞線路を通せず、要津を把定す。然も恁麼なりと雖も、更に向上宗乘の事有り、試みに山僧が指陳を聴け。」火把を抛つて、「白灰撒ひ出す玉麒麟。」喝一喝す。

月心宗珠尼藏主の下火 預請

「衣裏の明珠琢磨せず、一錠に錠碎す看よ如何、大千俱に壞する底の時節、全身を放下して火蛇に與ふ。夫れ惟れば、月心宗珠尼、舌霹靂を轟し、辯懸河を瀉ぐ。一路涅槃門、水有り月を含む。十方薄伽梵、風無きに波を起す。身を北斗に藏し、夢を南柯に託す。箇箇圓成、甚麼の現在佛、過去佛とか説かん。人人具足、什麼の煩惱魔、生死魔をか論せん。了了の時、沒交涉。玄玄の處、早く蹉過す。然も是の如くなり雖も、未後の一句、還つて會得すや。」火把を抛つて、「石女舞成す長壽の曲、木人唱へ起す太平の歌。」

悅巖宗忻尼藏主の下火 預請

「一陽に陽翻す生死海、一拳に拳倒す涅槃堂、棚頭の傀、儼百年の夢、無絲の玉線を牽き得て長し。夫れ惟れば、悅巖宗忻尼、釘背鐵舌、錦心繡腸。娑婆即ち是れ華藏、伽耶豈に寂光に非ざらんや。杜鵑啼破す落花の村、赤酒酒拘束没し、翡翠踏蹴す荷葉の雨、淨裸承當を絶す。然も恁麼なりと雖も、向上宗乘の一著、試みに山僧が擧揚を聴け。」火把を抛つて、「安禪は未だ必ずしも山水を須ひず、心頭を滅卻すれば火も自ら涼し。」喝一喝す。

摠持開基頓庵宗圓尼大姉の下火 預請

「少林門下の摠持尼、元自ら圓成頓機を了す、再見何ぞ勞せん百年の後、殘花啼落す杜鵑の枝。夫れ惟れば、摠持開基頓庵宗圓大姉、短世風驚き雨過ぐ、刹那物換り星移る。鶻噪鴉鳴、檀郎を要して小玉と喚ぶ。牛搏馬踏、鐵磨を拽いて大瀉に到らしむ。機輪轉する處閃電も猶ほ遅し。淨裸赤酒酒、甚の兜率泥犁とか説かん。也た奇快也た奇快、昨夜有力の者、醜雞須彌を負ひ去る。」火把を抛つて、「唵。」

速縁妙淨禪尼百年後下火の語

「鍊り出す 舍那清淨の身、紅爐焰裏纖塵を絶す、線路を放開して消息を通す、雨過ぎて青山色轉た新なり。夫れ惟れば、速縁妙淨禪尼、預め苦果を權れて、蚤に良因を修す。婆子燒庵正に好し趕ひ出すに。倩女離魂

① 夫をいふ。  
② 醜雞は酒に生ずる蟲なり、莊子に「孔子、老聃に見え、顔淵に告げて曰く、兵の道に於けるや、それ猶ほ醜雞の如きか、夫子の我が覆を發する微りせば、吾れ豈に天地の大全を知らんや。」劉師道の詩に、「醜雞糞裏の天」と、列子にも「醜雞は酒に生ず」とあり、小



那箇か是れ眞。生也、樹は風の體態を呈す。死也、波は月の精神を弄す。之れを潤せども濁らず、磨すれども磷かす。然も恁麼なりと雖も、向上の田地に到らんと要せば、試みに山僧が指陳を聴け。火把を抛つて、「咄咄、冷灰撥ひ出す玉麒麟。」

琴溪妙泉禪尼の下火 預請

「天に先つて物有り黄泉に徹す、自性の彌陀地を易へば然らん、從來する所無く所去する處無し、頭を擧すれば殘照住居の西。夫れ惟れば、琴溪妙泉尼、迷雲盡きて心月圓なり。人は静中に向つて忙はし。臺山の婆子を勸破す、路は平處より峻し。趙州老禪を瞞卻す、廣長舌を掉ふこと八十餘年。白濁濁清寥寥、涅槃の一路を踏倒す。淨裸裸赤洒洒、生死の兩邊を截斷す。這裏に到つて甚の五障とか説かん、甚の十纏をか論せん。然も恁麼なりと雖も、向上卻つて事有り、山僧が敷宣を聴け。火把を抛つて、「木人石女希有と叫ぶ、臘月花開く火裏の蓮。」喝一喝す。

月沼明圓禪尼の下火 預請

「一輪の心月本來圓なり、明鏡臺に非ず碧天に輝く、無孔の鐵鎚鎚碎し

了る、江南の野水白鷗の前。夫れ惟れば、月沼明圓禪尼、眉宇秀發、和氣霽然、三世の妙德尊、智母と稱す。五障の婆娑女、華鮮と號す。邪を捨て、正に歸し、實を顯し權を開す。加之、清淨の行者涅槃に入らず、翡翠踏躡す荷葉の雨。破戒の比丘地獄に墮せず、鷲鷲衝破す竹林の烟。就くこと莫れ錯錯。須らく呵すべし玄玄。禪尼還つて會す麼。火把を抛つて、「向上の一路千聖不傳。」咄一咄す。

春榮慶壽尼大姉の下火 預請

「閻浮壽盡きて百年移る、泥洹の活路を踏倒し來る、一點の塵埃何の處にか著けん、火蛇吞卻す五須彌。夫れ惟れば、春榮慶壽尼大姉、水中の乳味、泥裏の摩尼。或底は繞路に禪を説く、木塔を喚んで老婆子と作す。或底は、當陽直指、林際を瞞じて、小厮兒と稱す。其の人金の如く玉の如し、磨すれども磷かす、涅にすれども縋ます。生也、春風桃李花の開く日、死也、秋雨梧桐葉の落つる時。淨裸裸定肉を割き、赤洒洒戒皮を脱す。萬機休罷、佛祖も知らず。向上に轉じ去れ、多岐に渉ること莫れ。與麼の時節、大姉還つて會すや。火把を抛つて、「會と不會と都來錯、江月照し松風吹く。」

雲林宗怡尼大姉の下火 預請

「直に雲林を把つて鶴林と作す、紅爐煉り出す、紫磨金、端無く入得す如來地、一段の靈光古今を

を以て大を負ふを云ふ。

① 尾盧舍那の略なり。

② 老婆が庵主を點檢せし逸話、又公案として依用せらる、昔婆子あり、一庵主を供養すること二十年を経たり、常に一妙齡の女子をして飯を送りて給侍せしむ、一日女子をして抱定せしめて曰く、「正當恁麼の時如何、」庵主曰く、「枯木寒巖に倚る、三冬暖氣なし」と、女子、婆子に舉似す、婆曰く、「我れ二十年間たゞ此の俗漢を供養し得たり」といつて、終に逐ひ出して庵を燒却せりといふ。一休和尚之れを頌して曰く、「老婆心賊の爲に梯を遺す、清淨の沙門に女妻を與ふ、今夜美人若し我を約さば、枯楊春老い更に梯を生ぜん」と。

③ 趙州二庵主を勸破すること前に見ゆ。

④ 當陽は文明の義、左傳に、「文

公四年天子陽に當つて諸侯命

を用ふ」とあり、果實に「師

古の曰く、天子朝に臨む、之

れを當陽といふ」と。

⑤ めし使の小兒をいふ。

⑥ 紫磨黄金、紫金ともいふ、紫

色の光澤ある黄金をいふ、も

と閻浮檀金を稱する語なれど

も、轉じて佛身を稱するに至

る、大聖を現す表徴なり。



照す。怡大姉怡大姉、門より入る者は自家の珍に匪す。心即ち是れ佛、佛即ち是れ心。心外に佛を求むるは、海底に鍼を摸るがごとし。清淨の行者、涅槃に入らず、雨を聴いて寒更に盡く。破戒の比丘、地獄に墮せず、門を開けば落葉深し。別に向上の那一窺有り、大姉何の處に向つてか參尋せん。火把を抛つて、「石女舞成す長壽の曲、高山流水知音を絶す。」喝一喝す。

芳室見春尼大姉の下火 預請

「一場の春夢百年の榮、地獄天堂客路程、到り得歸り來つて別事無し、杜鵑啼落す月三更。夫れ惟れば、芳室見春大姉、梅檀の圓頂、桂籍の芳名、親しく鶴樹の終談を聞く、能く苾芻尼の戒律を持つ。龍華の初會を待たず、自ら桃花色の衆生と作る、豈に修證を假らんや。本來圓乘、權大乘、實大乘、火は熱し水は冷かなり。棒正覺喝正覺、電卷き雷轟く、甚麼の眞如佛性とか説かん、甚麼の聖解凡情をか論せん。石女長壽を舞ひ、木人太平を歌ふ。然も與麼なりと雖も、別に少林の那一曲有り、陽關の第四聲を唱ふること莫れ。」火把を抛つて、「須彌座下の烏龜子、直に毘盧頂上を蹈んで行け。」喝一喝す。

古柏宗庭大姉の下火 預請

「庭前喫し盡す黄金の草、這の老牯牛鼻巴無し、忽ち瀉山に到つて角を

陽關は送別の曲、唐の王維の元二の安西に使用するを説る詩に、「渭城の朝雨輕塵を洒す、客舍青青柳色新なり、君に勸む更に盡せ一杯の酒、西陽關を出づれば故人なからん。」後人之れを陽關の曲といふ、三疊して之れを唱ふ、蘇軾の詩に、「陽關三疊君須らく移すべし、墨西を除却して歌を解せ

す。又白樂天の詩に「相違ふ且く推辭し去る莫れ、唱ふるなき陽關第四聲。」

拗折す、化して火裏の牡丹花と成る。夫れ惟れば、古柏宗庭大姉、三界の獄を出でて五蘊の家を離る。死と説き生と説く、炎天の梅葉に彷彿たり。夢の如く幻の如し、雪裏の蕉芭に依倚たり。脚下の紅線を截斷して頂上の鐵枷を脱卻す。吾が宗に語句無し、須ひす口吧吧なることを。「火把を抛つて、「犀は月を翫ぶに因つて紋角に生じ、象は雷に驚されて花牙に入る。」喝一喝す。

慈徳庵春深明榮大姉の下火 預請

「榮耀は花の如し花は夢に似たり、夢中三萬六千春、靈光味さす涅槃の月、影は浮雲の淺き處に在つて新なり。夫れ惟れば、某名、慈を以て宅と爲す、維れ徳隣有り。預め當來の苦果を怖れて、茲に現在の勝因を修す。有時は七軸の蓮を轉じて、八歳の龍女を教壞す。有時は一莖草を拈じて、丈六の金身を熱瞞す。即心即佛、全假全眞。常啼誤つて東請し、善財強ひて南詢す。鐵壁銀山、凡聖を通せず、愛河欲海、要津を把定す。正與麼の時、生死去來本住處無し、地獄天堂、豈に鐵塵を立せんや。赤條條空索索、口吧吧笑閻閻。此れは是れ明榮大姉平生の如幻三昧底、即今火焰裏に向つて大法輪を轉す。諸人還つて看るや、倘し或は未だ委悉せずんば、試みに山僧が指陳を聴け。」火把を抛つて、「白灰拂ひ出す紅麒麟、錯錯錯。」

太虛理圓大姉の下火 預請

國譯圓滿本光國師見桃逢 卷之四



「本是れ圓成の那一佛、靈光不昧古來今、忽然として寂滅現前する處、雨殘紅を洗つて新緑深し。夫れ以れば、太虚理圓大姊、外縁飾少く、内戒禁を持す。三萬六千日の前、繡工夫、梅と爲つて香魂夢に入る。三萬六千日の後、間受用、竹を栽ゑて塵事に心無し、彌猴の鏡を打破して、翡翠の簪を抛擲す。加之、總持少室を扣いて、投機強ひて皮髓を分つ。徳雲別峯に在つて、相見何ぞ參尋を勞せん。線路を放開して官には針をも容れず。生魔死魔、粘を去り縛を解す。男相女相、鐵に點じて金と成す。這裏に到つて甚麼の七凹八凸とか説かん、什麼の四大五陰をか論せん。別に轉身の句有り、試みに火把子の獅子音を發するを聴け。火把を抛つて、「末山の頂日杲杲、鐵磨の輪風凜凜たり。」喝一喝す。

玉江道琳禪定門の下火 預請

①竹は中空虚心なるを以ていふ。  
②美石の名、又は玉のふれる清き音をいふ。

「虚空地に落つる時を待たず、活機前阿毘を蹈倒す、黃頭碧眼間夢無し、蘿月松風吹くに一任す。夫れ惟れば、玉江道琳禪定門、瑚璉價有り、琳瑯班無し。隨緣眞如、不變眞如。雪裏の芭蕉摩詰が畫、分段生死、變易生死。炎天の梅葉簡齋が詩。展ぶるときは則ち十法界に徧し、收むるときは則ち五須彌を呑む。與麼の時節、什麼の人空法空とか説かん。淨裸裸、天に四壁無し。什麼の眞諦俗諦をか論せん。赤洒酒、地に八維を絶す。泥垣の一路多岐に涉ること莫れ。火把を抛つて、「看よ看よ、紅爐放出す鐵烏龜。」喝一喝す。

越州太守雲江守慶居士の下火 預請

預請

「魔軍百萬の兵を掃蕩して、七花八裂す涅槃城、凱歌の一曲忽ち歸り去る、屋後の松風愈好聲共しく惟れば、越州太守雲江守慶居士、義井古を汲み、心地精を研く。厥の勇也、蚤に六箱を學ぶ、張子房が黄石に従ふが如し。厥の節也、二主に仕へず、司馬氏の淵明に於けるに似たり。紅塵劍三尺、白髮雪千莖。此の郎子に就いて號を求む、吾が師他の爲に安名す。再び龍潭の舊房を修して、萬年計ることを作す。假に鶴林の滅度を示して、三日庚に先づ。平生鞭頭の手段、通身金剛の眼睛。聖に在つては聖に同じ、凡に在つては凡に同す。青山限り無く好し。佛に逢ふては佛を殺し、祖に逢ふては祖を殺す。黃河徹底清し。空空空畢竟空、何物か恁麼に死す。錯錯錯都來錯、何物か恁麼に生ず。喝。更に向上の那一著有り、試みに山僧が施呈するを聴取せよ。」

神野氏雙月慧晃居士の下火 預請

預請

「不生不滅涅槃門、門外の青山月一痕、舜若多神驚いて舌を吐く、火蛇吞卻す鐵崑崙。夫れ惟れば、神野氏雙月慧晃居士、南嶽の祖に承けて東海の孫と稱す。道家の蓬萊、弱水三萬里を縮む。神野の種草、出雲八重垣を詠す。維摩居士を靠倒し、大覺世尊を罵呵す。放行するときは則ち虎穴魔宮一喝に

①舊本同呂蒙撰すと爲す、然れども其の文義三代の作に類せず、恐らくは後人の偽作ならん、蓋し莊子の金版六張の語によりて附會したるものなるべし、陸徳明の莊子釋文に謂ふ、太公の六韜は文武虎豹龍犬なりと。



喝散し、把住するときは則ち、鶴樓鵲洲一陽に踞す。淨裸赤洒洒、窠白を離れ籠樊を絶す。更に向上宗乘の事有り、吾れ齒牙の餘論を惜まず。火把を抛つて、「聞くや、杜鵑啼破す落花の村。錯錯。」宗靖居士百年後の下火

火把、圓相を打して、「第一の達磨陶靖節、蓮社を修せず禪に參せず、人本有圓成佛、秋菊春蘭地を易へば然らん。夫れ惟れば、宗靖居士、騎射兩ながら得たり、文武兼ね全し。竺土の黃面老、一卷の兵書を説く、籌を運し勝つことを決す。林際の白拈賊、三玄の戈甲を施す。鋭を執り堅を被す。意氣雷霆を奔らしめ、眼睛坤乾に輝く。世縁淺うして道根深し。黃太史、五祖を稱す、天魔降し波旬伏す。韓京兆、大顛に參す、菩薩の第十地を超え、居士の不二門に入る。有餘涅槃、無餘涅槃、活計を鬼窟に作す。半字の知識、滿字の知識、妙手を龍泉に試む。鐵團圓百雜碎、華甲子萬斯年、別に轉身の處有り。山僧重ねて宣べんと欲す。火把を抛つて、「倒に鐵馬に鞭つ春風の裏、須彌の最上巔を抹過す。」喝一喝す。

玉麟宗仁居士の下火 預請

「能仁元是れ大醫王、壽域萬年八荒を開く、試みに看よ 五千の貝多葉、願神換骨の一靈方。夫れ惟れば、玉麟宗仁居士、烏豆の嚙吻、狼毒の肝腸、佐使君臣、本草經を佛日に誦んず。焙乾、生熟、炮

① 黃鶴樓、鵲洲をいふ。  
② 六十一歳を華甲といふ、華の字を分析すれば、十の字六つと一の字一つよりなる故に云ふなり、なほ邦俗に八十八を米年といふが如し。  
③ 五千餘卷の經卷をいふ。

灸論を湛堂に學ぶ。四味の平胃散を點して、一念相應湯と名く、能く邪氣を除き忽ち顛狂を治す。面癍煙に染んで木瓜の呆風子を瞞す。力民社を拯ふて人蔘の司馬光を欺く。或時は八火を用つて、般若波羅蜜を煉り、或時は三熱を除いて、知見解脱香を抹す。實を瀉し虚を補ふ、味脾胃を和す。空に沈み寂に滯る、病膏肓に入る。幻生幻滅、無病に艾を著く。持齋持律、禁物糧を絶す。能殺能活、吾が愚老に任す、患患患旨、他の謝郎に還す。菩提果熟し、安心藥良なり。然も與麼なりと雖も、至聖の命脈、陰陽に屬せず。仁居士仁居士、冬來の事如何が商量せん。火把を抛つて、「疎山の作略將軍の令、舊に依つて京師 大黃を出す。」

心源宗徹居士の下火 預請

「西江吸盡して心源に徹す、靠倒す龐蘊居士の門、到り得歸り來る底の時節、杜鵑啼過す落花の村。夫れ惟れば、心源宗徹居士、武門の閥閱、法社の藩垣、此の郎迹を蓬島に託す。其の先姓を菅原と賜ふ。丈夫の威雄を振ふときは、則ち溟鵬九萬里の名翼を展ぶ。大善知識に參するときは、則ち野狐五百生の精魂を離る。碧巖集昔焼卻す、黃石の書今尙は在す。有餘

③ 三十九卷、明人李時珍が三十年の歲月を費して著したる書にして、子書の醫家類に屬す、寛文十二年の和版あり。蓋し此の人醫師なりし。④ 諸の龍陀に三患あり、之れを三熱といふ、一に熱風熱砂身に付き、その皮肉骨髄を燒き苦惱をなす、二には惡風吹起りて、蛇龍の居所及び飾衣等を失はしめ、龍身を苦惱せしむ、三には諸龍娛樂の時、金翅鳥あり、龍の所居に入りて生るゝ所の龍子を搏奪して之れを食ひ、龍をして恐怖せしむと、法華經に見ゆ。  
⑤ 疎山光仁禪師、洞山良价禪師の法嗣、疎山の有句無句の公案名高し。  
⑥ 醫科植物、支那原産の多年生草、高五尺に達す、葉大形、掌狀に淺裂し、且つ鋸齒を有



涅槃、無餘涅槃、水枯れ雪盡く。棒下の正覺、喝下の正覺、電卷き雷奔る。諸聖の解脱を求めず、豈に閻王の平反を借らんや。淨裸裸、赤洒洒、明呆呆、暗昏昏、更に眞の般若有り、無説又無言。會す麼。炬を抛つて、「火光三昧に入得して看よ、黄金鑄出す鐵崑崙。」喝一喝す。

前の豊州太守和智氏太成宗居士の下火 預請

「此の郎今代の一英雄、未だ麒麟に上らざるに先づ功を譲り、從來する所無く所去する無し、夕陽は長く我が西に在つて紅なり。夫れ惟れば、前の豊州太守、棟梁の質を具し、葵菴の忠を抱く。威十方に振ふ、譬へば漢の隆準公の沛邑に起るが如し。名四海に喧し、恰も宋の執拗夫が元豊に出づるに似たり。忽ち國家の興盛に遇ふ、永く山河の始終を誓ふ。或時は生死の流を截つて、臨濟三尺の劍を提ぐ。或時は威音の梁を築いて、石章一張の弓を揮す。箭鋒相柱へ毒氣以て攻む。白的的兮清寥寥、娑婆華藏を隔てず。淨裸裸兮赤洒洒、地獄天宮を管すること莫れ。千佛の一數、廣額兒刀子を抛つ、萬法不侶、龐居士心空と叫ぶ、最後の句有り、更に君が爲に通せん。」火把を抛つて、「泥牛月に吼え、木馬風に嘶ゆ。」喝一喝す。

江州建部左典廐鐵船宗堅居士の下火 預請

「法身堅固鐵團圓、吾が鉗鎚下に觸著して看よ、百雜碎兮百雜碎、涼風月を吹いて欄干に上す。共しく惟れば、某名、衝を筆陣に折き、將に詩壇に拜す、茂を騰げ英を飛ばす。朝廷の上に置くときは、則ち三槐九棘、根を深くし帯を固うす。山林の中に在るときは、則ち十蕙一蘭。將に謂へり、江州の白司馬、由來宛陵の梅都官、天女散花惟れ新なり。毘耶の老居士、假に病を示す、宗師落草且く爾り。瑞岩の主人公、何ぞ瞞を受けん。或時は武を能し文を能す、雲門の紅旗風偃す。或時は佛を殺し祖を殺す、林際の金剛霜寒し。泥洹の一路を陽驪し、生死の兩端に涉ること莫れ。然も與麼なりと雖も、更に頤神の妙術有り、君が爲に平安を報じ去らん。」火把を抛つて、「倒に一枝の笛を把つて、吹き起す萬年歡。」喝一喝す。

寂知宗空居士預請百年後乘炬の語

「太虚空に向つて鐵船を駕す、須彌頂上浪滔天、大唐載せ得て歸り來つて看れば、紅海棠開く秋日の西。夫れ惟れば、寂知宗空居士、才華俗を銷し、釣築賢を收む。法法圓融、斐相國、心を黄檗に傳ふ。塵塵解脱、陶酔漢、眉を白蓮に皺む。將に謂へり天地に先つて物有りと。元來淨土を離れて禪無し。或時は峭峻孤危、禪板蒲團、用不得。或時は遊戯三昧、舞衫歌扇、舊

して互生し、消化不真、漫性下續等に用ひ、又瀉下劑にも用ひらる。

① 從順の誠を有するに比す。

② 漢の高祖をいふ、史記に漢太祖高皇帝は堯の後なり、姓は劉氏、名は邦、字は季といふ、沛豐邑の中陽里の人也、母の媪大澤の陂に息ひて夢に神と遇ふ、時に大いに雷雨して晦暝なり、父の大公往きて交龍を其の上に見る、已にして劉季を産む、既準にして龍顔なりとあり。

③ 矢を受くる爲に的をかけ置く處。

共欄干に上す。朝廷の上に置くときは、

① 梅聖俞、名は堯臣、宋の宣州宣城の人、仁宗召して試み、國子監直講と爲り、都官員外郎に遷る、唐書を修するに預る、歐陽修の詩友たり、宛陵集四十卷を著す。

② 優休、法を黄檗禪師に受く。陶淵明など白蓮社に入り、惠遠法師と共に念佛を唱へしをいふ。

③ 仙人の罪せられて人間界に下れるもの、轉じて詩人などが事によりて、都より遠き所に謫遷せられたるものにいふ、李白少にして逸才あり、志氣豪放、飄然超世の才あり、天寶



因縁。回也儒門の知識と稱するを羨むと雖も、卻つて笑ふ軼が人間の講  
仙と作ることを。楓葉落ち兮荻花乾く。萬機休するときは則ち全く方寸に歸  
す。松風吹き兮蘿月照す。一念起るときは則ち早く大千を隔つ。涅槃の四柱  
を拗折して生死の兩邊に涉ること莫れ。錯錯錯、都て是れ錯。玄玄玄、須ら  
く玄を呵す可し。然も與麼なりと雖も、更に宗乘向上の事有り。試みに  
山僧が敷宣を聴け。火把を抛つて、「雨中に杲日を看、火裏に清泉を酌む。」

義翁宗高居士の下火 預請

「日高山を照して遍界明かなり、一人も復た暗中に行く無し、網珠範を  
垂る雜華藏、眼を開いて看來れば、乾闥城、夫れ惟れは、義翁宗高居士、  
光を縮み彩を鏗る、思を覃ばし精を研く、邪正分ち難し。天魔外道、八萬  
劫を了す。因果昧さず、野狐精魅、五百生を脱す。崑崙の鼻孔に撞着し、  
金剛の眼睛を突出す。兜率權に三關を設く、華嶽連天の色を擘開す。瞿  
曇一字を説かず、黃河徹底の清を放出す。轉身自在、受用縱橫。端的を識  
らんと欲せば、多程に涉ること莫れ。然も與麼なりと雖も、更に末後の句  
有り。山僧が施呈するを聴け。火把を抛つて、「滄浪の水濁らば、以て吾が足を濯ふ可し、滄浪の

の初め長安に至り、賀知章を  
見る、知章その文を見て歎じ  
て曰く、「予は謫仙人なり」と。  
②乾闥婆城、摩香城と譯す、龍  
神が空中に示現する城郭にし  
て、即ち彼の曼氣樓のことな  
り。大智度論に「日初出時城  
門、樓櫓、宮殿、行人出入を  
見る、日轉た高ければ轉た滅  
す、但だ眼見すべく、實ある  
にあらず、乾闥婆城を見る」  
とあり。

③南岳下十二世寶峰克文禪師の  
法嗣、兜率從悅禪師なり。  
④孟子の離婁に「孺子あり、歌  
ひて曰く、滄浪の水云々と、  
孔子曰く、小子之れを聞け、  
清まば斯に纒を洗ひ、濁らば  
則ち足を濯ふ、自ら之れをと  
る也」と、此の歌當時の俗語な  
り、漁父の辭にも引けり。

水清めらば、以て吾が纒を濯ふ可し。喝一喝す。

天真宗守信男預請乘炬の語

「真如自性天真を守る、元是れ金剛不壞の身、一夢百年三萬日、花は開く桃李火中の春。夫れ惟れ  
ば、天真宗守信男、預め苦果を懼れて、逆め良因を修す。起居動靜、六時念佛、禪詞蒸嘗、四序神に  
賽す。唐朝の白文殊、鳥窠師に參す、蒲牢夜吼ゆ。宋家の黃達磨、晦堂老に見ゆ、桂花露勻し。  
涅槃を證して涅槃に住せず、清風明月を拂殺す。生死を示して生死に染まず、溪水紅塵を截斷して、  
凡聖を通せず、要津を把定す。木人高く奏す長壽の曲、燈籠口を開いて笑聞  
間。然も恁麼なりと雖も、更に向上宗乘有り、試みに山僧が指陳を聴取  
せよ。火把を擲つて、「色色只だ舊に依る、青山雨後新なり。喝一喝す。」

寶隣宗善信男預請百年後乘炬の語

「善惡都來思量すること莫れ、阿爺の面目露堂堂、百年壽盡きて後の消  
息、火裏の蓮華遍界香し。夫れ惟れば、某名、維れ時大法の季運に丁つて、其の家積善の餘慶を保つ。  
釋迦を東土に揖し、彌陀を西方に念す。涅槃城を打破して、直に梅陽の竹篋子に觸る。生死の縛を截  
斷して、倒に林際の金剛王を捉ぐ。淨裸裸赤洒洒、窠臼を離れ承當を絶す。然も恁麼なりと雖も、若  
し向上に轉じ去らんと要せば、試みに真正の擧揚を聴け。火把を擲つて、「三足の金鳥飛んで海に

①白居易の鳥窠禪師に見ゆるな  
いふ、衆善奉行、諸惡莫作の  
語、名高し。  
②黃山谷、晦堂祖心に見ゆ、山  
谷木犀の話、前に見ゆ。  
③莊子に曰く、「鳥に足三あり」と。



入る、曉天舊に依つて扶桑を照す。喝一喝す。

春岳宗英信男の下火 預請

「蝸牛角上の一英雄、心地收め來る汗馬の功、吹いて紅爐燄中の雪と作す、刀山劍樹落花の風。夫れ惟れば、某名、才文武を兼ね、節始終を克す、五位の槍旗を豎つ。其の先、昔洞山の顯訣を傳ふ、三玄の戈甲を用ふ。此の老、今臨濟の正宗を興す。龜毛の箭を架し、兎角の弓を張る。或時は佛を殺し祖を殺す、寶劍光寒うして、塵塵解脫。或時は凡を鍊り聖を鍊る、金鏡影動いて、物物圓融。涅槃の窟窟を出で、生死の羅籠を脱す。本來圓成、麻矢は直く蓬矢は曲れり。當陽直指、李花は白く桃花は紅なり。恁麼不恁麼、一口に吸盡す西江の水。不恁麼恁麼、一棒に打破す太虛空。然も是の如くなりと雖も、後昆を保祐する底の一句、試みに丙丁童子に問取し去れ。」火把を抛つて、「面り王霸を陳す龍庭の上、手ら乾坤を抜く虎口の中。」

秦岳宗韓信男百年後乘炬の語

一韓佛を推く佛何ぞ推けん、端的邪を捨てて正に歸し來る、劫火洞然として毫末盡く、泰山舊に依つて碧崔嵬。夫れ惟れば、秦岳宗韓信男、箕

① 洞山真价禪師の五位頃の偏中至に曰く、兩刃鋒を交ふ、避くることを用ひず、好手猶ほ火裏の蓮の如し、宛然自ら冲天の氣あり」と。

② 莊子の駢拇篇に「長きもの餘りありと爲さず、短きもの足らずと爲さず、是の故に堯の脛短しと雖も、之れを續がば憂へなん、鶴の脛長しと雖も、之れを斷たば悲まん、故に性の長きは斷つ所に非ず、臺性の短きは續ぐ所に非ず、臺を去る所無きなり」と。

③ 陸巨大夫、南泉に見ゆ、問うて曰く、古人瓶中に一鷲を養ふ、鷲漸く長大にして出すこ

裘の業を繼いで、棟梁の材を負ふ。生死の流を截る、風塵三尺の劍。文武の道を學ぶ、丹心一寸の灰。法爾如然、鶴脛は長く、鴨脛は短し。無常迅速、牛頂没し馬頭回る。阿鼻獄を掀翻し、涅槃臺を踢倒す。赤洒酒、窠白を離れ、清寥寥、纖埃を絶す。然も與麼なりと雖も、後昆を保祐する底の活句。元亨利貞、徳大なる哉。火把を抛つて、「側に少林の無孔笛を把つて、風に和して吹き落す一枝の梅。」咄一咄す。

春澤宗光禪定門の下火 預請

「靈臺不昧靈光を發す、乾坤を映徹して覆藏を絶す、閻浮百年の夢を喚び醒して、曉鐘月落つ一聲の霜。夫れ惟れば、春澤宗光禪定門、備陽の華族、藤家の棟梁、全假全眞、晦堂、黃太史を接して、月中の桂子を示す。如夢如幻、南泉、陸大夫を召して庭前の花王を指す。鼻を穿ち眼を換ふ、腹を倒し腸を傾く。無明即明、饒湯爐炭。眞如地諸相に非ず、劍樹刀山古道場。赤洒酒全く窠白没し、淨裸裸何ぞ封疆を守らん。燈籠露柱を吞盡し、泥人金剛を撈倒す。然も恁麼なりと雖も、向上宗乘の事、只だ重ねて商量せんことを要す。」火把を抛つて、「安禪は未だ必ずしも山水を須ひず、身心を滅卻すれば火も自ら涼し。」

義江光忠信男の下火 預請

と能はず、鷲を損することを得ず、和尙作塵生か出すことを得んと、泉、大夫を召す、陸應諾す、泉、曰く、出せりと、大夫鼓に於いて省ありと。



「白髮丹心<sup>①</sup> 吠吠の忠、法社に金湯として全功を立つ、呵呵として手を拍して好し歸り去るに、失脚して踏躪す都率宮。夫れ惟れば、義江光忠信男、在家の菩薩、亂世の英雄、苦樂逆順、道其の中に在り。生死涅槃、芭蕉葉上に愁雨無し。擒縱與奪、電光影中春風を斬る。佛界魔界に入らず、頓に人空法空を了す。淨裸赤洒洒、窠臼を離れ羅籠を絶す。此れは是れ光忠禪、定門行履の處、猶ほ梅花の路未だ通せざる有り。」

火把を抛つて、「門外の金剛白汗出づ、丙丁童子面皮紅なり。」喝一喝す。

但州太守大用宗碩信男の下火 預請

「百年一枕、黒甜の餘、索索たる涼風秋墟に入る、大用現前軌則無し、龍泉斗を射て清虛を犯す。共しく惟れば、但州太守大用宗碩信男、世縁淺しと雖も、俗氣未だ除かず。是の故に、香至の季子、大乘の器を、赤縣の東に求む、暗に隻履を失す。竺乾の猛將、涅槃城を金河の側に構へて、徒らに兵書を説く。松源の黑豆の法を用ふるに依倚たり。頼川が雪芭直を畫くに彷彿たり。無滅無生、火光三昧を證得す。即空即假、物我一如を會し盡す。恁麼に轉じ去れ、敢て踟躇すること莫れ。」火把を抛つて、「乾坤を吞卻す、鹹眼の魚。」喝一喝す。

① 吠は田間の「みぞ」なり、畝は田の「うね」なり、田舎といふが如し、孟子に「舜吠畝の中より發り」とあり。  
 ② 黒甜は午睡なり、支那南方の俗語なり。  
 ③ 四天の初祖菩提達磨をいふ。  
 ④ 漢土一名赤縣神州といふ、史記孟軻傳に「中國名けて赤縣神州といふ、赤縣神州の内、自ら九州あり、禹の序する九州是なり」と。  
 ⑤ 王維字は摩詰、開元九年進士第一に擢んでらる、尙書右丞に遷る、頼川に別墅あり、故に又頼川といふ。名畫錄に頼川の圖を畫く、山谷野蠻、雲水飛動、意態外に出で怪々、端に生ず、秦大虛云ふ、「予病あり、高符中頼川の圖を携へて予に示す、予之れを閱して恍として惟と頼川に入るが如く、數日にして病愈ゆ」と。  
 ⑥ 心を養ふ五種の煩惱、一に次食蓋、二に瞋蓋、三に憍眼蓋、四に掉悔蓋、五に疑蓋、之れを五蓋といふ。  
 ⑦ 提婆達多をいふ。  
 ⑧ 雲門の示衆に曰く、「乾坤の内宇宙の間、中に一寶あり、形由に秘在す、燈籠を拈じて佛殿裏に向ひ、三門を將つて燈籠上に來す」と、形山は五蘊所成の肉身をいふ。宇宙乾坤に秘在する一寶を、其の儘に我等人人の五蘊山中に秘在す、宇宙と肉團と大小の差ある如くなれども、秘在する所の寶は一寶なり。又形山は名玉の產地故、暗に其の意をも含む、よつて荆字を打する也。

覺林宗圓信男の下火 預請

「光萬象を吞んで月孤圓、心外に心を求む錯つて果然、生死涅槃是れ常事、等閑に踢倒す率陀天。夫れ惟れば、覺林宗圓信男、時節因縁、柏樹の成佛を待つこと莫れ。當陽直指、頻に落葉の單傳を掃ふ。正覺喝下、寂滅現前、甚の七顛八倒をか説き、甚の五蓋十纏をか論せん。然も恁麼なりと雖も、後昆を保祐する底の活句、試みに火把子の敷宣を聴け。」火把を抛つて、「頭を擧すれば殘照在り、元是れ住居の西。」喝一喝す。

續芳宗繼信男の下火 預請

「武門の閭閻箕裘を繼ぐ、亂世の英雄獨り尤を抜く、生死涅槃是れ常事、一刀兩段凡流を截る。夫れ惟れば、續芳宗繼信男、調羹補袞、跨窻衝樓、眞如隨緣、二乘聲聞空寂に沈む。邪見即正、五逆の調達冤讎を結ぶ。燈籠口を開けば靈柱點頭す、更に最後の句有り、汝聽取せよ、我れ焉んぞ度さん。」火把を抛つて、「碧眼黃頭會不得、野梅風定つて暗香浮ぶ。」咄。

荆叟宗玉信男の下火 預請

「玉本圓成繡繡を絶す、之れを求むれば轉た遠し求めざれば臻る、」形



山手に信せて劈開し了る、萬里雲無くして月一輪。夫れ惟れば、荆叟宗玉信男、村上帝に承けて源の朝臣と稱す。法社の金湯、臨濟の大龍に跨つて頭角を拗折す。武門の棟梁、洋嶼の黒魃に觸れて凡鱗を脱却す。佛を殺し祖を殺す、全俗全眞。了了の時、甚の溪聲廣長舌にか干らん。妙妙妙の處、山色清淨身と認むること莫れ。畢竟門より入る者は、是れ家珍にあらず。我れをして如何が説かしめん。物の比倫に堪へたる無し。火把を抛つて、「錯、春草池塘の夢、昨夜今日の塵。錯錯。」

希道宗弘信男の下火 預請

「生死を截断して、寶劍光寒し、閃電擊石、多端に移らず。夫れ惟れば、某名、文韜武略、義膽忠肝。人主を輔佐して、孤を立つるを難しと爲す。京師舊に復して世を安泰に置く。魯直鼻を穿つて、蟾桂を認著す、王老夢を説いて牡丹を指示す。露電泡影、如是觀を作す。預め冥福を修して、報應の殫きんことを懼る。是の故に五逆の達多、頓に地獄を出づ、千佛の廣額、直に涅槃を證す。鬼畜人天同じく一致に歸す。迷悟凡聖、全く兩般なし。須彌崩倒し大海枯乾す。希道希道、一期願の後、如何が相看せん。秋風索索として葉落ちて根に歸す。聞くや木人笛を把つて萬年歌を奏す。咄一咄す。」

道本禪門の下火 預請

「人人本有圓成佛、古に輝き今に騰つて大光を放つ、惡鉗鎚に觸れて爐輪を出づ、黄金色上に更に黄を添ふ。道本禪門、耳邊に看るや、山色清淨。眼處に聴くや、溪聲廣長。虚空を打破して芭蕉の拄杖子を奪ふ、生死を截断して林際の金剛王を提ぐ。正叟の時節、甚麼の無明煩惱とか説かん、甚麼の地獄天堂をか論せん。赤洒酒窠白無し、淨裸承當を絶す。別に宗乘向上の事有り、來れ吾れ汝と與に商量せん。火把を抛つて、「烏啼いて人見えす、花落ちて木猶ほ香し。」喝一喝す。」

石窓秀堅大姉預請の乗炬

堅固法身變遷無し、鉞鋒頭上に坤乾を定む、最後の牢關子を打開して、月は落つ。金雞一拍の天。夫れ惟れば、石窓秀堅大姉、河陽の新婦子を欺き、濟北の老風顛を瞞す。金沙灘頭馬郎に約して、菩提樹に上り無明樹に上る。靈山會上龍女を接して、當體運を説き、譬喻運を説く。休休休、百年壽盡きて後、妙妙妙、一酒未だ發せざる先。或時は放去收來、泥牛耕破す瑠璃の地、或時は出生入死、玉兔抜開す碧落の門。須彌筋斗を翻し、虚空鐵船を駕す。更に眞の歸處あり、山僧が敷宣を聴け。火把を抛つて、「頭を擧すれば殘照在り、本是れ住居の西。」咄一咄す。」

閑溪宗音大姉の下火 預請

此の方眞の教音聞に在り、心腸を傾倒して君に説與す、諸佛出身の那一路、青青たる脩竹、南薰を

① 祖庭事苑に曰く、人聞本金鐘の名なし、以て天上金雞星に應するなり」と。  
② 南方の薰風なり。

① 朱文公の詩に云ふ、「未だ覺めず池塘春草の夢、塔前の梧葉已に秋風」と。  
② 魯直、黃山谷なり、祖心禪師に従つて山中に木犀花を嗅ぐ、前に見ゆ。  
③ 月の柱にて、木犀のことを云ひしなり。  
④ 六喻の偈に曰く、「一切有爲法、如夢幻泡影、如露亦如電、應作如是觀」と。



送る。夫れ惟れば、聞溪宗音大姉、始終一節、末後感歎、尼總持吾が肉を  
得たり、仙陀婆其の群を出づ。隨緣真如、不變真如、水有り皆月を含む。  
觀照般若、實相般若、山として雲を帯びずといふこと無し。拄杖七八尺  
を拗折して、鐵枷三百斤を脱卻す。正與麼の時、還つて寒毛卓豎すること  
を覺ゆるや。紅爐燼裏雪紛紛。

江甫秀清大姉の下火 預請

「法身清淨本然の體、大地山河活眼睛、金鴨香消して人見えす、頻に小  
玉と呼ぶ是れ何の聲ぞ。夫れ惟れば、江甫秀清大姉、老瞿曇の遺教を受け、  
尼總持の芳名を慕ふ。慇懃不憚、分れて六和合と成る。不憚慇懃、本  
是れ一精明。生也、佛界魔宮紅爐の雪、死也、地獄天堂乾闥城。左轉右轉、  
逆行順行。看よ看よ、毘盧頂上月白く風清し。」咄一咄す。

天慶元祐大姉預請百年後乘炬の語

「百年幾許ぞ天祐を保つ、生死涅槃春夢の中、虚空を打破して一事無し、  
鷓鴣啼き亂る落花の風。夫れ惟れば、天慶元祐大姉、胸鑿映徹、戒珠玲  
瓏、少林門下の尼總持、意氣相奪ふ。法華會上の大愛道、記莖全く同じ。」八

① 王素仙陀婆、王は大玉にして素は要求なり、仙陀婆未だ職語を見ず、一名四寶を義とす、水、鹽、器、馬、一名にして水鹽器馬の四種を含むが故に、王、群臣に向つて仙陀婆を索むるも、智慧拔群の者に非ずんば奉仕するを得ずと、自由の機輪を示す。

② 鷓鴣類に屬する鳥の名、多く支那南地に産す、形は鶴に似て稍大なり、背部は灰蒼にして褐色の斑點あり、腹部は灰色なり、春陽花の咲く頃、多く相對して鳴くといふ。鷓鴣鳴く所百花香しなどの語あり。

③ 眼、耳、鼻、舌、身、意の六識に未那識、阿頼耶識を加へて八識といふ。七情は喜怒哀樂、愛惡慾をいふ。

④ 論語先進に、南宮白圭を三復

識七情、風來れば波浪起る、三從五障、日出で、乾坤融す。真如不變、豈に始終有らんや。正與麼の時、無明煩惱他物に非ず、正法眼藏、汝が躬に在り。赤洒洒窠臼没し、淨裸裸羅籠を絶す。此れは是れ元祐大姉、平常受用底。即今鐵鋒頭上に筋斗を翻し、火焰裏に神通を現す。看よ看よ。火把を抛つて、妙處言はんと欲するに言ひ及ばず、海棠雨過ぎて夕陽紅なり。」喝一喝す。

惟清了圭大姉の下火 預請

「白圭玷無し本來圓なり、形山に秘在す一百年、拈得す分明に人に與へて看せしむ、華鯨吼破す夕陽の天。夫れ惟れば、惟清了圭大姉、内晩節を持ち、外塵縁を謝す。玉線金針を穿つて、日種氏の鴛鴦の教を笑ふ。藥爐經卷を把つて、秦國太の蚌蛤の禪に參するを瞞す。丈夫の意氣大千を控聚す。幻化空身即法身、花は猶ほ風雨の後、無明の實性即佛性、松は只だ雪霜の先。正與麼の時、什麼の泥洹の一路をか認めん。甚麼の生死の兩邊にか涉らん。」火把を舉して、會すや、龍女變じて男子と成る處、枝頭露重し火中の蓮。」喝一喝す。

古梅妙林大姉の下火 預請

「地獄と天宮とを踏躡して、死路に通ずる時活路通す、此れは是れ少林真の一曲、三千刹界落梅の風。夫れ惟れば、古梅妙林大姉、戒乘俱に急に、心境混融す。菩提坊裏の病維摩、□□□□、金沙灘頭



鎖子骨、誦經玲瓏、三賢十聖電拂の如く、四大五蘊本來空。空空に非ず、色色に非ず。始に始無く、終に終無し。上霄漢に透り、下已船を絶す。正與廢の時、什麼の冥官鬼主とか説かん、什麼の黃頭碧腫をか論せん。然りと雖も、妙林大姉、畢竟如何が研窮し去らん。」炬を抛つて、「劫火洞然毫末盡く、青山舊に依る白雲の中。」

蘭室理秀大姉の下火 預請

「蘭に秀でたる有り菊に芳しき有り、法身邊の事露堂堂、夜來吹き送る涅槃の雨、心頭を滅せざれども火自ら涼し。夫れ惟れば、蘭室理秀大姉、能く細禮を學んで、彩粧を掃除して、三心を點出す、臭婆子が徳嶋を接するを笑ふ。五障を消得して尼長老の戒香に住するを瞞す、平生の作略意氣當り難し。是の故に寂然不動、春の花に在るが如し。了了了、分曉無し、眞如隨縁、月の水に印するに似たり。玄玄玄、沒商量、透關萬重、或は擒縱、或は與奪。還郷の一曲、角徵に非ず、宮商に非ず。正に好し力を著くるに。黒漆桶を打破す、直に得たり行に臨んで金剛王を抛擲することぞ。這箇は理秀大姉平生の間伎倆。」火把を擧して、「別に勝熱婆羅門大光を放つを看よ。」咄、「紅日扶桑を照

①一に喜心、二に老心、三に大心なり、喜心は喜悅感謝の心、老心は慈悲愛憐の心、大心は不偏不黨の心をいふ。  
②徳山嘗て青龍の疏鈔を讀みて獨を出で、灑陽に至る路上、一婆子の餅を賣るを見、因みに肩を休め、餅を買ふて點心せんとす、婆子、擔を指して曰く、這箇は是れ何の文字ぞ、師曰く、青龍の疏鈔なりと、婆曰く、我れに一間あり、爾若し答へ得ば點心を與へん、若し答へ得ずんば別所に去れ、金剛經に曰く、過、現、未不可得と、未嘗し上座那箇の心を點すと、師無語と。

す。

心田永安大姉の下火 預請

「眼界平なる時心地安じ、三更の紅日黒漫漫、崑崙倒に娘生の袴を著く、火裏の梅花雪を吹いて寒し。夫れ惟れば、心田永安大姉、越裳の翡翠、摩利樹檀、五障本空、頂上の枷鎖を脱卻す、百年夢の如し。庭前の牡丹を指示す、迹を洛淫に寄せ、道を邯鄲に假る。加之、或時は龍女宮中に在つて、是文珠の説法を聴き、非文殊の説法を聴く。或時は、蠟螟國裏に入つて、善知識と相看す、惡知識と相看す。易易、凡を轉じて聖と成すことは易し。難難、聖を轉じて凡と成すことは難し。生也、鐵壁迸開す雲片片、死也、黒山輓出す月團團。永安大姉、葛直に去る、太だ端無し。若し向上の事を要せば、是の如くの觀を作す應し。」火把を擲つて、「一把の柳絲收不得、風に和して搭在す玉欄干。」

陽甫玄春大姉の下火 預請

「威音空劫の春を待たず、無根樹子花を著けて新なり、毘嵐昨夜忽ち吹倒す、大地茫茫として人を愁殺す。夫れ惟れば、陽甫玄春大姉、名珪額無し、椹鏡塵を絶す。生也、蝴蝶夢中家萬里、死也、翡翠簾前月一輪。凡聖を通せず、要津を把定す。玄春大姉、正與廢の時、何の處に向つてか渾身を著け去らん。」火把を抛つて、「須彌跣跳す鍼鋒上、丙丁童子笑閻閻。」喝一喝す。

③小蟲の名なり、列子に「江浦の間塵蟲を生ず、其の名を魚螟と云ふ、群飛して蚊虻に集り、而して相觸る」と、人の世にありて互に相争ふを邊觀するときは、猶ほ魚螟が蚊虻に集りて相觸るゝが如しとなり。



穆庵芳春禪定尼の下火 預請

「喚起す一場の春夢婆、落花啼鳥百年過ぐ、端無く心頭の火を吹滅して、月白く風清し安樂窩。夫れ惟れば、穆庵芳春禪定尼、脚實地を踏み、心劫波を澄しむ。甘露門を開いて、探菽、青提女を拯ふ。楞嚴會を設けて、甘蔗、摩登伽を度す。寸刃を施さず、魔佛を殺し盡す。毫端を隔てず、自他を忘らす。甚麼の生死涅槃とか説かん、驪珠光燦爛。什麼の無明煩惱をか論せん、<sup>①</sup>蟾桂影婆娑。更に向上の那一路有り、試みに一步を進め得てんや。」火把を抛つて、「石女舞成す長壽の曲、木人唱へ起す太平の歌。」喝一喝す。

雪溪宗春信女の下火 預請

「風驚き雨過ぐ百年強、心火滅する時心自ら涼し、啼鳥落花人見えす、一場の春夢覺めて猶ほ香し。夫れ惟れば、雪溪宗春信女、錦心繡口、鐵肝石腸、水の源有るが如し。姓を賜うて清和の苗裔と稱す。禪の海に歸するに似たり。師を擇んで鄧林の棟梁を得たり。黃河帶を誓ひ、岷江觴を濫ぶ。或時は生死の流を截る、赤洒酒窠白沒し。或時は如來地を超えて、淨裸承當を絶す。這裏に到つて甚麼の無明煩惱とか説かん、什麼の地獄天堂をか論せん。線路を通せず、封疆を把定す。然も恁麼なりと雖も、後昆を保祐する底の一句、試みに山僧が擧揚し去るを聴け。」火把を抛つて、「自家頻に門前の雪を掃つて、他人屋上の霜を管すること莫れ。」喝一喝す。

①月の桂なり。

全室宗盛信女の下火 預請

「百年三萬六千霜、盛者必衰人常ならず、漏盡き鐘鳴る底の時節、泥犂兜率黒甜の郷。夫れ惟れば、全室宗盛信女、懐胎の兔子、乳を搾ぶ鵝王、截流の機を具して、秦國夫人洋嶼に參す。救世の願を起して、<sup>②</sup>鎖骨菩薩馬郎に嫁す。見性羅敷を隔てず、我れを試むるに革囊を以てすること莫れ。煩惱即菩提、水は竹邊より流出して冷に。娑婆即華藏、風は花裏より過ぎ來つて香し。向上宗乘の事、直下に承當し去れ。」喝一喝し、火把を抛つて、「安禪は未だ必ずしも山水を須ひず、心頭を滅卻すれば火も自ら涼し。」

②魚籃の觀音の馬郎に嫁するをいふ、前に見ゆ。

壽岳宗永信女の下火 預請

「王母が蟠桃永年を祝す、神仙の秘訣錯つて流傳す、崑崙の核子果して何物ぞ、今日看來れば火事の蓮。夫れ惟れば、壽岳宗永信女、奕葉秀を競ふ、貞節彌々堅し。靈山會上の龍女、華鮮如來と號す、邪を捨てて正に歸す。金沙灘頭の馬婦、鎖骨菩薩と化す、感に赴き縁に隨ふ。眞如界に入つて眞如に住せず、花は猶ほ風雨の後。生死の中に在つて生死に染ます、松は只だ雪霜の先。虚空裂けて地に落ち、須彌跳つて天に上る。然も恁麼なりと雖も、後昆を興す底の一句、試みに山僧が敷宣を聴け。」火把を抛つて、「臨濟命根元斷せず、一條の紅線手中に牽く。」喝一喝す。

梅屋妙薫信女の下火 預請



「諸佛出身活路開く、薰風昨夜南より来る、端無く吹いて紅爐の雪と作す、六月炎天一朶の梅。夫れ惟れば、梅屋妙薰信女、五障を掃除し、三災を消得す。説法度生、應身の如來、鶴林に滅を唱ふ。拔苦與樂、積行の菩薩、龍門に願を曝す。見性猶ほ羅敷を隔つ、遺骨強ひて冷灰を撥ふ。了了の時、乾坤窄く、星辰黒し。玄玄の處、虚空消し鐵山摧く。妙薰妙薰、是れ甚麼の時節ぞ。」火把を抛つて、「石女舞成す長壽の曲、燈籠霧柱笑哈哈たり。」喝一喝す。

春榮壽椿信女の下火

預請

「莊椿世を閱八千歳、胡蝶園中一刹那、無説無聞眞の般若、燈籠口を開いて摩訶を念す。夫れ惟れば、春榮壽椿信女、稗沙門を拜して草袈裟を受く。盛者必衰、鶴樹の滅を甘蔗氏に示すと雖も、熾然常説、龍華會を迦葉波に待たす。物物全眞、無數の飛花、圓通の境、塵塵解脫、兩三の脩竹、安樂の窩。従前の間絡索は且く置く、向上宗乘如何。」火把を抛つて、「白鷗は人間の暑を受けず、江上の清風雨を吹き過ぐ。」喝一喝す。

松溪宗貞信女の下火

預請

「貞節彌々堅うして始終を克す、眞如佛性絶だ如同、丙丁童子呵呵として笑ふ、三十三天活

② 水災、火災、兵災の稱。又小三災、四劫の中住劫(滅劫)の人壽十歳の時起る、饑饉災、疾疫災、刀兵災の稱。又大三災、四劫の中、壞の最後の一劫、即ち外器壞の時起る、火災、水災、風災の稱(世界)。  
③ 初利天のことなり、須彌山説によれば、須彌山の頂上に四峰あり、而して各峰に入つた天あり、その中央に喜見城ありて帝釋天これに住し、四方三十二天を統ぶ、この内外の三十三天を初利天(欲界第二の天)といふ、而して日月の二輪、須彌の半腹を廻りて晝と夜とな爲すと。

火紅なり。夫れ惟れば、松溪宗貞信女、本然清淨、内外玲瓏。諸佛出興、水天を浮べ、天水を浮ぶ。世尊入滅、風月を拂ひ、月風を拂ふ。生死去來全く住處無し、苦樂逆順、道其の中に在り。正與廢の時節、甚麼の千生萬劫とか説かん、甚麼の五障三従をか論せん。轉身自在、八達七通、然も恁麼なりと雖も、向上の事を知らんと欲せば、須らく教外の宗に參す可し。」火把を抛つて、「看よ看よ、一棒に打破す太虚空。」喝一喝す。

景雲壽慶信女百年後乘炬の語

「地獄天堂一夢の中、五障を掃除し三従を絶す、凡鱗脱盡する底の時節、其の面華鮮なり。娑竭龍。夫れ以れば、景雲壽慶信女、世間の相を觀じて教外の宗に歸す。隨緣眞如、不變眞如、煙翠竹を鎖す。觀照般若、實相般若、風幽松を吹く。了了の時、是れ何物ぞ、玄玄の處、鞞を留むること莫れ。然も恁麼なりと雖も、聲前的一句、君聽取せよ。」火把を抛つて、「青山改めず舊時の容。」咄一咄す。

宗光信女の下火

預請

「萬機休して無心に住まらず、一段の靈光古今に亘る、向上の鉗鍵繩に手を下せば、都盧大地黄金と變す。宗光宗光、還つて萬兩の黄金を消得すや。煩惱即菩提、蜂房を截つて獅子窟と作す。娑婆即華

④ 八大龍王の一、新華嚴五十一、如來出現品に「沙羯羅龍王、龍王大自在力を現じ、衆生を饒益し、成く歡喜せしめんと欲し、四天下より他化自在天處に至る、大雲網を興し、周匝彌覆、其の雲色相、無量差別云々」と。



藏、荆棘を變じて梅檀林と成す。木人暗に玉線を穿ち、石女密に金針を度す。火把を抛つて、無生の那一曲を聴かんと要すや、三千里外知音を絶す。」

芳室宗繼信女の下火 預請

「手中の絲線の長を截断して、繡し成す端的兩鴛鴦。涅槃生死春宵の夢、枕破の斜紅覺めて尙ほ香し。夫れ惟れば、芳室宗繼信女、露芽蘭秀で、晚節菊芳し。本是れ一精明、華鮮如來、龍女と現す、分れて六和合と作る。鎖骨菩薩、馬郎に嫁す、天も蓋ふこと無く地も裁すること無し。昔生せず今亡せず。淨裸躰窠臼を出で、赤洒洒覆藏を絶す。燈籠跳つて露柱に入り、泥人金剛を撈倒す。向上宗乘の事を識らんと要すや。鏡を打破し來れ、備と與に商量せん。」火把を抛つて、少林の標柱久昌昌たり。喝一喝す。

桂雲昌慶 信女預請百年後乘炬の語

火把、圓相を打して、「珠を獻する龍女。太だ顛預、信せずんば一鏡に鏡碎して看よ、鐵壁迸開す雲片片、黒山帳出す月團團。昌慶信女、還つて會すや。當陽直指、多端に涉らす。昔甘蔗先生、西方に出で、法華を一由旬に布く、袈裟下に毒藥を藏す。後香至大士、東海に入つて慈航を十萬里に泛ぶ、平地上に波瀾を起す。甚麼の三車火宅とか説か

④連磨、東土に來らんとする時、般若多羅曰く、法の往く所、其の法の趣く所の者は繁くして、稍麻竹葦の若し、數ふるに勝ふべからず、然して其の國我が滅後六十餘歳必ず難有るべし、水中文布を作し、自ら之れを降せ、然して汝彼の南方に至り、即ち止るべからず、蓋し其の天王方に有爲を好む、恐らくは汝を信ぜざらん、吾が爲なきけ、曰く、路行水を跨いで又羊に逢ふ、獨り自ら樓々暗に江を渡る、目下憐むべし雙象馬、二株の標柱久昌々」と。我が禪門の榮ゆべきなむ。

ん、什麼の隻履空棺をか認めん。三世の心不可得。心を將ち來れ、汝が爲に安せん。然も恁麼なりと雖も、百年壽盡きて後、應に是の如きの觀を作すべし。知見知を立する、即ち無明の本、知見見無き、斯れ即ち涅槃。」火把を抛つて、喝一喝す。

花溪宗春信女預請乘炬の語

「驚き起く一場の春夢婆、百年の光景鳥飛び過ぐ、虚空昨夜希有と叫ぶ、火裏花開く優鉢羅。夫れ惟れば、花溪宗春信女、肅爾として糝淡く、温然として氣和す。三萬の猊牀、維摩病に毘耶室に臥す。五千の貝葉、瞿曇滅を、尼連河に示す。衆生の母と作つて、煩惱の魔を降す、本來の面目露堂堂。梅瘦せて春を占むること少し、金剛の眼睛鳥律律。庭寛くして月を得ること多し。當陽直指、端的會すや。」火把を抛つて、「石女舞成す長壽の曲、木人唱へ起す太平の歌。」喝一喝す。

瑞甫清珍信女の下火 預請

門より入る者は家珍にあらず、龍女寶珠磨すれども磷かず、直下に天外に出頭して看よ、浮雲散する處月光新なり。清珍清珍、是れ甚麼ぞ、是れ甚麼ぞ。山色は清淨身。迷悟を立せず、要津を把定す。正與麼の時、三世の諸佛、火焰裏に向つて大法輪を

⑤維摩經の弟子品、菩薩品、文殊問疾品等に委し。  
⑥具には尼連河、梵音「ナ」、イランヤナ、有金河、不樂著河と譯す、摩訶陀國王舍城附近を流る、河の名、釋尊苦行の眞の修行にあらざることを知りて、これを棄て、此の河に浴し、積年苦行の身垢を洗ひ、木に攀ちて岸に上り、牧女の牛乳の供養を受け、身力を恢復して後、佛陀伽耶に行き、菩提樹下に端坐し給へりと云ふ傳記によりて知らる、今のリラヤン河是れなり



轉す。然も是の如くなりと雖も、更に歸處有り。試みに山僧が指陳を聴け。咄咄、白灰撥ひ出す玉麒麟。

梅憲理清信女の下火 預請

「直に純清絶點を得る時、機輪轉する處、電光も遅し、丙丁童子希有と叫ぶ、火裏の優曇雪に和して吹く。夫れ惟れば、梅憲理清信女、物を愛して驚無し、民に莅んで慈有り。法華會中、倒に五臺の獅子に跨る。無垢世界、忽ち八歳の龍兒と化す。直に涅槃の一路に入る、何ぞ生死の兩岐に涉らん。公案現成、荷葉團圓鏡似も團に。當陽直指、菱角尖尖錐似も尖きなり。淨裸裸地、寸絲を挂けず。然も恁麼なりと雖も、向上還つて事有り。山僧誰にか説向せん。」火把を抛つて、「花の來處を問はんと欲すれば、東君も亦知らず。」咄一咄す。

支那山西省代州五臺縣にあり、支那六朝時代より佛教の靈地として昔く知らる。無著文喜、五臺山にあつて典座たりしとき、文殊菩薩上に現じたりしと云ふ話柄、禪林に傳奕す。文殊は獅子に乗り給ふ故に、此所の五臺は單に觀く文殊と見てよし。

心源宗清信女の下火 預請

「心源を放出して徹底清し、清寥寥地太だ分明、一條界破す轉身の路、直に毘盧頂上を蹈んで行け。夫れ惟れば、心源宗清信女、山川秀を鐘めて閩里榮に向はんとす。露柱懷胎、鹿足般若の説を感す。明珠掌に在り、龍女華鮮の名を受く。直に佛果を證す、豈に凡情に墮せんや。花を弄すれば香衣に

満つ。遊戯神通、解脱國土、岳に歩すれば風面を吹く。刹那に滅卻す阿鼻の火坑、正與廢の時、甚の三從五障とか説かん、甚の萬劫千生をか論せん。然も恁麼なりと雖も、最後の那一句、如何が施呈し去らん。」火把を抛つて、「頻に小玉と呼ぶ元も無事、只だ檀郎が聲を認得せんことを要す。」

天章宗清信女の下火 預請

火把、圓相を打して、「直に浮雲絶點の時を得て、一輪の明月自ら清奇、當處を離れず南方界、龍女の寶珠我れに還し來れ。夫れ惟れば、天章宗清信女、五障を掃除し、二儀を化育す。隨緣真如、不變真如、荷盡きて已に雨を撃ぐる蓋無し。觀相般若、實相般若、菊残つて猶ほ霜に傲る枝有り。這裏に到つて、甚の菩提煩惱とか説かん、甚の兜率泥犁をか論せん。然も恁麼なりと雖も、向上の那一句を聞かんと要すや。」火把を抛つて、「針眼の魚須彌を吞卻す。」咄一咄す。

和仲妙春信女の下火 預請

「生死涅槃春夢婆、天堂地獄亦南柯、當陽直指君聽取せよ、風楓林を攪して一雨過ぐ。夫れ惟れば、和仲妙春信女、香を焼いて佛を禮し、鏡を掛けて魔を降す。苦海の慈航、濡首五障の龍女を化度す。昏衢の慧炬、慶喜四果の登伽に逢著す。單傳霜寒し、流蓬落葉、大法秋晚る。折葦枯荷、誰が家か春ならざらん。塵塵隨身の兜率、水有り月を含む。物物唯心の彌陀、無佛

①元積が時に、「小玉牀に上りて夜衣を鋪き、檀郎謝安同處に眠る」と、註に檀郎は潘安仁、小字は檀と名づく、之れより婦は夫を檀郎と名くと。②二儀は乾坤をいふ、即ち天地なり。



の處、住することを得ず。玄玄の窟、須らく呵すべし。從前の間絡索は且く措く、向上宗乗の事如何。火把を抛つて、驪珠光燦爛、蟾柱影婆娑たり。喝一喝す。

大有宗豊信女の下火 預請

「二神豊原を開きしより、今に至るまで天地是れ同根、泥犂兜率春園の夢、醒めて後簾前月一痕。夫れ惟れば、大有宗豊信女、精神雪潔く笑語春温なり。混沌の眉を畫いて贖岳の生苔帯を拈す。正法眼を滅して、密庵の破沙盆を鼓す。暗に祖師の鼻孔を穿ち、明に諸佛の心源に徹す。無餘涅槃、泥牛耕破す瑠璃の地。不味因果、玉兔挨拶す碧落の門。百丈山、一拳に拳倒し、四大海、一陽に陽翻す。那箇か真底の倩女離魂。」火把を抛つて、紅爐一點の雪、鑄出す鐵崑崙。」

保天慶祐信女預請下火の語

火把、圓相を打して、① 坤德至れる哉天これを祐く、始終一節曾て移らず、行に臨んで唱へ起す還郷の曲、風前に向つて ② 竹枝を歌ふこと莫れ。夫れ惟れば、保天慶祐信女、五障を掃除し二儀を化育す。其の入金の如く玉の如し。短褐磷かす緇ます。生也、春風桃李花の開くる夜、死也、秋雨梧桐葉の落つる時。淨裸躰、赤洒洒、生死を離れ、去來を絶す。恁麼不恁麼、毛巨海を

① 密庵成傑禪師、衢州の明果庵に到つて應庵華に參す、一日應庵室中に問ふ、如何なるは是れ正法眼、師曰く、破沙盆と、應庵之れを肯ふと。  
② 須彌山の周圍にある四香水海をいふ。  
③ 坤德は婦德のこと、坤は地なる故なり。  
④ 土地のはやり歌なり。

吞む。不恁麼恁麼、芥、須彌を納る。驀直に轉じ去れ、兩岐に涉ること莫れ。然も是の如くなりと雖も、山僧痛處に向つて、重ねて鐵錐を下さん。火把を擲つて、力因希、咄咄、紅爐放出す鐵崑崙。」

海雲宗龍 信女百年後乘炬の語

火把、圓相を打して、「生死の海を出で、龍鱗を脱す、元是れ如々淨法身、一陣の清風明月を掃ふ、門より入る者は家珍にあらず。夫れ惟れば、海雲宗龍信女、胸中芥せず、眼裏塵無し。其の德也、金の如く玉の如し。其の行也、縞ます磷かす。四大本空、紅英地を掃つて風曉に驚く。五蘊有にあらず、綠葉陰を成して雨春を洗ふ。鐵眼の魚石佛を吞む、丙丁重笑問問。更に向上宗乗の事有り、試みに休上座が指陳を聴け。」火把を抛つて、「千峰萬岳雲收つて後、翡翠簾前月一輪。」喝一喝す。

德陰妙性信女の下火 預請

「成佛は他の見性の人に還す、無陰陽の地鐵塵を絶す、夜來月半江に入り去る、龍女の寶珠磨すれども磷かす。夫れ惟れば、德陰妙性信女、蕊菟草の種、桃花色の民、大慧の禪を慕ふ。臨濟中興の日に際す、永明の旨を會す、彌勒下生の辰に値ふ。允なるかな矣、則天皇后の化迹、記すや否や。泰國夫人の舊因、彩鳳丹霄に舞ふ。涅槃の古鏡を打破す、清風明月を拂ふ、生死の苦輪を脱卻す。凡を轉

① 永明延壽大師、翠巖に隨つて得度し、後天台德韶に隨つて法を嗣ぐ、法眼宗第三祖となる。禪と念佛とを兼修し、夜は別峰に行道念佛するを常とせり、德陰妙性信女は淨土教の人なりしや。



じて聖と作し、假を弄して眞を像る。淨裸裸、承當を絶す。針鋒頭に足を翹て、火焰裏に身を藏す。喝一喝して、然も恁麼なりと雖も、後昆を覆蔭する底の活句、試みに休上座が指陳を聴け。火把を抛つて、<sup>①</sup>揭諦波羅僧揭諦、故家の喬木又春に逢ふ。」

覺林妙等信女の下火 預請

「平等一如々の法門、百千の妙徳心源を接す、須彌跣跳して鍼眼に入る、八角の磨盤空裏に奔る。夫れ惟れば、覺林妙等信女、風を移し俗を換ふ、子を抱き孫を弄す。其の芳隣や、左は花を以てし、右は竹を以てす。其の貞節や、兄に梅有り、弟に鬱有り。理智圓融、甚慶の始覺本覺とか説かん。與奪自在、什麼の上根下根をか管せん。端的雙收雙放、畢竟亡に非す存に非す。黄鶴樓に和して一拳に拳倒す、鴛鴦湖を把つて一陽に陽翻す。此れは是れ妙等信女、眞履實踐の處、百年壽盡きて後の消息、火把子の重ねて論するを聴取せよ。」火把を抛つて、「紅爐一點の雪を拾ひ得て、黄金鑄出す鐵崑崙。」喝一喝す。

花屋周林信女の下火 預請

「鶴林滅を示す二千年、山色は灰の如く花は烟に似たり、元是れ圓成の

那一佛、木人石女蒼天と叫ぶ。夫れ惟れば、花屋周林信女、有情世間の事を觀じて、無生的一大縁を了す。七賢女、死屍を尸陀林に問ふ、時有りて盡く。八歳の龍、正覺を無垢界に唱ふ、地を易へば皆然らん。虚空裏に筋斗を翻し、須彌頂に鐵船を駕す。洛陽是れ兜率、風は南岸の柳を吹く。娑婆即華藏、雨は北地の蓮を打つ。峭觀巍、孤迥迥。窠臼を離れ蓋纏を出づ。上件底は且く措く、達磨甚としてか禪を會せざる。喝一喝す。

月溪妙秋信女の下火 預請

「秋風昨夜乾坤を動す、葉落ち樹凋みて本根に歸す、心空の那一火に和御して、黄金鑄出す鐵崑崙。夫れ惟れば、月溪妙秋信女、美玉價無し、赤繩婚を定む。摩耶千佛の母爲り、則天三會の尊と稱す。生死涅槃、翡翠踏躡す荷葉の雨。眞如實相、玉兔抜開す碧落の門。」火把を抛つて、喝一喝す。

宗眞信女の下火 預請

「試みに看よ嬢、生面目の眞、意中の眉黛遠山新なり、端無く打破す曹溪の鏡、放出す天邊の月一輪。夫れ惟れば、宗眞信女、南無佛と唱へて、西子の聲に効ふ。隨縁眞如、不變眞如、翠竹風冷し。觀照般若、實相般若、黃花露勻し。金の如く玉の如し、細ます磷かす。然も恁麼なりと雖も、門より

①心經の咒文、彼の五種不翻の一なり、然れども強ひて之れを譯する時は、揭諦は、去と度との過去を現す文字なり、故に去れり度せりとの意を含む、即ち自ら一切の苦厄を度し、他一切の衆生の苦厄を度し終りたりと云ふ意、可尊したるなり。

②事言要玄地集四に、「府城西、黃鶴磯上に仙人子安、黃鶴に乗じて此を過ぐ、又費文律登仙して黃鶴に駕して返り、此所に憩ふと傳ふ、唐の關伯程、記を作り、文律が事を以て傳と爲す」と。唐の崔顥が詩に、「昔人已に白雲に乗じて去り、此の地空しく餘す黃鶴樓、黃鶴一たび去つて復た返らず、白雲千載空しく悠悠、晴川歴々たり漢陽樹、芳草萋々たり鸚鵡州、日暮鄉關何の處か是なる、烟波江上人をして愁へしむ」と。

③賽言故事に「婚姻の前定せる赤繩足を繫ぐといふ、唐の韋固、旅行中、月下の老人に問ふ、囊中何物かあると、曰く、「赤繩子なり、以て夫婦の足を繫ぐ。韋固の家、吳楚の異郷、富貴懸隔すと雖も、この繩一度繫げば、遂に運るべからず」と見ゆ。



入る者は不是、那箇か是れ自家の珍。火把を抛つて、鉢鉢頭に足を翹て、火焰裏に身を藏す。喝一喝す。

宗龜信女の下火 預請

「紅爐放出す鐵鳥龜、皮骨を裹むか骨皮を裹むか、當時の大隋老を屑とせず、草鞵靴を生じて天に上り來る。夫れ惟れば、宗龜信女、鉢鉢足を翹て苜蓿眉を圖す。自性の源に徹するときは、則ち黃河を攪いて酥酪と成す。心頭の火を滅するときは、則ち鐵湯を變じて寶池と作す。意氣堂堂、一踢に踢蹴す四大海。眼光爛々、一拳に拳倒す五須彌。這裏に到つて菩提の證す可き無く、生死の離る可き無し。石火も及ばず閃電も猶ほ遅し。向上に轉じ去れ、多岐に涉ること莫れ。咄一咄、火把を抛つて、花の來處を問はんと欲すれば、東君も亦知らず。」

春芳妙榮信女の下火 預請

「朝榮暮辱共に空と成る、今日の顔昨日の紅に非ず、生死涅槃一場の夢、天堂地獄大槐宮。夫れ惟れば、春芳妙榮信女、偏も無く黨も無し、始を克し終を克す。總持尼を接して、達磨皮髓を分張す。登伽女に逢ふて、慶喜姪躬を撫摩す。眞如佛性、彌預備伺。縦ひ般若の光を放つても、蚌蛤天上の明月を含む。定慧の力を得ると雖も、蚊虻空裏の猛風を弄す。淨裸裸亦

◎白樂天の太行路に曰く、人生婦人の身と作る莫れ、百年の苦樂他人に由る、行路難山よりも難く水よりも險し、獨り人世の夫と妻のみにあらず、近代の君臣皆此の如し、君見ずや左納言右納史、朝に恩を受けて暮に死を賜ふと。

酒酒、諸方の羅籠を受けす。三從五障を掃除して、直に入達七通を得たり。金剛圈を透り、栗棘蓬を呑む。然も是の如くなりと雖も、轉身の處を識らんと要せば、丙丁童に問取せよ。火把を抛つて、喝一喝す。

妙蓮信女百年後下火の語

「夢幻空花一百年、風驚き雨過ぎて刹那に遷る、回光返照自ら看取せよ、露清香を滴る火裏の蓮。夫れ惟れば、妙蓮信女、五障を消滅し、十纏を脱離す。將に謂へり、金沙灘頭の鎖骨と。元來無垢世界の華鮮、鉢鉢頭上の五須彌、石女起つて舞を作す。地獄門前の鬼脱卵、扇子跳つて天に上る。葛直に轉じ去れ、言詮に涉ること莫れ。會すや。火把を抛つて、向上の一路、千聖不傳。咄咄。」

宗祐信女の下火 預請

「半は黃梁を熟す夢蝶の牀、頭を回せば三萬六千場、明明に説與す西來意、紅檀花の前夕陽ならんと欲す。夫れ惟れば、宗祐信女、精神雪潔く、貞節菊芳し。五障本空、文殊佛に代つて龍女を度す。兩願成就、觀音婦と作つて馬郎に約す、罪垢を蕩滌す。經卷流水、生死を截斷す、慧劍秋霜。赤酒酒窠白没し、淨裸裸承當を絶す。然も是の如くなりと雖も、向上還つて事有り、我れ汝が爲に擧揚せん。火把を擲つて、「安禪は未だ必ずしも山水を須ひす、心頭を滅卻すれば火も自ら涼し。」喝一喝



す。

心月妙性信女、預め三十三白忌の冥福を修するの次で、更に百年後の乗炬の語を請ふ

「佛性元來變遷無し、時節と因縁とを論せず、請ふ君指頭を離却して看よ、月は青天に在つて夜夜圓なり。夫れ惟れば、心月妙性信女、劫波濁ると雖も、晚節彌々堅し。翠袖の佳人、竹疎壁に動く。書眉の京兆、花細川に滿つ。夫れ美名を身後に留めんよりは、如かじ冥福を生前に修せんには。赤豆兩車、無量壽を唱ふること百萬玉函、七軸妙法華を轉すること一千、終を慎み遠きを追ふ。三十三年、無明即ち明、普廣王に對して鴛鴦教を説く、諸相相に非ず。秦國太を接して蚌蛤の禪を露す。涅槃の窠窟を出でて、生死の蓋纏を脱す。燈籠靈柱に入り、虚空鐵船を駕す。然も恁麼なりと雖も、更に向上宗乘の事有り、試みに山僧が敷宣を聴け。」火把を抛つて、「雨中呆目を看、火裏に清泉を酌む。」

西夕明慶信女 預め百年後の下火の語を請ふ

「元是れ餘慶積善の家、光明照徹す盡河沙、試みに看よ大用現前の處、火裏の優曇一朶の花。夫れ惟れば、西夕明慶信女、神氷雪を深くし、語煙霞を帶ぶ。栽松の禍根、五祖の兒、周氏に託す。甘蔗の惡孽、千佛の母、摩耶と稱す。心生すれば種種の法生ず、淡閨洞房、枕上の化蝶、心滅すれば種種の法滅す、地獄天堂、

⑤五祖大滿禪師を栽松道者といふ、其の生前の因縁によりて名づく。舊説に曰く、四祖大醫禪師、牛頭山に居る、山中

杯中の假蛇。頓に三界の火宅を出で、直に一乘の大車に駕す。江月照すと雖も、曉風に遮らる。赤洒酒拘束没し、淨裸裸誦詠を絶す。末後の句を知らんと要せば、金口の吧吧を聴け。」火把を抛つて、「會すや、夕陽は長く我が西に在つて斜なり。」咄一咄す。

希西唯心信女の下火 預請

「即心即佛一精明、吹滅して阿毘の大火坑、若し檀郎を認めば千萬錯、頻に小玉と呼ぶ杜鵑の聲。夫れ惟れば、希西唯心信女、群を出でて萃に抜く、茂を騰げ英を飛す。龍女、華鮮如來と號す、頭を改め面を換ふ。馬婦、鎖骨菩薩と化す、物を接し生を利す。轉身自在、遊戯縱横、生死涅槃、落花三片五片。真如實相、脩竹一莖兩莖、塵塵解脫、箇箇圓成。露堂堂月白く、淨裸裸風清し。然も恁麼なりと雖も、向上卻つて事有り、端的君が爲に呈せん。」火把を抛つて、「一心を本とす常樂我淨、一氣に始まる元亨利貞。」喝一喝す。

渭川宗清信女の下火 預請

昔 日種氏四十九年、三説鹿野に資つて始めて鶴林に終を示す。爾よ

圓圓滿本光國師見桃錄 卷之四

老僧ありて松を栽う、人呼んで栽松道者といふ、曾て四祖に謂ふ、法道聞くことを得べきや、曰く、汝已に老ゆ、聞くことあるとも其れ能く化を敷かんや、露し能く再來せば吾れ尙ほ汝を持つべしと、乃ち去つて水邊に行き、周家の女子の衣を浣ふを見、揖して曰く、宿を寄することを得るや否や、女曰く、我れに父兄あり、往いて之れを求むべし、曰く、誰せば我れ即ち行かん、女首肯す、僧策を問らして去る、女歸つて懐ち孕む、父母之れを惡みて逐ふ、女歸する所無く、日々里中に庸紡して夕に衆館の下に於いてす、既にして一子を生む、以て不詳となして水中に棄つ、明日之れを見るに流に漂つて上る、氣體鮮明なり、大いに驚いて之れを擧ぐ、童となりて母に



り來、地藏の願輪に乗るときは、則ち外聲聞を現じ、内菩薩を秘す。彌陀の利劍を揮ふときは、則ち上攀仰無く、下已躬を絶す。無明の窠窟を出で、生死の羅籠を破る。木人太平の歌、長樂の鐘花外に響く。石女長壽の曲、關山の笛月中に揚る。塵塵解脱、法法圓融。然も是の如くなりとも、向上還つて事有り、一偈君が爲に通じ去らん。火把、圓を打して、清容獨り秀づ内家叢、粉黛三千淡濃を争ふ、去無く來無く所住無し、夕陽は長く我が西に在つて紅なり。火把を抛つて、喝一喝す。

眞如妙性信女の下火 預請

「眞如妙性曾て移らず、昨夜虚空地に落つる時、從來する所無く所去無し、蟻螟吞卻す五須彌。夫れ惟れば、眞如妙性信女、火中の木母、泥裏の摩尼、百媚千嬌、金沙灘頭の馬婦、鎖骨菩薩と現す。三從五障、靈山會上の龍女、華鮮如來と稱す。甚だ希有甚だ希有、也太奇也太奇。淨裸裸承當を絶す、甚の鏝湯爐炭とか説かん。赤洒酒窠白沒し、甚の兜率泥犁をか論せん。喝一喝、火把を抛つて、杜鵑啼いて落花の枝に在り。」

古梅妙意信女の下火 預請

「祖師無意西來せず、虚空を吹裂して鐵笛哀む、道ふことを休めよ少林消息斷ゆと、送行唯だ一枝の梅有り。夫れ惟れば、古梅妙意信女、正因信淨く、世相心灰す。瞿曇三界の師、燈籠合掌、摩耶千佛の母。露柱懷胎、教外別傳、葵花眼無うして日に随つて轉す。喝下正覺、芭蕉耳無うして雷を聴いて聞く。希有希有、奇なる哉奇なる哉。曹家女寶鏡臺に現す。看よ看よ、本來無一物、何の處にか塵埃を惹かん。火把を抛つて、咄一咄す。」

春芳妙榮信女の下火 預請

「百年の富貴一場の榮、風落花を攪して春夢驚く、歸らば便ち歸る可し兜率の路、杜鵑枝上月三更。夫れ惟れば、春芳妙榮信女、錦心繡口、玉振金聲、堅固法身、磨すれども磷かす、涅にすれども縞ます。眞如自性、之れを濁せども濁らず、之れを澄せども清ます。倩女離魂、那箇か眞底、龐婆團圓、共に無生を説く。瑜伽の法水を瀉いで、阿鼻の火坑を滅す。教外の宗旨を知らんと要せば、山僧汝が爲に施呈し去らん。火把を抛つて、誰が家の別館ぞ池塘の裏、一對の鴛鴦畫けども成らず。喝一喝す。」

維馨宗范信女の下火 預請

「無常迅速太だ端無し、假に雙林の般涅槃を示す、此れは是れ孃生、本來の面、月梅影を移して

隨つて食を乞ふ、邑人呼んで無姓兒と爲す、今の五祖弘忍即ち是れなりと。  
③ 釋迦をいふ。  
④ 阿彌陀佛、無量と譯す、西方極樂世界の教主、因位には法藏比丘と稱し、世々自在王佛の所に諸佛の淨土を觀見し、五劫の思惟を重ねて四十八の大願を建立す、永劫の修行を経て、所願満足成佛して阿彌陀と名づけ、淨土を西方に設く、阿彌陀は光明無量壽命無量なる因願酬報の覺體なり、宗門にては己身の彌陀、唯心の淨土にして來世の往生、他力の救済を求めず、現身に彌陀覺體を成じ、此の土に極樂淨土を現するを以て理想となす。

⑤ 孟子に、「伯夷は聖の清なるものなり、伊尹は聖の任なる者、柳下惠は聖の和なる者なり、孔子は聖の時なるものなり、孔子は之れを集めて大成すといふは、金聲のべて玉之れを振む、金聲とは條理を始むるなり、玉之れを振むとは條理を終るなり、條理を始むるは、智の事なり、條理を終るは、聖の事なり。  
⑥ 龐蘊居士の母をいふなり。  
⑦ 入槃涅槃の略なり、滅度をいふ。



欄干に上す。夫れ惟れば、維馨宗葩信女、珠簾玉案、禪板蒲團。少林の響に效ふときは、則ち西施が淡粧、興化を除非す。首楞の咒を持するときは、則ち摩登が愛纏、阿難を逼殺す。手に壙中の雙履を携へ、脚に門前の利竿を倒す。加之、初頓の華嚴、後分の華嚴、南詢の善財正覺を成す。實相般若、觀照般若、東請の常啼心肝を賣る。眞箇若し未穩在ならば、心を將ち來れ、汝が與に安せん。火把を抛つて、喝一喝す。

渭川宗清信女の下火 預請

「鑊湯爐炭清涼界、熱鐵洋銅安樂窩、佛法南方梅一點、人を驚かす春色多きことを須ひす。夫れ惟れば、渭川宗清信女、竹の節を保つが如く、花の和を養ふに似たり。山として雲を帯びすといふこと無し。則天下生の彌勒、水有り皆月を含む。豐干上品の彌陀、淨に入り穢に入り、佛に入り魔に入る。天女花を散す、維摩の憑を笏室に判す。古人菊に題す、涅槃の相を金河に示す。了了の時了す可き無く、玄玄の處亦須らく呵すべし。然も恁麼なりと雖も、末後の事如何。火把を抛つて、石女舞成す長壽の曲、木人唱へ起す太平の歌。喝一喝す。

芳園妙椿信女の下火 預請

「這の一株無根の大椿、花開き花落つ幾回の春ぞ、毘嵐昨夜忽ち吹倒す、驚起す南華夢裏の人。夫れ惟れば、芳園妙椿信女、髮を截る。陶母、機を断つ阿親。預め未來の兩果を懼れて、逆め現在の三因を修す。聞くや、深聲廣長舌、見るや、山色清淨身。龐老、心空の筈に登り、龍女、無價の珍を獻す。吾が這裏密密の處、凡聖を通せず。了了の時、何ぞ主寶を分たん。然も恁麼なりと雖も、向上の一句、如何が指陳せん。火把を抛つて、只だ補袞調羹の手を將つて、如來の正法輪を撥轉す。喝一喝す。

玉浦妙珍信女の下火 預請

火把、圓を打して云く、「價直三千衣裏の珍、靈光味さす緇磷を絶す、百年夢覺めて後の消息、翡翠簾前月一輪。夫れ惟れば、玉浦妙珍信女、佛見忽ち盡き、凡情已に涙す。繡彌勒の前、吾が室に入つて八齋戒を受く。珠羅漢の後、聖位を證して二乗の倫を超ゆ。鶴算龜齡、王母が蟠桃實を結ぶ。鳥飛び兎走る、恒娥が靈藥、神を頤ふ。聞くや、溪聲廣長舌、見るや、山色清淨身。然も恁麼なりと雖も、倩女離魂、那箇か是れ眞。若

①摩登伽 (Mandana) 又は摩登祇 (Mandika) の略、男を摩登伽、女を摩登祇といふ、義翻して本性といふ、楞嚴に性比丘尼と云ふ、具には阿徒多摩登祇旃陀羅と云ふ、此れ女卑賤なり。

②豐干禪師、天台山國清寺に居り、髮を剪りて眉に等しうし布裘を衣る、人、佛理を問へば隨時の二字を以て之れに答ふ、本寺の厨中に二人の苦行子あり、寒山、拾得といふ、之れと相親しむ、古鏡磨せざるとき如何が照燭せん、曰く、冰壺影像無し、猿猴水月を探る、曰く、此れは是れ照燭せざる也、更に請ふ、師道へ、曰く、萬德將來せずんば、我をして什麼とぞ道はしめん、寒拾共に禮拜すといふ、尋て獨り五臺山に入りて巡禮す、曾て圓丘風、丹丘に收たりし

時、豐干に師事して法要を問ふ、曰く、此の二菩薩何くにありや、師曰く、國清寺に鬘かとつて器を洗ふ所の寒山拾得是れなりと、圓丘拜辭してゆくと。

③陶侃の母湛氏、一夜鄱陽の孝廉范逵來りて侃が家に宿す、適々大いに雪ふる、依つて其の髮を截ち、隣人に賣りて肴饌を買ひて以て供す、逵之れを聞いて嘆じて曰く、此の母に非ずして此の子を生むこと能はずと、侃遂に功名を成すと。



し復た會せずんば、我れ指陳し去らん。」火把を擲つて、「冷灰撥ひ出す玉麒麟。」

賢屋利養大姉の下火 預請

長養功成つて年を記せず、浩然の一氣自ら完全、眼光落地底の時節、朶朶新に開く臘月の蓮。

ふ、敢へて問ふ、何なか浩然の氣といふか、曰く、言ひ難きなり、其の氣たるや、至大至剛、直を以て養ひて害ふなきときは天地の間に塞る」とあり。

附録

① 後平城帝の宸翰

朕、參禪年尙し矣。祖師許多の語頭古則、一一參究、一一證明す。本有圓成の話を擧して、未聞の聞を獲焉。後一日別峯に在り、直に德雲比丘と相見了也。従前參得底、悟得底、一時に瓦解氷消す。洒洒地落落地、是れより佛祖の瞞を受けず、受用確乎たり、大安樂を得。此の恩甚だ濃し、何の日か報謝し盡さん。縷縷不宣。

天文壬寅五月十三日

大休上人禪室

大休和尚 後平城帝に上る法語

世尊正法眼藏を摩訶大迦葉に付してより以來、一絲毫をも移易せず、東西の諸祖、的的相承、直に山僧に至るなり。恭しく以れば、日出處の國百六代 聖天子、吾が禪に參すること年尙し矣。一日召して再三請益し、奏するに本有圓成の話

① 第百四代後奈良帝なり、御名は知仁、後柏原帝の皇子、御母は贈左大臣教秀の女、鴨樂門院藤原藤子、後柏原帝崩じて即位す、此の頃は所謂戰國時代にして皇室の式微甚だし、公卿く皇室民屋に異ならず、公卿多くは皆諸侯に寄食し、或は出でて食を乞ふものあり、帝在位三十一年、弘治三年崩す、陵は深草にあり。

② 妙心寺山内の德雲院に住せしよりしか云ふ。



を以てす。陛下の答處、百丁千當、珠を盤に走す如くに相似たり。山僧掌を抵つて奏して曰く、「徹せり矣。」蓋し蕭梁の武帝を冷笑し、李唐の肅宗を熱瞞する者。陛下に非ずして其れ誰ぞ哉。願はくは寶祥萬安を保ち、永く佛法の檀越と爲りたまはんことを。珍重。

天文十一龍集壬寅迎佛會の辰、詔を奉じ妙心に住す。臣僧宗休謹書。

後平城帝圓滿本光國師徽號の宸翰

朕、曩の時、大燈の正傳を聞いて、挑つて師の室下に在り、詔して師を迎ひて内に入れ、密參垂語、其の示誨を受くること茲に年有り矣。師の印證を得るの後、國師を以て之れを稱せんと欲す、未だ其の志を遂げず。道風を北闕に遺し、徳化を西京に輯む。本體如然の靈光、寔に大人妙用なり。蓋し在日の旨に例して、特賜の號を以て、之れを稱して圓滿本光國師と爲すと爾云ふ。

御押

天文十九年二月七日

大休國師の門徒等

後平城帝本有圓成國師徽號の宸翰

朕、本光國師を召して、關山祖、拈得する底の本有圓成の公案を參得して、大機大用を得たり。今而

①唐第七代の皇帝、玄宗の第三子なり、肅宗太子たりし時、政を攝す、是の時慧思國師、白崖山に在りて道譽甚だ高し、肅宗に就いて深く禪要を研む、即位の後、國師を入内せしめ、敬慕師の禮をとる、上元二年を以て崩す。  
②天子の親しく書したまふないふ。  
③天子の宮殿の北の正門なり、上奏謁見の徒の出入する所。漢書高帝紀に「蕭何、未央宮を治む、東闕、北闕、前闕を立つ、即ち北にあるは玄武闕をいふ、宮中のことをいふ。

祖忌二百年に當つて、勅して本有圓成國師と號して、以て恩に酬い徳に報ゆと爾云ふ。

弘治三年三月十二日

微笑塔下

大休の號

宗休首座、別稱を需む、之れに命じて大休と曰ふ。仍つて頌以て證と爲すと云ふ。

千峯の勢は嶽邊に到つて止まり、萬派の聲は海上に歸して收まる、林下何ぞ曾て朝市に換へん、縦ひ塵劫を経るも頭を回さされ。

永正元年十一月 日

前の大徳特 芳叟

正法山妙心禪寺に住する 山門疏

東山 雪嶺和尚製

正法山妙心禪寺山門、欽んで北闕の繪旨を奉じて、前の第一座大休禪師を敦請して本寺に住持せしむ。國の爲に開堂演法、皇圖の萬安を祝贊する者なり。右伏して以れば、法社、師を擇ぶ、海棠は多く甘棠は少なり。學徒己に克つ、初節は易く晩節は難し。久しく 廣浮圖を見ることを厭ふ、忽ち佳弟子に逢ふことを欣ぶ。共しく惟れば、新命堂上大休大禪師、舌、霹靂を走らしめ眼は乾坤を空す、虛堂慧海の航と稱す。心、千古に涵す、洋

圓澤圓滿本光國師見桃錄 卷之四

①諱は禪師、尾張熱田の人なり、樂を妙喜庵の瑞巖石に受く、後、雪江環の輪下にありて契悟す、出でて尾の瑞泉寺、丹波の龍興寺、攝津の海清寺、京の妙心寺等に遷る、又大徳寺に在る。  
②住持を勸請する宣疏なり、官府の疏なきときは、山門疏に聖書を祝せよの語を加ふ。  
③諱は永理、別に靈虛、又惟庵と號す、丹後に生る、幼にして建仁寺に入り、十如院の九峰



嶼、法門の鼎たり。名諸方に重く廻祖道を行す。獅獅象旋、後昆家を興す。鳳毛麟角、教賢禪府、蚤に永明百卷の書を檢す。棒雨喝雷、晩に臨濟三要の印を佩ぶ。慈氏の兜率より下るかと疑ふ、輪王の閻浮を化するに類す。張蒼、漢を佐け、呂尙、周を相く、來つて勝會に赴く。阜陶は虞を歌ひ、奚斯は魯を頌す。仰いで丕圖を祈る、謹んで疏す。今月日疏。知事比丘、頭首比丘、勤奮比丘、西堂比丘。

同門の疏

慧峯の湖月如尙製

同門茲に審にす、正法山妙心禪寺、適く主席を虚しうす、特に綸旨を降して、大休禪師を德雲精舎に起して以て補處す。是に於て、法系に昆季たる者、此の盛舉を聞いて、忻抃に堪へず、胥率のて疏を製し、厥の駕を従臯すと云ふ。德雲、別峯に相見す、水有り皆月、虛堂諸老に徧歴す、誰が家か春ならざらん。寧ろ知識に逢ひ難しと曰はんや、學者の惑ひ多きことを其れ奈せん。共しく惟れば、新命妙心大休禪師、精神矍鑠、手段頓頑、面壁得髓、達磨拈華して大乘を赤縣に接す。頌古垂示、雪竇落草して百則を碧巖に評す。孔章の玄を窺ひ、衡癘の毒に觸る。牀角七八尺の藤杖、

寒時の閑梨、熱時の閑梨、擔頭一兩枝の梅花、者箇の行李、那箇の行李、南方の佛法を商量して、東海の兒孫を勃興す。未だ先宗を墜さず、是れを本色と謂ふ。鳥寺に住して一巡祖を罵る、宜しく度生を急にすべし。龜山に到つて連聲、兄と叫ぶ、同志に如くは莫し。

永正龍丙子に集る春三月日疏。

前大德 宗恕

前妙心惠樹

前妙心宗禧

前妙心玄訥

前廣嚴永資

知慶宗諗

前大德宗棟

駿州大龍山臨濟禪寺に住する山門の疏

駿州路 大龍山臨濟禪寺山門、欽んで大檀越源府君の嚴命を奉つて、靈雲大休禪師を敦請して本寺に住持せしむ。國の爲に開堂演法し、皇圖の萬安を祝贊する者なり。右伏して、以れば、虎丘、臨濟の正宗を振ひ、西華山五千仞に響ふ。駿河、圓通を安倍に出す、東海道十四州に冠たり。人境を待ち境人を待つ、聖は天を希ひ天は聖を希ふ。共しく惟れば、新命堂上大休和尚大禪師、名字宙に喧しく、語煙霞を帯ぶ。吾が師三門開堂、說法第一、智慧第一、曾祖四月入寺、住山八十、行脚八十、紫伽梨、影を禁池に

成に就いて爰染真具し、後參詳久しうして法を九條に嗣ぎ常に十如院に留る、永正五年勅を奉じて建仁寺に遷住し、文筆の才に長じ、其の名叢社に鳴る。

①にせ寺院といふ程の意、名ありて實なきをいふ。

②法門の實であるとなり。

③永明禪師の宗鏡錄百卷を著す陽武の人なり、秦に事へ御史となる、後、漢に歸し、從つて威茶を攻め、功を以て北平侯に封ぜらる、孝文の初め、丞相となり、年百餘歳にして卒す、書十八篇を著し、専ら陰陽律曆の事を説く。

④呂尙は太公望なり。

⑤阜陶は舜の時の司徒なり。

⑥大なる圓なり。

⑦賀疏の一種、新命の住持と同門の人が同門の故を以て、其の入院を賀して呈する所の文疏なり。

⑧慧峰は慧日山東福寺なり、湖月和尚、諱は信鏡、別に寶庵と號す、時に或は楠溪、鴨阜の號を用ふ、功にして出家し、東福寺の南壽佐に就いて參究し、其の法を繼ぎ、後、東福寺に出世す、師文辭を樂みとなし、常に古文眞寶を以て學徒に教ふと。

疏なり。

⑨喜びて手をたたくこと。

⑩靈寶重顯禪師、智門光祚の法嗣、字は隱之、遂州の人、嘗て景德傳燈錄によりて古則一百則をのきて之れが頌古を作る、後に圓悟、評唱して碧巖集と稱するもの即ち是なり。

⑪雪峰義存禪師が師兄巖頭全歸の提撕を受けて、紫山に在つて大悟成道せしこと前に見ゆ。



瀟し、鳥跋華、瑞を濁世に現す。靈雲山頭の古月、之れを仰げば彌高し、洛陽城裏の秋風、思ひて忘るゝこと能はず。美なる哉率陀、五鳳修造宜きなり。方丈大龍蟠居、邦君、弩を負ひて前驅し、府主、疏を作つて以て敦請す。文は歐蘇に至り、禪は妙喜に至る、百世の師を得たり。俗は成康の若く、壽は高宗の若し。萬乘の主を祝す、謹んで疏す。今月 日疏、知事比丘、頭首比丘、勸奮比丘。

臨濟寺殿 用山玄公大禪定門十三年忌の拈香 駿州臨濟寺に就いて忌を修す

前の臨川江心西堂 天龍寺三秀院

「這箇過去に於てするときは、則ち沈水佛と號して度生す、梅旦うして白し、分身の身。法報應化、現在に於てするときは、則ち香春佛と稱す、出世杏曉くして紅なり。無説の説、利塵熾然、凡は凡に同じく、聖は聖に同じ、方は自ら方、圓は自ら圓なり。梅檀世界の梅檀、如來、東國土に燎焯焯焯たり。 藤樹叢林、藤樹圍繞す、西竺乾に鬱鬱葱蔥たり。本來無染至理絶證、之れを蒸卻して師恩に酬ゆる者は、春日の知識、秋日の知識に供

①字は景堂、山城の人、少より景川和尚に親炙し、參禪究法す、大心院に住す、妙心開堂進寺すること兩次、後又尾の瑞泉を重す。

②大龍山と號し、靜岡縣安倍郡安東村にあり、享祿年間、四品前駿河太守今川氏輝公の開基に係り、特芳傑の嗣法、即ち大休宗休禪師の開山にして當時は今川義元勅命を奉じて堂宇を建立し、次いで武田信玄、徳川家康等各勅命によりて再建せり、後奈良帝の勅願所なり。

③後文によりて考ふるに、今川義元の兄、氏輝なり、氏輝子なし、遺囑によりて義元立つ。即ち四品前駿河太守今川氏輝公、當山の開基なり。

④藤樹は梵音、此に黄花と譯す、本草綱目に「尼千花を占蔔と名く」とあり、異同辨じ難し、

維摩經觀衆生品に曰く、「人麝麝林に入つて唯々麝麝を嗅いで餘香を嗅がざるが如し」と、蓋し芳香美麗なる花樹林なるべし。

⑤血生臭なきをいふ。

⑥慧遠法師、蓮社十八賢社を結ぶ。

⑦英權は即ち今川義元をいふ。

⑧法華經方便品に出づ、如是は萬法の當體、ありのまゝをいふ、十如是は諸法の當體に含まれたる十種の普遍性をいふ、即ち如是相、如是性、如是體、如是力、如是作、如足因、如是緣、如是果、如是報、如是本末究竟等、これを十如是といふ。

養す。之れを挿向して聖壽を祝する者は、香山の大仙、雪山の大仙に逢著す。江南の螺甲以て淺俗と爲す、吳中の鷓鴣猶ほ是れ 腥羶。法は空處より起り、人は鼻端に向つて參す。或時は大法を九衢紅塵の裏に轉す、材、佛宮の餘を收め、工、子來の助有り。或時は沈材を一燈黃雲の邊に取る、功徳八百を具足し、芬芳大千に遍滿す。薰籠字字相疑る、鷲嶺の文、龍宮の藏を寫し出す。滿爐縷縷として絶せず、鷄足の襪、熊耳の棉を織り成す。趙宋の善神凡上に九代の祖を冷笑し、匡廬の法師社中に十八賢を集むるを泥視す。一雨普霑す、大根大莖大枝大葉、諸漏已に盡く。木に非ず空に非ず、火に非ず煙に非ず。將に謂へり趙州の柏樹と、元來崑崙の蘭芷。看よ看よ、用山大禪定門、這の一炷の薰力に憑つて、三界の蓋纏を脱卻し、直處、密教教主拔苦王と同じく華臺の寶蓮を坐斷せん。香を擧して云く、「手に信せて拈じ來る別物無し、大龍山裏の大龍涎。娑婆世界南瞻部洲大日本國駿河州居住、大功徳主源朝臣義元、天文十有七年三月十有七日、伏して臨濟寺殿用山玄公大禪定門一十三白の遠忌の辰に値ふ。預め大龍山に就いて縹流を集め白業を修す。大日覺王の尊像を彫刻する者一軀、法華妙典頓寫漸寫印寫若干部、水陸妙供圓通妙懺各一會、英檀自ら壽量の一品を書し、



且つ 十如是を十首の和歌に演 出し、筆墨を以て佛事を成ずる者尙ぶ可し矣。自餘の作善、僧官の宣讀に詳かなり。今散筵に當つて、香華燈燭、茶菓珍饈を嚴備し、謹んで現前の清衆に命じて、同音に究竟堅固無上神咒を諷演するの次で、靈雲堂上大和尚を拜請して、陞座說法、兼ねて小比丘承董に副命して、この 乾陀羅耶を焚いて、本師釋迦牟尼大覺世尊、東方藥師醫王善逝、西方無量壽佛、今日の教主大日如來、當來下生彌勒尊佛、文殊普賢の二菩薩、現座道場の觀音大士、六道能化地藏願王、西天東土の歷代傳法の諸祖、開山七朝の國師、日本國內大小の神祇、天界地界冥府冥官、各各駢駢等に供養す。集る所の 殊助、大禪定門の爲に報地を莊嚴し往愆を滅除し奉る。茲に承る、大禪定門、年未だ 而立ならず、寶を易ふるの日、國を英檀賢弟に讓る。維れ時 禍蕭牆に起ると雖も、一日の中一戦して覇たり、國家を泰山の安に措く。是に於てか、仁祠を營みて山を大龍と號し、寺を臨濟と扁す。夜禪畫誦、淨侶の勤修する者、其の員を知らず。昔 破庵と松源と同じく密庵の門に出づ、一門の二甘露と爲す。破庵一傳して圓照に至り、三傳して佛國國師に至り、四傳して正覺國師に至る。松源の道、正法の師祖に至るまで五世、其れ昌なり。爾より來、此の兩派、大唐に濫觴して大倭に彌繪す。法幢を建て、法霜を施す者枚擧するに遑あらず。蓋し英檀、當寺を創建するの始め、吾が先

- ① 梵語 Candela なり、佛國の名、香積と譯す、こゝは乾陀羅樹より製したる香料。
- ② 殊助に同じ。
- ③ 三十而立の語より來る、三十に至らざるをいふ。
- ④ 密庵は成傑禪師の法嗣なり。
- ⑤ 妙心寺開山慧玄禪師をいふ。
- ⑥ 松源、運庵、虛堂、南浦、宗峰と五世なり。

國師を勸請して開山祖と爲す。其の先、定光寺殿、佛國の道風を慕ふて、其の迹を師とする者なり、所以有る哉。加之、大禪定門、正法の師祖と異代同諱、會曰ふ、甚だ奇甚だ特なりと。且つ復た大源禪師、龍山の山主と爲つて、晨鐘暮鼓、禮樂一新、月斧雲斤、輪奐美を盡す。頃日山門佛殿落成、修鳳の手を施す、修造住持、說法住持、二難相并す。今日適く此の忌辰に際して、禪師、英檀の嚴命を傳へて、靈雲老師を拜して、陞座普說し、山野亦驥尾に附して蛙鳴を作す。累世通家、左右源に逢ふ、先師未了の因縁を了する者乎。桃花 上巳の風景を今朝に餘し、宜なるかな、說法靈雲和尚をして師子吼後ならしむることを。木犀雙徑塢の天香を三月に吐く、耐耐なり、亂道圓照の遠孫をして、野干鳴先ならしむ。慚根慚根、共しく惟れば、臨濟寺殿用山大禪定門、才色兼ね麗しく、忠孝兩ながら全し。今川の源氏の嫡流に出づるや、疏伽河、信度河、縛芻河、徒多河の衆水、其の涯涘を窺ふに足らず。用山の 清和の後裔に承くるや、普賢山、仙人山、白塔山、負重山の奇峯、何ぞ敢て厥の層巒を望まん。之れを澄せども澄からず、之れを清せども濁らず、之れを仰げば彌高く、之れを鑽れば彌

- ⑦ 輪奐は結構をいふ。
- ⑧ 賢主と嘉賓とを二難といふ。
- ⑨ 上は初義なり、三月初めの巳の日を以て上巳の節とす、後世は巳の日にかゝばらず、三月三日を節日と定められたる、なほ古名を用ふ、即ち破鏡して流水の上に飲す、以て水上盟誓の意にとる、今和俗の桃の節句なり、幾之が關亭の記にも見ゆ、即ち彼の風物を今に移したる意ならん。
- ⑩ 此の四川は印度の四河をいふならん。
- ⑪ 清和源氏なるが故にいふ。
- ⑫ 韓信、淮陰侯に封ぜらる、張良、蕭何(或は陳平)と共に漢室創業の三傑と稱せらる、初め項羽に従ひ、後、漢に歸して大將軍となり、諸侯を伐つて天下を統一す、後、呂后に忌まれ、高祖十一年に捕れて



墜し。子房は是れ英、淮陰は是れ雄、金卯の赤帝を輔く可し。趙昌が花、邊鸞が雀、畫工の黄空を屑とせず。枕を高くするは遠江州の水聲、近く聴く、欄に凭れば則ち浮島が原、山色遙に連る。善御夜白の逸群に乗す、盡く。王良と爲す。閩國駿馬を好む、平生海青の猛捷を臂にす。常に景升が臺に登つて鷹鷂を呼ぶことを笑ふ。事一時に美なり、語千載に流ふ、道九野を光し、徳八埏に載つ。兵を談れば、吳に合し孫に合す、孫子は孟子、吳子は論語、家を興して文有り武有り。武王は春王、文王は元年、華胄燁燁、瓜瓞綿綿たり。牡丹海棠名いはず、温國年少の譽を馳す、芝蘭玉樹、秀を鍾む、謝家風流の爛なるに擬す。難兄難弟行を成す、鴻鴈朋と曰ひ友と曰ふ。座に盈つる貂蟬、地三河の魏を連ね、景八境の度を移す。秦範・範政の先緒を振起し、定家・家隆の遺編を熟讀す。曼卿は歌に豪なり、歐陽は文に豪なり、太白は詩に豪なり。歌詞妙絶、芳聲藉藉たり。胡照は其の骨を得、韋誕は其の筋を得、索靖は其の肉を得たり。骨格超越、筆勢翻翻たり。藝に遊ぶときは、則ち薛嵩が蹴鞠に効ひ、射を學ぶときは、則ち羿氏の控弦に勝れり。晉に三代の禮樂を整ふるのみに匪ず、矧ん

殺する、嘗て辱を忍びて屠中少年の敗下を出でたるは著明なる美譚なり。  
① 王良は古の名高き御者。孟子滕文公に「昔は趙盾子、王良をして壁突と與に乗せしむ」とあり。又韓文公の石處士を送る序に「駟馬輕車に駕し、熟路に就いて而して王良造父をして之れが前後を爲さしむるが如し」とあり。  
② 孫吳の兵法に精しく又兼て文を能くするをいふ。  
③ 藤原定家、鎌倉時代の歌人、俊成卿の子、後鳥羽上皇の知遇を蒙り、麗宮に詣りて歌の判者となる、勅を受けて源通具等と新古今和歌集を撰す、正二位に叙し、權中納言となる、世に京極貴門と稱す、彼の百人一首は小倉山莊の障子に書きしものといふ。家隆は光隆の子、歌を俊成に學び、定家

や一世の威權を執るをや。治安の策を獻じ、勳業の鞭を著く。河南河北從ふ者、南と無く北と無し。關東關西歸する者、東よりし西よりす。清見濁、台星照臨、雕輪、唯軋、宇度の濱、天人降下、羽衣翻舞、之れを駐むるに叫ぶこと無し。莫要去莫要去の鸚鵡、之れを勸めて呼ぶこと有り。不如歸不如歸の杜鵑、烟光淺間の嶽頂に凝り、橋聲安部の市廓に報ず、草木禽獸恩光を借る。草木の主也、禽獸の主也、菟薨雉兔龍渥に沐す、菟薨の者も往き焉、雉兔の者も行く焉。偉なる哉臧孫、魯に後有る。晉なるかな矣昭王、士を燕に致す。胸中自ら丘嶽有り、公餘多く林泉を愛す。五郎易の六郎、昌宗清標を玉座に望む。一人は道安、半人は鑿齒、緇徒を門扇に引く。隣好を修して以て木李を投じ、以て瓊玖を報す。淳風の茅茨を剪らず、采椽を斲らざるを貴ぶ。蓋世功を成すの項羽に比すと云ふと雖も、惜む可し不幸短命の顏淵に似たることを。去つて後木枯の森、深秋寂寥。今に至るまで田籠の浦の佳月、嬋娟三城の帳、昇平の夢に屬し、一曲の鈴、悵望の心に關る。因つて懷ふ公幕府に居ることを。萬里の春、逐客の來るに従ひ、十年の花、佳人の老を送る。圖らざりき、吾れ齋筵に赴かんとは。願はくは言れ居易、兜率に歸せんことを。胡爲れそ裴休于闐に生

と名を等しうす、所誅總て六萬首に及ぶ。宮内卿從二位に進み、壬生二位と稱す。  
④ 石曼卿は宋代の奇士也、常に古人の奇節偉行非常の功を慕ひ、世俗を見る層々として其の志を動すに足るもの無し、常に落落として酒を呑んで自ら志を放す、曾て濟州金鄉縣に知たり、其の文章勁健、雄逸甚だ見るべきものあり。  
⑤ 羿は古の射の名人。  
⑥ 夏、商、周をいふ、禮記に、「三代の禮は一なり、民共に之れによる」と。  
⑦ うめききしること。  
⑧ 射を刈るもの、薪をきるもの。  
⑨ あてやかなること。



まる、何の處の深林にか關を覓めん。倭國の富士、金華學士の句に入る、者の風顛漢虎鬚を捋つ。臨濟老師、黃檗先師の禪を倡ふ、其の夢幻泡影を觀せんよりは、若し廣續普聯を挑げんに曷ぞ。此の山本色の住持を接して、妙門を揭示し正法を流通す。當處に歷代の祖師を呵して、直指を掃蕩し單傳を拂散す。什麼の默時説、説時默とか論せん、什麼の偏中正、正中偏をか談せん。陰陽不到の處に向つて、父母未生の前を會す。理上の工夫、事上の工夫を了じて、陸互が普願に見ゆるに依倚たり。棒下の正覺、喝下の正覺を成じて、韓愈が大顛に參するを睥睨す。頼に衆罪の霜露を消し、直に自己の山川を領す。也太奇也太奇。鑊湯爐炭を踏倒して一步を動せず。勿可把勿可把。地獄天堂を打破して一拳を勞せず。濁世烏鉢を現じ、虚空鐵船を駕す。正與廢の時、香嚴童子出で來て妙語芳鮮、曰く、如上の所説、如かじ之れを棄捐せんには。大禪定門の受用三昧底、言を以て宜ぶべからず。洒洒落落として本分に歸田すと雖も、即今英檀の孝心を感じて、此の法會に向つて象馭回旋す。之れに繇つて無量の化菩薩、袂を摺き肩を拍つ。山野旂れを瞻仰し、旂れを讚歎し、小祇夜一篇を以てす。木人涙落つ暮春の天、光景遷ると雖も物遷らず、聴くや燒香無譜の曲、松風聲度る。十三絃。」

三三六

- ①廣燈、續燈、普燈、聯燈の五燈ある俗傳。
- ②陸互大夫、南泉普願禪師に法を受く。
- ③なまめに見る、にらむこと、史記に「睥睨して故らに久しく立つ」とあり。
- ④十三年遠忌の縁語を用る也。
- ⑤北斗星のあるところをいふ、又はめぐる道。
- ⑥他の作りし詩に相和して作るをいふ、次韻、用韻、依韻の三體あり、次韻は原韻の體和

景川和尚三十三回忌の香語

松岳和尚

那伽三十有三年、舌上の龍泉、斗躔を衝く、道ふ莫れ先師に此の語無しと、黃鸞啼破す綠楊の煙。

松岳和尚の韻に和す

相國寺惣西堂

伊陽洛を隔つ幾多年ぞ、仰ぎ見る德星の今躔に聚ることを、一雨過ぐる時百花發く、春風吹き起す鷓鴣の煙。

して前後易ふることなきをいふ、用韻は原韻を用ふるも前後に拘泥せざるなり、依韻は原作と同韻中にある文字を用ひ、必ずしも原韻の字を用ひざるなり、また用韻依韻とを合せて和韻といひて、次韻に對する説もあり。

國譯圓滿本光國師見桃錄卷之四 終



# 圓滿本光國師見桃錄卷之四

遠孫比丘衆等重編

## 預請の秉炬

西隱秦公座元預求百年後秉炬語

透過百二十秦關無所從來那處還石火光追不及等閑陽倒鐵圍山共惟西隱秦公座元形容枯槁手段頑頑制大鼇於滄海接靈鷲於塵寰或時向孤峯頂盤結草庵口吞三世佛或時開一心田剷除荆棘滅五無間到這裏用甚麼德山棒臨濟喝管什麼釋迦富彌勒慳雖然如是別要聽向上一曲子麼丙丁童子高擊節虛空唱起菩薩蠻咄

東陽院頭月岑珠公首座下火 預請

一顆明珠本自圓徑雲深處出龍淵鐵鎚擊碎後消息臘月花開火裏蓮夫惟東陽院殿月岑珠公首座有權有實無黨無偏學東陽清規則綿蕪野外參南方佛法則擒住風顛首座行道威音已前生死即涅槃水流元入海涅槃即生死月落不離天正與麼時說什麼聲聞果緣覺果論什麼如來禪祖師禪若未然聽火把子敷宣拋火把此是長生真秘訣冰桃結實歲三千

喝一喝

賢仲啓聚首座預請百年後秉炬語

地獄天堂一聚塵塵塵解脫本來人好和西嶺千秋雪鐵鑄梅花火裏春夫惟賢仲啓聚首座截流香象衝浪錦鱗利自利他膝下黃金用之無盡殺佛祖眉間寶劍磨而不磷打破涅槃明鏡脫卻生死苦輪箇箇立在轉處密密把定要津舜若多神面皮黑燈籠開口笑閻閻雖然怎麼向上一路如何指陳拋火把溪聲廣長舌山色清淨身咄一咄

鳳林超公書記下火 預請

泥洹一路轉身時石火光猶鈍遲地獄天堂昨宵夢風驚花落杜鵑枝夫惟鳳林超公記室禪師渴世鳥跋叢林白眉懸肘後符而難避禍讀禪本草而未得醫佛日慧日頓破癡暗大藏小藏僅拭瘡痕積翠強設三關屋頭山色豈非清淨永明誤唱六字門前湖水即是寶池凡聖不留朕迹自他何隔毫釐露髑髏赤條條全無菩提之可證清寥寥白的的寧有生死之應離脚下踏著實地幾前陽倒須彌緊要時節向上錯鏈子如何提持去拋火把紅爐放出鐵鳥龜喝一喝

秀岳梵才書記下火 預請

此是宗門直指才當機踢倒涅槃臺無陰陽地春風轉火裏優曇朶朶開夫惟秀岳梵才書記居翰墨任負棟梁材提撕多福話頭三年受用只栽竹漏泄少室祖意一日工夫半爲梅生也石火光中留不住死也閃電機裏喚不回觸向上錯鏈子虛空消鐵山摧到這裏何物恁麼去



何物恁麼來，書記還會麼，拋火把，燈籠沿壁上天台。

大初最公藏主下火 預請

最初一句，末後牢關，直透過看，綠水青山，夫以大初最公藏主，道肥貌瘦，年老心閒，掌大小藏，鎗列東西序班，方袍蓋苞，圓頂梅檀，位超十地已上，前輩芍藥，後生茉莉，時丁二佛中間，因則用因果，則用果，愚而不愚，頑而不頑，破草鞵三文兩文，雲無心出岫，折拄杖七尺八尺，鳥倦飛知還，此是藏主平生著力底，若復向上轉，文殊普賢失其境界，德山臨濟猶隔塵寰，到這裏說妙罪過，罪過，道禪慙慙，撒手長空外，可望不可攀，雖然恁麼，虎斑易見，誰窺人斑，拋火把，開慶雪峯南趙州北，還鄉曲菩薩蠻，咄一咄。

掬月軒主德良藏主預請乘炬語

良男矣七佛之師，倒跨金毛獅子兒，忽解轉身底時節，一聲吼裂五須彌，夫惟掬月軒主，不重先聖，何拘舊規，仙山五色瑞雲，鍊不老藥，寶泉一滴甘露，酒破戒卮，應變自在，殺活臨時，三千刹界袈裟，橫拽豎拽，十二街頭尺八，順吹逆吹，拄杖作舞，燈籠開眉，如來禪祖師禪，掬水月在手，煩惱濁衆生濁，弄花香滿衣，畢竟是何物，端的不相知，此是藏主平日作略，更有格外玄機，試看山僧提持，拋火把，咄咄咄，萬般爐中鐵蒺藜。

慶實藏主百年後下火

實相真如體本然，百年三萬六千遷，無端觸著棒頭去，東海鯉魚跳上天，實藏主實藏主，涅槃不生，翡翠踏翻荷葉雨，實藏主實藏主，繁言不滅，杜鵑啼破竹林煙，拋火把，向上一路，佛祖不

傳，咄一咄

明谷叅公侍者預請乘炬語

此郎廿五白雲端，倒跨驢兒活路寬，吹起少林無孔笛，還鄉一曲萬年歡，夫惟明谷叅公侍者，青燈燒盡黃卷讀殘，南山有一條龍鼻蛇，擒縱與奪，西川出八角烏頭子，甘苦辛酸，其參如來禪，易蓋會祖師意難，卽佛卽心，何待彌勒五月之降誕，非生非滅，疾入罽曇雙樹之涅槃，鐵圍關百雜碎，百雜碎，鐵圍關，虛空翻筋斗，日月轉朱欄，拋火把，會麼，叅侍者，叅侍者，倒卻門前刹竿，喝一喝。

賀屋玄慶禪人下火 預請

金襴傳外事如何，慶喜問端，瞞葉波，向刹竿頭轉，身去，蹈躡教海與禪河，慶禪人還會麼，若道會得，達磨不會禪，梅瘦占春少，若道不會，罽曇已成道，庭寬得月多，會不會都來是錯，滅不滅畢竟非，佗淨裸裸絕承當，空空空時真也不立，赤洒洒沒窠臼，玄玄玄處妙也須呵，水自竹邊出，風從花裏過，喝一喝，石女舞成長壽曲，木人唱起太平歌。

三翁德惠庵主下火 預請

竺乾猛將陣堂堂，惠劍光寒三尺霜，生死涅槃秋一夢，火中菡萏覺猶香，惠庵主惠庵主，恁麼承當，倘復未承當，頻呼小玉，只要檀郎，軟語魯直坐帷帳中，或時燕寢螺甲，沈水隨身兜率裏，袈裟角或時魚行酒肆，姪坊看麼，山色清淨，聞麼，溪聲廣長，葛直轉去，莫涉思量，不通凡聖，把定封疆，雖然如是，欲到向上田地，山僧爲舉揚，擲火把，昆侖奴齊怒發，推倒門外金剛。



柏庭祖永尼首座下火 預請

永劫無明淨法身，法身覺了卻生塵。到頭霜夜前溪月，龍女寶珠磨不磷。夫惟柏庭祖永尼，市中卜隱屋裏藏春。傳松源餘波於海東外，施蘭溪剩馥於河內民。蓋以吾首座到靈樹，而勝尼長老住聖因。有餘涅槃，無餘涅槃。花間作夢，雙蝴蝶大善知識。小善知識，棒頭敲出玉麒麟。不立迷悟，把定要津。恁麼時節，說什麼阿鼻。依正論什麼苦海沈淪，生涯洒洒落落。心地歷歷明明，此是祖永大姊。斷送三萬日，使得十二辰底。別要會西來意，待柏樹子成佛。向汝指陳，舉火把。虛空翻筋斗，燈籠笑閭閻。拋火把，因。

久庵桂公尼首座下火 預請

少林煥桂久昌昌，蓋覆真丹與搏桑。昨夜昆風忽吹倒，百年一夢醒猶香。夫以久庵桂公尼，精神可掬，意氣難當。末後牢關，是放開是捏聚。本來面目，非濃抹非淡粧。截斷生死，拋金剛王座。塵無垢世界，步步涅槃會場。青山綠水，體露真常。此是大姊間受用，若要向上轉去，別聽山僧舉揚。拋火把，黃金鑄出崑崙鐵，火裏龜毛數尺長。咄一咄。

宗銀尼首座下火 預請

天堂地獄假銀城，遊戲神通傀儡棚。春夢一場頻喚起，曉鶯枝上出花聲。夫惟寶生尼寺住持宗銀尼首座，大姊晚節難保，坤德利貞。少林門下總持得肉，法華會上菩薩求名。一枝佛法的，百草祖意明明。無山不帶雲，人人具足。有水皆含月，箇箇圓成。須彌燈王佛入鉢孔，勝熱婆羅門出火坑。會麼，拋火把，莫認自己清淨，直踏毘盧頂行。喝一喝。

檀溪宗香尼首座下火 預請

法身堅固本來香，郁郁乎薰徹十方。試滅卻心頭火，看鑊湯爐炭自清涼。夫惟檀溪宗香尼，溫面輒語，石心鐵腸。散花天，勘破維摩默默。半杓水，賺過末山孃孃。無明即明，燒梅檀木而奪。猶蘭之臭氣，諸相非相。貪桃李實而忌梅花孤芳，出生入死，不存窠臼。戒皮定肉，一任分張。正與麼時，拶倒丙丁童子，棒殺閻羅大王。丈夫作略，誰肯抵當。雖然恁麼，更有真歸處。聽取山僧舉揚。拋火把，玉樓巢翡翠，金殿鎖鴛鴦。咄一咄。

桃谷周仁尼首座下火 預請

千年桃核舊時仁，觸惡鉗鎚絕點塵。欲到靈雲不疑地，花開空劫以前春。夫惟桃谷周仁尼，預懼未來苦果，頓了佛性三因。臨靈山法華會中，則壓倒無垢勝光佛。觸洋嶼轟竹篋下，則冷笑秦國大夫人。或時南方界域化，或時北斗裏藏身。赤洒洒斷紅絲線，活潑潑碎鐵磨輪。雖然灑麼，千聖不傳處，要到大休歇地。麼，試聽火把子指陳。拋火把，雲破月來花弄影，寒山拍手笑閭閻。喝一喝。

玉英祥瑤尼首座下火 預請

大乘法器魯瑤瑤，本有圓成君自看。未下一鎚鎚碎了，青山月上影團圓。夫惟玉英祥瑤尼，似竹有節，如環無端。春入嶺梅村，猶獠盧能打破明鏡。雪埋庭柏野，狐精達磨蓋卻空棺。悉有佛性，不受佗瞞。淨裸裸絕承當，說甚真如解脫。赤洒洒沒窠臼，論什麼菩提涅槃。雖然恁地，向上還有事。吐露心肝去，拋火把。石女雲中作舞，木人奏萬年歡。咄一咄。



桃雲宗悟尼首座下火 預請

不分迷悟絕凡聖百歲光陰春夢中春夢醒來無一事桃花依舊面皮紅夫惟桃雲宗悟尼心鏡清淨戒珠玲瓏警轉一氣具劉鐵磨作略掃除五障躡僑曇彌遺蹤智行運動理事圓融文殊無二文殊胸中吉祥宅彌勒有半彌勒天上兜率宮了了時霞穿碧落玄玄處月拂清風會麼石火莫及電光閃通拋火把喝一喝

花屋宗因尼首座下火 預請

這野狐精不味因六雄峯下解驪身無端蹈倒涅槃窟鐵樹花開火裏春夫惟花屋宗因尼透金剛圈轉鐵磨輪掃除濁世批糠馬祖簸箕跳不出祕在形山一寶龍女明珠磨不磷幻生幻滅放開線路不去不來截斷紅塵更有送行句聽山僧指陳拋火把夜深一片虛樞月寫出梅花面目真露

春芳宗椿尼首座下火 預請

莊椿一萬六千歲昨夜毘嵐吹倒來試聽無上真曲調花開胡蝶舞三臺夫惟春芳宗椿尼形如枯木心似死灰透過兜率三關則葵花無眼隨日轉觸著臨濟一喝則芭蕉無耳聞雷開鑊湯爐炭一時滅劍樹刀山一時摧是甚麼時節看看燈籠露柱笑哈哈錯錯

雲仲心祥尼首座下火 預請

劈破率陀天上雲臨行一朵好呈君龍華三會夢中說殘漏聲沈曉色分祥首座祥首座夢中說還聽取麼三世諸佛亦說夢前臺花發後臺見六代祖師亦說夢上界鐘清下界聞山僧亦

說夢漆圓胡蝶若箇分影末後悠悠槐國螻蟻多少作群生死涅槃猶昨夢脫卻鐵枷三百斤淨裸裸沒拘束赤洒洒絕功勳與麼時節阿鼻獄卻成夢宅丙丁童子笑問問喝一喝

希溪善灌尼首座下火 預請

迅機截斷激溪流末後牢關去不留但看百年三萬日槿花半照夕陽收夫惟希溪善灌尼欺纏佛晉嘴鐵磨劉博究毘尼學西天苾芻草帶累先聖劈東福多子榴是則總持得肉非則演若失頭玄玄處又須呵不入涅槃清淨行者了了時無可了不墮地獄破戒比丘五逆消滅萬機罷休拋火把會麼向上那一路何處覓蹤由喝一喝

前住明禪玉宗琳尼藏主預請百年後乘炬語

百歲光陰瞬息中五蘊非有又非空鐵鋒頭上轉身路歸便可歸兜率宮夫惟宗琳尼截斷乘流嘴偃跛脚扶起正法慕岳贖翁一雙胡蝶上葵花堅固法身有長有短兩箇黃鸝啼翠柳真如自性無始無終赤洒洒沒拘束淨裸裸絕羅籠與麼時節向上那一句如何爲君通拋火把看看丙丁童子面門紅喝一喝

一宗秀統尼藏主下火 預請

釋門正統苾芻尼冷笑少林尼總持夜半有人負將去鐵鋒頭上五須彌夫惟一宗秀統尼預示鶴林滅度相不待龍華下生時掃除眼裏花則劍樹刀山即真如界滅卻心頭火則鑊湯爐炭變清涼池到這裏說甚麼五障論什麼三祇機輪轉處閃電猶遲尼藏主還會麼拋火把欲問花來處東君亦不知喝一喝



寶山珍尼藏主下火 預請

祕在寶山滄海珍靈光一點不緇磷無端和卻紅爐雪百鍊將來色轉新夫惟寶山珍尼藏主坐斷末山頂推轉鐵磨輪清淨本然十方三界尊面常照寂爾萬象之中獨露身頭頭顯露物物全真不通線路把定要津雖然恁麼更有向上宗乘事試聽山僧指陳拋火把白灰撥出玉麒麟喝一喝

月心宗珠尼藏主下火 預請

衣裏明珠不琢磨一鎚鎚碎看如何大千俱壞底時節放下全身與火蛇夫惟月心宗珠尼舌轟霹靂辯瀉懸河一路涅槃門有水含月十方薄伽梵無風起波藏身北斗託夢南柯箇箇圓成說甚麼現在佛過去佛人人具足論什麼煩惱魔生死魔了了時沒交涉玄玄玄處早蹉過雖然如是末後一句還會得麼拋火把石女舞成長壽曲木人唱起太平歌

悅巖宗忻尼藏主下火 預請

一陽陽飄生死海一拳拳倒涅槃堂棚頭傀儡百年夢牽得無絲玉線長夫惟悅巖宗忻尼釘著鐵舌錦心繡腸娑婆即是華藏伽耶豈非寂光杜鵑啼破落花村赤洒洒沒拘束翡翠蹈翻荷葉雨淨裸裸絕承當雖然恁麼向上宗乘一著試聽山僧舉揚拋火把安禪未必須山水滅卻心頭火自涼喝一喝

德持開基頓庵宗圓尼大姊下火 預請

少林門下德持尼元自圓成了頓機再見何勞百年後殘花啼落杜鵑枝夫惟德持開基頓庵

宗圓大姊短世風驚雨過利那物換星移鵝噪鴨鳴要檀郎喚小玉牛擗馬蹈拽鐵磨到大馮機輪轉處閃電猶遲淨裸裸赤洒洒說甚兜率泥犁也奇快也奇快昨夜有力者醜難負須彌去拋火把咳

速緣妙淨禪尼百年後下火語

鍊出舍那清淨身紅爐焰裏絕纖塵放開線路通消息雨過青山色轉新夫惟速緣妙淨禪尼預懼苦果蚤修良因婆子燒庵正好趕出倩女離魂那箇是真生也樹呈風體態死也波弄月精神潤之不濁磨而不磷雖然恁麼要到向上田地試聽山僧指陳拋火把咄咄咄冷灰撥出玉麒麟

琴溪妙泉禪尼下火 預請

先天有物徹黃泉自性彌陀易地然無所從來無所去舉頭殘照住居西夫惟琴溪妙泉禪尼迷雲盡心月圓人向靜中忙勘破臺山婆子路從平處嶮瞞卻趙州老禪掉廣長舌八十餘年白滴滴清寥寥蹈倒涅槃一路淨裸裸赤洒洒截斷生死兩邊到這裏說甚五障論甚十纏雖然恁麼向上卻有事聽山僧敷宣拋火把木人石女叫希有臘月花開火裏蓮喝一喝

月清明圓禪尼下火 預請

一輪心月本來圓明鏡非臺輝碧天無孔鐵鎚鎚碎了江南野水白鷗前夫惟月清明圓禪尼眉宇秀發和氣霽然三世妙德尊稱智母五障娑竭女號華鮮捨邪歸正顯實開權加之清淨行者不入涅槃翡翠蹈翻荷葉雨破戒比丘不墮地獄鶯鶯衝破竹林烟莫就錯錯錯須呵玄



玄玄禪尼還會麼。拋火把向上一路千聖不傳。咄一咄。

春榮慶壽尼大姊下火 預請

閻浮壽盡百年移。蹈倒泥洹活路來。一點塵埃何處著。火蛇吞卻五須彌。夫惟春榮慶壽尼大姊。水中乳味泥裏摩尼。或底統路說禪。喚木塔作老婆子。或底當陽直指。瞞林際。稱小厮兒。其人如金如玉。磨不磷涅不緇。生也春風桃李花開日。死也秋雨梧桐葉落時。淨裸裸割定肉。赤洒洒脫戒皮。萬機休罷。佛祖不知。向上轉去。莫涉多岐。與麼時節。大姊還會麼。拋火把。會不會都來錯。江月照松風吹。

雲林宗怡尼大姊下火 預請

直把雲林作鶴林。紅爐煉出紫磨金。無端入得如來地。一段靈光照古今。怡大姊怡大姊。從門入者匪自家珍。心即是佛。佛即是心。心外求佛。海底摸鍼。清淨行者不入涅槃。聽雨寒更盡。破戒比丘不墮地獄。開門落葉深。別有向上那一竅。大姊向何處參尋。拋火把。石女舞成長壽曲。高山流水絕知音。喝一喝。

芳室見春尼大姊下火 預請

一場春夢百年榮。地獄天堂客路程。到得歸來無別事。杜鵑啼落月三更。夫惟芳室見春大姊。梅檀圓頂。桂籍芳名。親聞鶴樹終談。能持慈菴尼戒律。不待龍華初會。自作桃花色。衆生豈假修證。本來圓成。權大乘實大乘。火熱水冷。棒正覺喝。正覺電卷雷轟。說甚麼真如佛性。論甚麼聖解凡情。石女舞長壽。木人歌太平。雖然與麼。別有少林那一曲。莫唱陽關第四聲。拋火把。須

彌座下烏龜子。直踏毘盧頂上行。喝一喝。

古柏宗庭大姊下火 預請

庭前喫盡黃金草。這老特牛無鼻巴。忽到瀉山拗折角。化成火裏牡丹花。夫惟古柏宗庭大姊。出三界獄。離五蘊家。說死說生。彷彿炎天梅藥。如夢如幻。依稀雪裏蕉芭。截斷腳下紅線。脫卻頂上鐵枷。吾宗無語句。不須口吧吧。拋火把。犀因甌。月紋生角。象被驚雷。花入牙。喝一喝。

慈德庵春溪明榮大姊下火 預請

榮耀如花花似夢。夢中三萬六千春。靈光不昧涅槃月。影在浮雲淺處新。夫惟某名。以慈爲宅。維德有隣。預怖當來苦果。茲修現在勝因。有時轉七軸蓮。教壞八歲龍女。有時拈一莖草。熱瞞丈六金身。卽心卽佛。全假全真。常啼誤東請。善財強南詢。鐵壁銀山不通凡聖。愛河欲海把定要津。正與麼時。生死去來本無住處。地獄天堂豈立纖塵。赤條條空索索。口吧吧笑閻閻。此是明榮大姊平生如幻三昧底。卽今向火焰裏轉大法輪。諸人還看麼。倘或未委悉。試聽山僧指陳。拋火把。白灰拂出紅麒麟。錯錯錯。

太虛理圓大姊下火 預請

本是圓成那一佛。靈光不昧古來今。忽然寂滅現前處。雨洗殘紅新綠深。夫以太虛理圓大姊。外少緣飾。內持戒禁。三萬六千日前。繡工夫。爲梅香魂入夢。三萬六千日後。閒受用。栽竹塵事無心。打破彌猴鏡。拋擲翡翠簪。加之總持扣。少室投機。強分皮髓。德雲在別峯。相見何勞參尋。放開線路。官不容針。生魔死魔。去粘解縛。男相女相。點鐵成金。到這裏說甚麼。七凹八凸。論什



變四大五陰，別有轉身句。試聽火把子發獅子音，拋火把末山頂日杲杲。鐵磨輪風凜凜，喝一喝。

玉江道琳禪定門下火 預請

不待虛空落地時，活機前蹈倒阿毘。黃頭碧眼無間夢，蘿月松風一任吹。夫惟玉江道琳禪定門，瑚璉有價，琳琅無疵。隨緣真如，不變真如。雪裏芭蕉，摩詰畫分段。生死變易，生死炎天。梅葉簡齋詩，展則徧十法界，收則吞五須彌。與麼時節，說什麼人空法空，淨裸裸天無四壁。論什麼真諦俗諦，赤洒洒地絕八維。泥洹一路，莫涉多岐。拋火把看看，紅爐放出鐵烏龜，喝一喝。

越州太守雲江守慶居士下火 預請

掃蕩魔軍百萬兵，七花八裂涅槃城。凱歌一曲忽歸去，屋後松風愈好聲。共惟越州太守雲江守慶居士，義井汲古，心地研精。厥勇也，蚤學六韜，如張子房從黃石，厥節也，不仕二主。似司馬氏於淵明，紅塵劍三尺，白髮雪千莖。此郎就子求號，吾師爲他安名。再修龍潭舊房，萬年作計。假示鶴林滅度，三日先庚，平生稊頑手段，通身金剛眼睛。在聖同聖，在凡同凡。青山無限好，逢佛殺佛，逢祖殺祖。黃河徹底清，空空空畢竟空。何物恁麼死，錯錯錯都來錯。何物恁麼生，喝更有向上那一著，試聽取山僧施呈。拋火把須彌倒，誇鐵馬，陽翻丙丁童行。

神野氏雙月慧晃居士下火 預請

不生不滅涅槃門，門外青山月一痕。舜若多神驚吐舌，火蛇吞卻鐵崑崙。夫惟神野氏雙月慧晃居士，承南嶽祖，稱東海孫。道家蓬萊，縮弱水三萬里。神野種草，詠出雲八重垣。靠倒維摩居士，罵呵大覺世尊，放行則虎穴魔宮。一喝喝散，把住則鶴樓鷓洲。一踢踢翻，淨裸裸赤洒洒。離窠白絕籠樊，更有向上宗乘事。吾不惜齒牙餘論，拋火把開慶，杜鵑啼破落花村。錯錯。

宗靖居士百年後下火

火把打圓相，第一達磨陶靖節。不修蓮社不參禪，人人本有圓成佛。秋菊春蘭易地然，夫惟宗靖居士，騎射兩得，文武兼全。竺土黃面老，說一卷兵書，逆籌決勝。林際白拈賊，施三立戈甲。執銳被堅，意氣奔雷霆。眼睛輝坤乾，世緣淺兮道根深。黃太史稱五祖，天魔降兮波旬伏。韓京兆參大顛，超菩薩第十地。入居士不二門，有餘涅槃，無餘涅槃。作活計於鬼窟，半字知識。滿字知識，試妙手於龍泉。鐵圍圖百雜碎，華甲子萬斯年。別有轉身處，山僧欲重宣。拋火把倒鞭鐵馬，春風裏抹過須彌最上巔。喝一喝。

玉麟宗仁居士下火 預請

能仁元是大醫王，壽域萬年開。八荒試看五千貝，多葉願神換骨一靈方。夫惟玉麟宗仁居士，烏豆啄吻，狼毒肝腸。佐使君臣，請本草經於佛日。焙乾生熟，學炮炙論於灌堂。點四味平胃散，名一念相應湯。能除邪氣，忽治顛狂。面染瘴煙，嘴木瓜之呆風子。力拯民社，欺人蔘之司馬光。或時用八火，而煉般若波羅蜜。或時除三熱，而抹知見解脫香。瀉資補虛，味和脾胃。沈空滯寂，病入膏肓。幻生幻滅，無病著艾。持齋持律，禁物絕糧。能殺能活，任吾愚老。患叟患盲，還他謝郎。菩提果熟，安心藥良。雖然與麼，至聖命脈。不屬陰陽，仁居士仁居士。冬來事如何商量，拋火把。疎山作略將軍令，依舊京師出大黃。



心源宗徹居士下火 預請

西江吸盡徹心源，眾倒龐蘊居士門。到得歸來底時節，杜鵑啼過落花村。夫惟心源宗徹居士，武門闍闔，法社藩垣。此郎託迹於蓬島，其先賜姓於管原。振丈夫威雄，則溟鵬展九萬里名翼。參大善知識，則野狐離五百生精魂。碧岩集昔燒卻，黃石書今尙存。有餘涅槃無餘涅槃，水枯雪盡棒下正覺。喝下正覺，電卷雷奔。不求諸聖解脫，豈借閻王平反。淨裸裸赤洒洒，明杲杲昏昏。更有真般若，無說又無言。會麼，拋炬入得火光三昧，看黃金鑄出鐵崑崙。喝一喝。

前豐州太守和智氏太成宗功居士下火 預請

此郎今代一英雄，未上麒麟先識功。無所從來無所去，夕陽長在我西紅。夫惟前豐州太守，具棟梁質，抱葵藿忠，威振十方。譬如漢隆準公起於沛邑，名喧四海。恰似宋執拗夫出于元豐，忽遇家國興盛，永誓山河始終。或時截生死流，從臨濟三尺劍。或時築威音梁，打石鞏一張弓。箭鋒相拄，毒氣以攻。白的的，今清寥寥。不隔娑婆華藏，淨裸裸，今赤洒洒。莫管地獄天宮，千佛一數。廣額兒拋刀子，萬法不侶。龐居士叫心空，有末後句，更爲君通。拋火把，泥牛吼月，木馬嘶風。喝一喝。

江州建部左典厥鐵船宗堅居士下火 預請

法身堅固鐵團圓，觸著吾錐鎚下看。百雜碎，今百雜碎。涼風吹，月上欄干。共惟某名，折衝筆陣。拜將詩壇，騰茂飛英。置朝廷上，則三槐九棘。深根固蒂，在山林中，則十蕙一蘭。將謂江州白司馬，由來宛陵梅都官。天女散花，惟新。毘耶老居士，假示病。宗師落草，且爾。瑞岩主人，公何受請。

或時能武能文，雲門紅旗風偃。或時殺佛殺祖，林際金剛霜寒。踢翻泥洹一路，莫涉生死兩端。雖然與麼，更有頤神妙術。爲君報平安去，拋火把，倒把一枝笛，吹起萬年歡。喝一喝。

寂知宗空居士預請百年後乘炬語

向太虛空駕鐵船，須彌頂上浪滔天。大唐載得歸來看，紅海棠開秋日西。夫惟寂知宗空居士，才華銷俗，釣築收賢。法法圓融，裴相國傳心於黃檗。塵塵解脫，陶醉漢皺眉於白蓮。將謂先天地有物，元來離淨土無禪。或時峭峻孤危，禪板蒲團用不得。或時遊戲三昧，舞衫歌扇舊因緣。雖羨回也稱儒門知識，卻笑軾乎作人間謫仙。楓葉落兮，荻花乾。萬機休則全歸，方寸松風吹。今蘿月照，一念起則早隔大千。拗折涅槃四柱，莫涉生死兩邊。錯錯都是錯，立立須呵立。雖然與麼，更有宗乘向上事。試聽山僧敷宣，拋火把，雨中看杲日，火裏酌清泉。

義翁宗高居士下火 預請

日照高山逼界明，一人無復暗中行。網珠垂範雜華藏，閉眼看來乾闥城。夫惟義翁宗高居士，韜光籠彩，覃思研精。邪正難分，天魔外道了八萬劫。因果不昧，野狐精魅脫五百生。撞著崑崙鼻孔，突出金剛眼睛。兜率權設三關，擊開華嶽連天色。瞿曇不說一字，放出黃河徹底清。轉身自在，受用縱橫。欲識端的，莫涉多程。雖然與麼，更有末後句。聽山僧施呈，拋火把，滄浪之水濁兮，可以濯吾足。滄浪之水清兮，可以濯吾纓。喝一喝。

天真宗守信男預請乘炬語

真如自性守天真，元是金剛不壞身。一夢百年三萬日，花開桃李火中春。夫惟天真宗守信男，



預懼苦果，逆修良因，起居動靜，六時念佛，禪詞蒸嘗，四序養神，唐朝白文殊，參烏窠師，蒲牢夜吼，宋家黃達磨，見晦堂老，桂花露勻，證涅槃，不住涅槃，清風拂殺明月，示生死不染，生死溪水，截斷紅塵，不通凡聖，把定要津，木人高奏長壽曲，燈籠開口笑，問問，雖然恁麼，更有向上宗乘，試聽取山僧指陳，擲火把，色色只仍舊，青山雨後新，喝一喝。

寶隣宗善信男預請百年後乘炬語

善惡都來莫思量，阿爺面目露堂堂，百年壽盡後消息，火裏蓮華遍界香，夫惟某名，維時丁大，法之季運，其家保積善之餘慶，揖釋迦於東土，念彌陀於西方，打破涅槃城，直觸梅陽竹篋子，截斷生死縛，倒提林際金剛王，淨裸裸赤洒洒，離窠白絕承當，雖然恁麼，若要向上轉去，試聽真正舉揚，擲火把，三足金烏飛入海，曉天依舊照扶桑，喝一喝。

春岳宗英信男下火 預請

蝸牛角上一英雄，心地收來汗馬功，吹作紅爐燭中雪，刀山劍樹落花風，夫惟某名，才兼文武，節克始終，豎五位槍旗，其先昔傳洞山顯訣，用三玄戈甲，此老今與臨濟正宗，架龜毛箭，張鬼角弓，或時殺佛殺祖，寶劍光寒，塵塵解脫，或時鍊凡鍊聖，金鎚影動，物物圓融，出涅槃窠窟，脫生死羅籠，本來圓成，麻矢直透，當陽直指，李花白桃花紅，恁麼不恁麼，一口吸盡西江水，不恁麼恁麼，一棒打破太虛空，雖然如是，保祐後昆底一句，試問取丙丁童子去，拋火把，面陳王霸龍庭上，手拔乾坤虎口中。

秦岳宗韓信男百年後乘炬語

一韓摧佛佛何摧，端的捨邪歸正來，劫火洞然毫末盡，泰山依舊碧崔嵬，夫惟秦岳宗韓信男，繼箕裘業，負棟梁材，截生死流，風塵三尺劍，學文武道，丹心一寸灰，法爾如然，鶴脰長鳴，脰短無常迅速，牛頭沒馬頭回，掀翻阿鼻獄，陽倒涅槃臺，赤洒洒離窠白，清寥寥絕纖埃，雖然與麼，保祐後昆底活句，元亨利貞德大哉，拋火把，倒把少林無孔笛，和風吹落一枝梅，咄一咄。

春澤宗光禪定門下火 預請

靈臺不昧發靈光，映徹乾坤絕覆藏，喚醒閻浮百年夢，曉鐘月落一聲霜，夫惟春澤宗光禪定門，備陽華族，藤家棟梁，全假全真，晦堂接黃太史，而示月中桂子，如夢如幻，南泉召陸大夫，而指庭前花王，穿鼻換眼，倒腹傾腸，無明即明，饒湯爐炭，真如地諸相非相，劍樹刀山古道場，赤洒洒全沒窠白，淨裸裸何守封疆，燈籠吞盡露柱，泥人撈倒金剛，雖然恁麼，向上宗乘事，只要重商量，拋火把，安禪未必須山水，滅卻身心火自涼。

義江光忠信男下火 預請

白髮丹心賦獻忠，金湯法社立全功，呵呵拍手好歸去，失腳踏翻都率宮，夫惟義江光忠信男，在家菩薩，亂世英雄，苦樂逆順，道在其中，生死涅槃，芭蕉葉上無愁雨，擒縱與奪，電光影中斬春風，不入佛界魔界，頓了人空法空，淨裸裸赤洒洒，離窠白絕羅籠，此是光忠禪定門行履處，猶有梅花路未通，拋火把，門外金剛白汗出，丙丁童子面皮紅，喝一喝。

但州太守大用宗碩信男下火 預請

百年一枕黑甜餘，索索涼風秋入墟，大用現前無軌則，龍泉射斗犯清虛，其惟但州太守大用



宗頌信男世緣雖淺俗氣未除是故香至季子求大乘器於赤縣東暗失隻履竺乾猛將構涅  
槃城於金河側徒說兵書依備用松源黑豆法彷彿畫欄川雪芭蕉無滅無生證得火光三昧  
即空即假會盡物我一如怎麼轉去莫敢踟躇拋火把吞卻乾坤鹹眼魚喝一喝

覺林宗圓信男下火 預請

光吞萬象月孤圓心外求心錯果然生死涅槃無別路等閒踢倒率陀天夫惟覺林宗圓信男  
時節因緣莫待柏樹成佛當陽直指頻掃落葉單傳正覺喝下寂滅現前說甚七顛八倒論甚  
五蓋十纏雖然怎麼保祐後昆底活句試聽火把子敷宣拋火把舉頭殘照在元是住居西喝  
一喝

續芳宗繼信男下火 預請

武門閭閻繼箕裘亂世英雄獨拔尤生死涅槃是常事一刀兩段截凡流夫惟續芳宗繼信男  
調羹補袞跨窻衝樓真如隨緣二乘聲聞沈空寂邪見即正五逆調達結冤讎燈籠開口露柱  
點頭更有末後句汝聽取我焉度拋火把碧眼黃頭會不得野梅風定暗香浮咄

荆叟宗玉信男下火 預請

玉本圓成絕縹緲求之轉遠不求臻形山信手劈開了萬里無雲月一輪夫惟荆叟宗玉信男  
承村上帝稱源朝臣法社金湯跨臨濟大龍拗折頭角武門梁棟觸洋嶼黑魃脫卻凡鱗殺佛  
殺祖全俗全真了了時干甚溪聲廣長舌妙妙妙處莫認山色清淨身畢竟從門入者不是  
家珍故我如何說無物堪比倫拋火把錯春草池塘夢昨花今日塵錯錯

希道宗弘信男下火 預請

截斷生死寶劍光寒閃電擊石不移多端夫惟某名文韜武略義膽忠肝輔佐人主立孤為難  
京師復舊置世泰安魯直穿鼻認著蟾桂王老說夢指示牡丹露電泡影作如是觀預修冥福  
權報應殫是故五逆遠多嘔出地獄千佛廣額直證涅槃鬼畜人天同歸一致迷悟凡聖全無  
兩般須彌崩倒大海枯乾希道希道一期願後如何相看秋風索索葉落歸根開慶木人把笛  
奏萬年歡咄一咄

道本禪門下火 預請

人人本有圓成佛輝古騰今放大光觸惡鉗鎚出爐鑄黃金色上更添黃道本禪門耳邊看麼  
山色清淨眼處聽麼溪聲廣長打破虛空春色芭蕉拄杖子截斷生死提林際金剛王正與麼時  
節說甚麼無明煩惱論甚麼地獄天堂赤洒洒無窠臼淨裸裸絕承當別有宗乘向上事來吾  
與汝商量拋火把烏啼人不見花落木猶香喝一喝

石窓秀堅大姊預請乘炬

堅固法身無變遷鐵鋒頭上定坤乾打開末後牢關子月落金雞一拍天夫惟石窓秀堅大姊  
欺河陽新婦子嘴濟北老風顛金沙灘頭約馬郎上菩提樹上無明樹靈山會上接龍女說當  
體蓮說譬喻蓮休休百年壽盡後妙妙妙一漏未發先或時放去收來泥牛耕破瑠璃地或  
時出生入死玉兔挨開碧落門須彌鬚筋斗虛空駕鐵船更有真歸處聽山僧敷宣拋火把舉  
頭殘照在本是住居西咄一咄



開溪宗音大姊下火 預請

此方真教在音聞，傾倒心腸說與君。諸佛出身那一路，青青脩竹送南薰。夫惟開溪宗音大姊，始終一節，末後慇懃，尼摠持得吾肉，仙陀婆出其群。隨緣真如，不變真如，有水皆含月，觀照般若，實相般若，無山不帶雲。拗折拄杖七八尺，脫卻鐵枷三百斤。正與麼時，還覺寒毛卓豎，麼紅爐裏雪紛紛。

江甫秀清大姊下火 預請

法身清淨本然體，大地山河活眼睛。金鴨香消人不見，頻呼小玉是何聲。夫惟江甫秀清大姊，受老瞿曇遺教，慕尼摠持芳名，恁麼不恁麼，分成六和合，不恁麼恁麼，本是一精明，生也佛界，魔宮紅爐雪，死也地獄天堂，乾闥城，左轉右轉，逆行順行，看看，毘盧頂上月，白風清，咄一咄。

天慶元祐大姊預請百年後乘炬語

百年幾許保天祐，生死涅槃春夢中。打破虛空無一事，鷓鴣啼亂落花風。夫惟天慶元祐大姊，胸襟映徹，戒珠玲瓏，少林門下，尼摠持意氣相奪，法華會上，大愛道記，前全同，八識七情，風來波浪起，三從五障，日出乾坤融，真如不變，豈有始終，正與麼時，無明煩惱非他物，正法眼藏在汝躬，赤洒洒沒窠臼，淨裸裸絕羅籠，此是元祐大姊，平常受用底，即今鐵鋒頭上，鬪筋斗，火焰裏現神通，看看，拋火把，妙處欲言言不及，海棠雨過夕陽紅，喝一喝。

惟清了圭大姊下火 預請

白圭無玷本來圓，祕在形山一百年。拈得分明與人看，華鯨吼破夕陽天。夫惟惟清了圭大姊，

內持晚節，外謝塵緣，穿玉線金針，笑口種氏說，鴛鴦教，把藥爐經卷，瞞秦國太參，蚌蛤禪，丈夫意氣，捏聚大千，幻化空身，卽法身花，猶風雨後，無明實性，卽佛性，松只雪霜先，正與麼時，認什麼泥洹一路，涉甚麼生死兩邊，舉火把會麼，龍女變成男子處，枝頭露重火中蓮，喝一喝。

古梅妙林大姊下火 預請

踏翻地獄與天宮，死路通時活路通。此是少林真一曲，三千刹界落梅風。夫惟古梅妙林大姊，戒乘俱急，心境混融，菩提坊裏病維摩，□□□金沙灘頭鎖子骨，誦經玲瓏，三賢十聖如電拂，四大五蘊本來空，空非空色非色，始無始終無終，上透霄漢，下絕已躬，正與麼時，說什麼冥官鬼主，論什麼黃頭碧眼，雖然妙林大姊，畢竟如何，研窮去，拋却劫火洞然，毫末盡，青山依舊白雲中。

蘭室理秀大姊下火 預請

蘭有秀兮菊有芳，法身邊事露堂堂。夜來吹送涅槃雨，不滅心頭火自涼。夫惟蘭室理秀大姊，能學緇禮，掃除彩繡，點出三心笑，臭婆子接德，嬌消得五障瞞，尼長老住戒香，平生作略意氣難當，是故寂然不動，如春在花，了了無分曉，真如隨緣，似月印水，玄玄沒商量，透關萬重，或擒縱或與奪，還鄉一曲非角徵，非宮商，正好著力，打破黑漆桶，直得臨行拋擲，金剛王，這箇理秀大姊，平生閒伎倆，舉火把，別看勝熱婆羅門，放大光，咄，紅日照扶桑。

心田永安大姊下火 預請

眼界平時心地安，三更紅日黑漫漫。崑崙倒著娘生袴，火裏梅花吹雪寒。夫惟心田永安大姊，



越裳翡翠摩利梅檀五障本空脫卻項上枷鎖百年如夢指示庭前牡丹寄迹於洛渾假道於邯鄲加之或時在龍女宮中聽是文殊說法聽非文殊說法或時入蠅螟國裏與善知識相看與惡知識相看易易轉凡成聖易難難轉聖成凡難生也鐵壁迸開雲片片死也黑山崐出月團團永安大姊驀直去太無端若要向上事應作如是觀擲火把一把柳絲收不得和風搭在玉欄干

陽甫玄春大姊下火 預請

不待威音空劫春無根樹子著花新昆嵐昨夜忽吹倒大地茫茫愁殺人夫惟陽甫玄春大姊名珪無類植鏡絕塵生也蝴蝶夢中家萬里死也翡翠簾前月一輪不通凡聖把定要津玄春大姊正與麼時向何處著渾身去拋火把須彌跣跳鐵鋒上丙丁童子笑問喝一喝

穆庵芳春禪定尼下火 預請

喚起一場春夢婆落花啼鳥百年過無端吹滅心頭火月白風清安樂窩夫惟穆庵芳春禪定尼腳踏實地心澄劫波開甘露門採菽拯青提女設楞嚴會甘蔗度摩登伽不施寸刃殺盡魔佛不隔毫端忘了自他說甚麼生死涅槃囉珠光燦爛論什麼無明煩惱蟾桂影婆娑更有向上那一路試進得一步麼拋火把石女舞成長壽曲木人唱起太平歌喝一喝

雪溪宗春信女下火 預請

風驚雨過百年強心火滅時心自涼啼鳥落花人不見一場春夢覺猶香夫惟雪溪宗春信女錦心繡口鐵肝石腸如水有源賜姓稱清和之苗裔似禪歸海擇師得鄧林之棟梁黃河警帶

峴江濫觴或時截生死流赤洒洒沒窠臼或時超如來地淨裸裸絕承當到這裏說甚麼無明煩惱論什麼地獄天堂不通線路把定封疆雖然恁麼保祐後昆底一句試聽山僧舉揚去拋火把自家頻掃門前雪莫管他人屋上霜喝一喝

全室宗盛信女下火 預請

百年三萬六千霜盛者必衰人不常漏盡鐘鳴底時節泥犁兜率黑甜鄉夫惟全室宗盛信女懷胎兔子墜乳鵝王具截流機秦國夫人參洋嶼起救世願鎖骨菩薩嫁馬郎見性不隔羅縠試我莫以革囊煩惱即菩提水自竹邊流出冷婆婆即華藏風從花裏過來香向上宗乘事直下承當去喝一喝拋火把安禪未必須山水滅卻心頭火自涼

壽岳宗永信女下火 預請

王母蟠桃祝永年神仙秘訣錯流傳崑崙核子果何物今日看來火裏蓮夫惟壽岳宗永信女奕葉競秀貞節彌堅靈山會上龍女號華鮮如來捨邪歸正金沙灘頭馬婦化鎖骨菩薩赴感隨緣入真如界不住真如花猶風雨後在生死中不染生死松只雪霜先虛空裂落地須彌跳上天雖然恁麼與後昆底一句試聽山僧敷宣拋火把臨濟命根元不斷一條紅線手中牽喝一喝

梅屋妙薰信女下火 預請

諸佛出身活路開薰風昨夜自南來無端吹作紅爐雪六月炎天一朶梅夫惟梅屋妙薰信女掃除五障消得三災說法度生應身如來鶴林唱滅拔苦與樂積行菩薩龍門颺顯見性猶隔



羅穀遺骨強撥冷灰，了了時乾坤窄，星辰黑，玄玄處處虛空消，鐵山摧妙薰妙薰，是甚麼時節，拋火把，石女舞成長壽曲，燈籠露柱笑哈哈，喝一喝。

春榮壽椿信女下火 預請

莊椿閱世八千歲，胡蝶園中一刹那，無說無聞真般若，若燈籠開口念摩訶，夫惟春榮壽椿信女，拜拜少門受草袈裟，盛者必衰，雖示鶴樹滅於甘蔗氏，熾然常說不待龍華會於迦葉波，物物全真無數飛花，圓通境，塵塵解脫，兩三脩竹安樂窩，從前閒絡索且置，向上宗乘如何，拋火把，白鷗不受人間暑，江上清風吹雨過，喝一喝。

松溪宗貞信女下火 預請

貞節彌堅克始終，真如佛性絕如同，丙丁童子呵呵笑，三十三天活火紅，夫惟松溪宗貞信女，本然清淨內外玲瓏，諸佛出興，水浮天，天浮水，世尊入滅，風拂月，月拂風，生死去來，全無住處，苦樂逆順，道在其中，正與麼時節，說甚麼，千生萬劫，論什麼，五障三從，轉身自在，八達七通，雖然恁麼，欲知向上事，須參教外宗，拋火把，看看一棒打破太虛空，喝一喝。

景雲壽慶信女百年後乘炬語

地獄天堂一夢中，掃除五障絕三從，凡鱗脫盡底時節，其面華鮮娑竭龍，夫以景雲壽慶信女，觀世間相歸教外宗，隨緣真如，不變真如，煙鎖翠竹，觀照般若，實相般若，風吹幽松，了了時是何物，玄玄處處莫留蹤，雖然恁麼，聲前一句君聽取，拋火把，青山不改舊時容，咄一咄。

宗光信女下火 預請

萬機休不住無心，一段靈光亘古今，向上錯錯纔下手，都盧大地變黃金，宗光宗光，還消得萬兩黃金，麼煩惱，即著提截蜂房，作獅子窟，娑婆即華藏，變荆棘成梅檀林，木人暗穿玉線，石女密度金針，拋火把，要聽無生那一曲，三千里外絕知音。

芳室宗繼信女下火 預請

截斷手中絲線長，繡成端的兩鴛鴦，涅槃生死春宵夢，枕破斜紅覺尚香，夫惟芳室宗繼信女，露芽蘭秀，晚節菊芳，本是一精明，華鮮如來現，龍女分作六和合，鎖骨菩薩嫁馬郎，天無蓋地無載，昔不生今不亡，淨裸裸出窠臼，赤洒洒絕覆藏，燈籠跳入露柱，泥人拶倒金剛，要識向上宗乘事麼，打破鏡來，與爾商量，拋火把，少林煨桂久昌昌，喝一喝。

桂雲昌慶信女預請百年後乘炬語

火把打圓相，獻珠龍女太顛預，不信一鎚鎚碎看，鐵壁迸開雲片片，黑山輟出月團團，昌慶信女，還會麼，當陽直指，不涉多端，昔甘蔗先生出西方，而布法華於一由旬，袈裟下藏毒藥，後香至大士，入東海，而泛慈航於十萬里，平地上起波瀾，說甚麼三車火宅，認什麼隻履空棺，三世心不可得，將心來為汝安，雖然恁麼，百年壽盡後，應作如是觀，知見立知，即無明本，知見無見，斯即涅槃，拋火把，喝一喝。

花溪宗春信女預請乘炬語

驚起一場春夢婆，百年光景鳥飛過，虛空昨夜叫希有，火裏花開優鉢羅，夫惟花溪宗春信女，蕭爾樵淡，溫然氣和，三萬貌牀，維摩臥病於毘耶室，五千貝葉，瞿曇示滅於尼連河，作衆生母。



降煩惱魔本來面目露堂堂梅瘦占春少金剛眼時鳥律律庭寬得月多當陽直指端的會麼  
拋火把石女舞成長壽曲木人唱起太平歌喝一喝

瑞甫清珍信女下火 預請

從門入者不家珍龍女寶珠磨不磷直下出頭天外看浮雲散處月光新清珍清珍是甚麼是  
甚麼溪聲廣長舌山色清淨身不立迷悟把定要津正與麼時三世諸佛向火焰裏轉大法輪  
雖然如是更有歸處試聽山僧指陳咄咄咄白灰撥出玉麒麟

梅憲理清信女下火 預請

直得純清絕點時機輪轉處電光遲丙丁童子叫希有火裏優曇和雪吹夫惟梅憲理清信女  
愛物無黨位民有慈法華會中倒跨五臺獅子無垢世界忽化八歲龍兒直入涅槃一路何涉  
生死兩歧公案現成荷葉團團似鏡當陽直指菱角尖尖如錐淨裸裸地不挂寸絲雖然  
恁麼向上還有事山僧說向誰拋火把欲問花來處東君亦不知咄一咄

心源宗清信女下火 預請

放出心源徹底清清寥寥地太分明一條界破轉身路直蹈毘盧頂上行夫惟心源宗清信女  
山川鍾秀閩里向榮露柱懷胎鹿足感般若之說明珠在掌龍女受華鮮之名直證佛果豈墮  
凡情弄花香滿衣遊戲神通解脫國土步岳風吹而剎那滅卻阿鼻火坑正與麼時說甚三從  
五障論甚萬劫千生雖然恁麼末後那一句如何施呈去拋火把頻呼小玉元無事只要檀郎  
認得麼

天章宗清信女下火 預請

火把打圓相直得浮雲絕點時一輪明月自清奇不離當處南方界龍女寶珠還我來夫惟天  
章宗清信女掃除五障化育二儀隨緣真如不變真如荷盡已無擎雨蓋觀照般若實相般若  
菊殘猶有傲霜枝到這裏說甚菩提煩惱論甚兜率泥犁雖然恁地要聞向上那一句麼拋火  
把針眼魚吞卻須彌咄一咄

和仲妙春信女下火 預請

生死涅槃春夢婆天堂地獄亦南柯當陽直指君聽取風攪楓林一雨過夫惟和仲妙春信女  
燒香禮佛挂鏡降魔苦海慈航濡首化度五障龍女昏衢慧炬慶喜逢著四果登伽單傳霜寒  
流蓬落葉大法秋晚折葦枯荷誰家不春塵塵隨身兜率有水含月物物唯心彌陀無佛處不  
得住玄玄窟須呵從前開絡索且措向上宗乘事如何拋火把驪珠光燦爛蟾桂影婆娑喝  
一喝

大有宗豐信女下火 預請

從二神開豐葦原至今天地是同根泥犁兜率春閨夢醒後簾前月一痕夫惟大有宗豐信女  
精神雪潔笑語春溫畫混沌眉拈嶺岳生苔藓滅正法眼鼓密庵破沙盆暗穿祖師鼻孔明徹  
諸佛心源無餘涅槃泥牛耕破瑠璃地不昧因果玉兔挨開碧落門百丈山一拳拳倒四大海  
一陽陽翻那箇真底倩女離魂拋火把紅爐一點雪鑄出鐵崑崙

保天慶祐信女預請下火語



火把打圓相，坤德至哉，天祐之，始終一節，不曾移臨，行唱起還鄉曲，莫向風前歌竹枝，夫惟保天慶祐信女，掃除五障，化育二儀，其人如金如玉，短褐不磷，不緇生也，春風桃李花開夜，死也，秋雨梧桐葉落時，淨裸裸赤洒洒，離生死絕去來，恁麼不恁麼，毛吞巨海，不恁麼恁麼，芥納須彌，蕊直轉去，莫涉兩岐，雖然如是，山僧向痛處重下，鐵錘，擲火把，力因希，咄咄，紅爐放出鐵烏龜。

海雲宗龍信女百年後乘炬語

火把打圓相，出生死海，脫龍鱗，元是如如淨法身，一陣清風掃明月，從門入者，不家珍，夫惟海雲宗龍信女，胸中不芥眼裏無塵，其德也如金如玉，其行也不緇不磷，四大本空，紅英掃地風驚曉，五蘊非有，綠葉成陰，雨洗春鉞，眼魚吞石佛，丙丁童笑，閻閻更有向上宗乘事，試聽休上座指陳，拋火把，千峯萬岳雲收後，翡翠簾前月一輪，喝一喝。

德陰妙性信女下火 預請

成佛還他見性人，無陰陽地絕纖塵，夜來月入半江去，龍女寶珠磨不磷，夫惟德陰妙性信女，蕊蕊草種桃花色，民慕大慧禪，際臨濟中興之日，會永明旨，值彌勒下生之辰，允矣，則天皇后化迹記否，泰國夫人舊因彩鳳舞，丹霄打破涅槃古鏡，清風拂明月，脫卻生死苦輪，轉凡作聖，弄假像真，淨裸裸絕承當，針鋒頭翹足，火焰裏藏身，喝一喝，雖然恁麼，覆蔭後昆底活句，試聽休上座指陳，拋火把，揭諦波羅僧揭諦，故家喬木又逢春。

覺林妙等信女下火 預請

平等一如如法門，百千妙德接心源，須彌跣跳入鉞眼，八角磨盤空裏奔，夫惟覺林妙等信女，移風換俗，抱子弄孫，其芳隣也，左以花右以竹，其真節也，兄有梅弟有馨，理智圓融，說甚麼始覺本覺，與奪自在，管什麼上根下根，端的雙收雙放，畢竟非亡非存，和黃鶴樓一拳拳倒，把鴛鴦湖一踢踢翻，此是妙等信女，真履實踐處，百年壽盡後消息，聽取火把子重論，拋火把，拾得紅爐一點雪，黃金鑄出鐵崑崙，喝一喝。

花屋周林信女下火 預請

鶴林示滅二千年，山色如灰花似烟，元是圓成那一佛，木人石女叫蒼天，夫惟花屋周林信女，觀有情世間事，了無生一大緣，七賢女問死屍於尸陀林，有時盡矣，八歲龍唱正覺於無垢界，易地皆然，虛空裏翻筋斗，須彌頂駕鐵船，洛陽是兜率，風吹南岸柳，娑婆即華藏，雨打北池蓮，峭巍巍孤迥迥，離窠臼，出蓋纏，上件底且措，達磨爲甚，不會禪，喝一喝。

月溪妙秋信女下火 預請

秋風昨夜動乾坤，葉落樹凋歸本根，和卻心空那一火，黃金鑄出鐵崑崙，夫惟月溪妙秋信女，美玉無價，赤繩定婚，摩耶爲千佛之母，則天稱三會之尊，生死涅槃，翡翠蹈翻，荷葉雨，真如實相，玉兔挨開碧落門，拋火把，喝一喝。

宗真信女下火 預請

試看孃生面目真，窻中眉黛遠山新，無端打破曹溪鏡，放出天邊月一輪，夫惟宗真信女，唱南無佛，效西子，顰隨緣真如，不變真如，翠竹風冷，觀照般若，實相般若，黃花露勻，如金如玉，不緇



不磷，雖然恁麼，從門入者不是，那箇是自家珍。拋火把，鐵鋒頭翹足，火焰裏藏身，喝一喝。

宗龜信女下火 預請

紅爐放出鐵烏龜，皮裹骨耶骨裹皮，不脣當時大隋老，草屨生截上天來。夫惟宗龜信女，鐵鋒翹足，莖帶圓眉，徹自性源，則攪黃河成酥酪，滅心頭火，則變錢湯作寶池。意氣堂堂，一踢踢翻四大海眼，光爛爛，一拳拳倒五須彌。到這裏，無菩提可證，無生死可離。石火不及，閃電猶遲，向上轉去，莫涉多岐，咄一咄，拋火把，欲問花來處，東君亦不知。

春芳妙榮信女下火 預請

朝榮暮辱共成空，今日顏非昨日紅。生死涅槃一場夢，天堂地獄大槐宮。夫惟春芳妙榮信女，無偏無黨，克始克終，接總持尼，達磨分張皮髓，逢登伽女，慶喜撫摩，姪躬真如佛性，顛預備伺，縱放般若光，蚌蛤含天上明月，雖得定慧力，蚊虻弄空裏，猛風淨裸，赤洒洒，酒不受，諸方羅籠，掃除三從五障，直得八達七通，透金剛圈，吞栗棘蓬，雖然如是，要識轉身處，問取丙丁童，拋火把，喝一喝。

妙蓮信女百年後下火語

夢幻空花一百年，風驚雨過剎那遷。回光返照自看取，露滴清香火裏蓮。夫惟妙蓮信女，消滅五障，脫離十纏，將謂金沙灘頭鎖骨，元來無垢世界華鮮，鐵鋒頭上五須彌，石女起作舞，地獄門前鬼脫卵，扇子跳上天，益直轉去，莫涉言詮，會麼，拋火把，向上一路，千聖不傳，咄咄。

宗祐信女下火 預請

半熟黃梁夢蝶牀，回頭三萬六千場。明明說與西來意，紅槿花前欲夕陽。夫以宗祐信女，精神雪潔，貞節菊芳，五障本空，文殊代佛，度龍女，兩願成就，觀音作婦，約馬郎，蕩滌罪垢，經卷流水，截斷生死，慧劍秋霜，赤洒洒沒窠臼，淨裸裸絕承當，雖然如是，向上還有事，我爲汝舉揚，擲火把，安禪未，必須山水，滅卻心頭火，自涼，喝一喝。

心月妙性信女預修三十三白忌冥福之次，更請百年後乘炬語

佛性元來無變遷，不論時節與因緣。請君離卻指頭看，月在青天夜夜圓。夫惟心月妙性信女，劫波雖濁，晚節彌堅，翠袖佳人，竹動疎壁，畫眉京兆，花滿細川，夫與留美名於身後，不如修冥福於生前，赤豆兩車，唱無量壽，百萬玉函，七軸轉妙法華，一千，慎終追遠，三十三年，無明即明，對普廣王，說鴛鴦教，諸相非相，接秦國太露，蚌蛤禪，出涅槃窠窟，脫生死蓋纏，燈籠入露柱，虛空駕鐵船，雖然恁麼，更有向上宗乘事，試聽山僧敷宣，拋火把，雨中看，某日，火裏酌清泉。

西夕明慶信女預請百年後下火語

元是餘慶積善家，光明照徹盡河沙。試看大用現前處，火裏優曇一朵花。夫惟西夕明慶信女，神潔冰雪，語帶煙霞，栽松禍根，五祖之兒，託周氏，甘蔗惡孽，千佛之母，稱摩耶，心生種種法生，滾開洞房，枕上化蝶，心滅種種法滅，地獄天堂，杯中假蛇，頓出三界火宅，直駕一乘大車，雖江月照，被曉風遮，赤洒洒沒拘束，淨裸裸絕誦詛，要知末後句，聽金口吧吧，拋火把，會麼，夕陽長在我西斜，咄一咄。

希西唯心信女下火 預請



即心即佛一精明吹滅阿毘大火坑若認檀郎千萬錯頻呼小玉杜鵑聲夫惟希西唯心信女出群拔萃騰茂飛英龍女號華鮮如來改頭換面馬婦化鎖骨菩薩接物利生轉身自在遊戲縱橫生死涅槃落花三片五片真如實相脩竹一莖兩莖塵塵解脫箇箇圓成露堂堂月白淨裸裸風清雖然恁麼向上卻有事端的爲君呈拋火把本一心常樂我淨始一氣元亨利貞喝一喝

渭川宗清信女下火 預請

昔日種氏四十九年三說鹿野資始鶴林示終爾來乘地藏願輪則外現聲聞內秘菩薩揮彌陀利劍則上無攀仰下絕已躬出無明窠窟破生死羅籠木人太平歌長樂鐘響花外石女長壽曲關山笛揚月中塵塵解脫法法圓融雖然如是向上還有事一偶爲君通去火把打圓清容獨秀內家叢粉黛三千爭淡濃無去無來無所住夕陽長在我西紅拋火把喝一喝

真如妙性信女下火 預請

真如妙性不曾移昨夜虛空落地時無所從來無所去雌蜺吞卻五須彌夫惟真如妙性信女火中木母泥裏摩尼百媚千嬌金沙灘頭馬婦現鎖骨菩薩三從五障靈山會上龍女稱華鮮如來甚希有甚希有也太奇也太奇淨裸裸絕承當說甚饒湯爐炭赤洒洒沒窠臼論甚兜率泥犁喝一喝拋火把杜鵑啼在落花枝

古梅妙意信女下火 預請

祖師無意不西來吹裂虛空鐵笛哀休道少林消息斷送行唯有一枝梅夫惟古梅妙意信女

正因信淨世相心灰瞿曇三界之師燈籠合掌摩耶千佛之母露柱懷胎教外別傳葵花無眼隨日轉喝下正覺芭蕉無耳聽雷開希有希有奇哉奇哉曹家女現寶鏡臺看看本來無一物何處惹塵埃拋火把咄一咄

春芳妙榮信女下火 預請

百年富貴一場榮風攪落花春夢驚歸便可歸兜率路杜鵑枝上月三更夫惟春芳妙榮信女錦心繡口玉振金聲堅固法身磨而不磷涅而不緇真如自性涸之不濁澄之不清倩女離魂那箇真底龐婆團圓共說無生瀉瑜伽法水滅阿鼻火坑要知教外宗旨山僧爲汝施呈去拋火把誰家別館池塘裏一對鴛鴦畫不成喝一喝

維馨宗范信女下火 預請

無常迅速太無端假示雙林般涅槃此是孃生本來面月移梅影上欄干夫惟維馨宗范信女珠簾玉案禪板蒲團效少林響則西施淡粧除非興化持首楞咒則摩登愛纏逼殺阿難手携城巾雙履腳倒門前刹竿加之初頓華嚴後分華嚴南詢善財成正覺實相般若親照般若東請常啼賣心肝真箇若未穩在將心來與汝安拋火把喝一喝

渭川宗清信女下火 預請

饒湯爐炭清涼界熱鐵洋銅安樂窩佛法南方梅一點驚人春色不須多夫惟渭川宗清信女如竹保節似花養和無山不帶雲則天下生彌勒有水皆含月豐干上品彌陀入淨入穢入佛入魔天女散花判維摩憑於笏室古人題菊示涅槃相於金河了了時無可了玄玄玄處亦



須呵，雖然恁麼，末後事如何，拋火把，石女舞成長壽曲，木人唱起太平歌，喝一喝。

芳園妙椿信女下火 預請

這一株無根大椿，花開花落幾回春，昆風昨夜忽吹倒，驚起南華夢裏人，夫惟芳園妙椿信女，截髮陶母，斷機柯親，預懼未來兩果，逆修現在三因，閉塞溪聲，廣長舌，見麼，山色清淨身，龐老登心空第，龍女獻無價珍，吾這裏密密處處不通，凡聖了了，了時何分主賓，雖然恁麼，向上一句如何，指陳拋火把，只將補袞調羹手，撥轉如來正法輪，喝一喝。

玉浦妙珍信女下火 預請

火把打圓云，價直三千衣裏珍，靈光不昧絕緇磷，百年夢覺後消息，翡翠簾前月一輪，夫惟玉浦妙珍信女，佛見忽盡，凡情已泯，緇彌勒前，入吾室，受八齋戒，珠羅漢後，證聖位，超二乘，倫鶴算龜齡，王母蟠桃結實，鳥飛兔走，姮娥靈藥，隨神開麼，溪聲廣長舌，見麼，山色清淨身，雖然，灑麼，情女離魂，那箇是真，若復不會，我指陳去，擲火把，冷灰撥出玉麒麟。

賢屋利養大姊下火 預請

長養功成不記年，浩然一氣自完全，眼光落地底時節，朵朵新開臘月蓮。

### 附錄

後平城帝宸翰

朕參禪年尙矣，祖師許多話頭古則，一一參究，一一證明，舉本有圓成話，而獲聞未聞焉，後一日在別峯，直與德雲比丘相見了也，從前參得底悟得底，一時瓦解冰消，洒洒地落落地，從是不受佛祖瞞，受用確乎得大安樂，此恩甚深，何日報謝盡，縷縷不宣。

天文壬寅五月十三日

大休上人禪室

大休和尚上

後平城帝法語

世尊付正法眼藏於摩訶大迦葉以來，不移易一絲毫，東西諸祖的的相承，直至山僧也，恭以日出處國百六代，聖天子參吾禪年尙矣，一日召再三請益，奏以本有圓成話，陛下答處，百了千當，如珠走盤相似，山僧抵掌奏曰，徹矣，蓋冷笑蕭梁武帝熱瞞李唐肅宗者，非陛下其誰乎哉，願保寶祚萬安，永爲佛法檀越，珍重。

天文十一龍集壬寅迎佛會辰 奉詔住妙心臣僧宗休謹書

後平城帝圓滿本光國師徽號宸翰



朕曩時聞大燈正傳挑在師之室下詔迎師入內密參垂語受其示誨有年于茲矣得師印證之後欲以國師稱之未遂其志遺道風於北闕輯德化於西京本體如然靈光寔大人妙用也蓋例在日之旨以特賜之號稱之爲

圓滿本光國師云爾

天文十九年二月七日

御押

大休國師門徒等

後平城帝本有圓成國師徽號宸翰

朕召本光國師而參得關山祖拈得底本有圓成之公案得大機大用而今當祖忌二百年勅蓋本有圓成國師以酬恩報德云爾

弘治三年三月十二日

微笑塔下

大休號

宗休首座雷別稱命之曰大休仍頌以爲證云

千峯勢到嶽邊止萬派聲歸海上收林下何曾換朝市縱經塵劫不回頭

永正元年十一月日 前大德特芳叟

住正法山妙心禪寺山門疏

東山雪嶺和尚製

正法山妙心禪寺山門欽奉 北闕綸旨敦請前第一座大休禪師住持本寺爲國開堂演法

祝贊皇圖萬安者右伏以法社擇師海棠多甘棠少學徒克己初節易晚節難久厭見賈浮圖忽欣逢佳衲子共惟新命堂上大休大禪師舌走霹靂眼空乾坤虛堂稱慧海航心涵千古洋喚爲法門鼎名重諸方迺祖行道獅擲象旋後昆與家鳳毛麟角教養禪府蚤檢永明百卷書棒雨喝雷晚佩臨濟三要印疑慈氏之下兜率額輪王之化閻浮張蒼佐漢呂尙相周來赴勝會阜陶歌虞奚斯頌魯仰祈丕圖謹疏 今月 日疏 知事比丘 頭首比丘 勤奮比丘 西堂比丘

同門疏

慧峯湖月和尙製

同門茲審正法山妙心禪寺適虛主席特降 綸命起大休禪師於德雲精舍以補處於是昆季乎法系者聞此盛舉不堪忻抃胥率製疏從史厥駕云德雲相見別峯有水皆月虛堂徧歷諸老誰家不春寧曰知識難逢其奈學者多惑共惟新命妙心大休大禪師精神矍鑠手段輕頑面壁得髓遠磨沾華接大乘於赤縣頌古垂示雪竇落草評百則於碧巖窺孔章之玄觸衡療之毒牀角七八尺藤杖寒時闍梨熱時闍梨擔頭一兩枝梅花者箇行李那箇行李商量南方佛法勃興東海兒孫未墜先宗是謂本色住鳥寺一巡鳳祖宜急度生到鼇山連聲叫兄莫如同志

永正龍集丙子春三月 日疏

前大德宗恕 前妙心惠樹

前妙心宗禧 前妙心玄訥



前廣嚴永資  
前大德宗棟

知慶 宗詮

住駿州大龍山臨濟禪寺山門疏

駿州路大龍山臨濟禪寺山門欽奉大檀越源府君嚴命敦請靈雲大休大禪師住持本寺爲國開堂演法祝贊 皇圖萬安者右伏以虎丘振臨濟之正宗警西華山五千偃駿河出圓通於安倍冠東海道十四州人待境境待人聖希天天希聖共惟新命堂上大休和尚大禪師名喧宇宙語帶煙霞吾師三門開堂說法第一智慧第一曾祖四月入寺住山八十行脚八十紫伽梨涵影禁池鳥跋華現瑞濁世靈雲山頭古月仰之彌高洛陽城裏秋風思不能忘美哉率陀五鳳修造宜也方丈大龍蟠居邦君負弩而前驅府主作疏以敦請文至歐蘇禪至妙喜得百世師俗若成康壽若高宗祝萬乘主謹疏 今月 日疏 知事比丘 頭首比丘 勤舊比丘

臨濟寺殿用山玄公大禪定門十三年忌拈香 就駿州臨濟寺修忌

前臨川江心西堂 天龍寺三秀院

這箇於過去則號沈水佛度生梅早而白分身之身法報應化於現在則稱香春佛出世杏晚而紅無說之說剎塵熾然凡同凡聖同聖方自方圓自圓梅檀世界梅檀如來煒煒煌煌于東國土蘆荀叢林蘆荀圍繞鬱鬱葱葱于西竺乾本來無染至理絕詮燕卻之酬師恩者供養春日知識秋日知識插向之祝聖壽者逢著香山大仙雪山大仙江南螺甲以爲淺俗吳中鷓斑

猶是腥羶法從空處起人向鼻端參或時轉大法於九衢紅塵裏材收佛宮餘工有子來助或時取沈材於一燧黃雲邊功德具足八百芬芳遍滿大千薰籠字字相凝寫出鷲嶺文龍宮藏滿爐縷縷不絕織成鷄足欄熊耳棉冷笑趙宋善神几上現九代祖泥視匡廬法師社中集十八賢一雨普霑大根大莖大枝大葉諸漏已盡非木非空非火非烟將謂趙州柏樹元來崑崙蘭荳看看用山大禪定門憑這一炷薰力脫卻三界蓋纏直處與密教教主拔苦王同坐斷華臺寶蓮舉香云信手拈來無別物大龍山裏大龍涎娑婆世界南瞻部洲大日本國駿河州居住大功德主源朝臣義元天文十有七年三月十有七日伏值臨濟寺殿用山玄公大禪定門一十三白遠忌之辰預就于大龍山集緇流修白業彫刻大日覺王尊像者一軀法華妙典頓寫漸寫印寫若干部水陸妙供圓通妙懺各一會英檀自書壽量一品且演出十如是於十首和歌以筆墨成佛事者可尙矣自餘作善詳于僧官宣讀今當散筵嚴備香華燈燭茶菓珍饈謹命現前清衆同音諷演究竟堅固無上神咒之次拜請靈雲堂上大和尚陸座說法兼副命小比丘承董焚這乾陀羅耶供養本師釋迦牟尼大覺世尊東方藥師醫王善逝西方無量壽佛今日教主大日如來當來下生彌勒尊佛文殊普賢二菩薩現座道場觀音大士六道能化地藏願王西天東土歷代傳法諸祖開山七朝國師日本國內大小神祇天界地界冥府冥官各各駢駢等所集殊勛奉爲大禪定門莊嚴報地滅除往愆茲承大禪定門年未而立易簣之日讓國於英檀賢弟維時禍難起蕭牆一日之中一戰而蕪措國家於泰山安於是乎營仁祠而山號大龍寺扁臨濟夜禪晝誦淨侶之勤修者不知其員昔破庵與松源同出密庵門爲一



門二甘露，破庵一傳至圓照，三傳至佛國國師，四傳至正覺國師，松源道至正法師祖五世，其昌爾來，此兩派濫觴于大唐，彌綸于大倭，建法幢，施法霈者不遑枚舉，蓋英檀創建當寺之始，勸請吾先國師爲開山祖，以其先定光寺殿，慕佛國道風，而師其迹者也，有所以哉，加之，大禪定門，與正法師祖異代同諱，僉曰甚奇，甚特，且復大原禪師爲龍山山主，晨鐘暮鼓，禮樂一新，月斧雲斤，輪奐盡美，頃日山門佛殿落成，施修鳳手，修造住持，說法住持，二難相并，今日適際，此忌辰，而禪師傳英檀嚴命，拜靈雲老師，陞座普說，山野亦附驥尾，作蛙鳴，累世通家，左右逢源，了先師未了因緣者乎，桃花餘上，已風景於今朝，宜也，說法使靈雲和尚師子吼後，木犀吐雙徑，塢天香於三月，耐耐亂道，令圓照遠孫野干鳴，先漸報漸報，共惟臨濟寺殿，用山大禪定門，才色兼麗，忠孝兩全，今川之出源氏嫡流也，祝伽河，信度河，縛芻河，徒多河之衆水，不足窺其涯涘，用山之承清和後裔也，普賢山，仙人山，白塔山，負重山之奇峯，何敢望厥層巔，澄之不清，消之不濁，仰之彌高，鑽之彌堅，子房是英，淮陰是雄，可輔金卵赤帝，趙昌之花，邊鸞之雀，不肩畫工，黃筌，高枕者遠，江州水聲近聽，凭欄則浮島原，山色遙連，善御乘夜，白逸群，盡爲王良，閩國好駿馬，平生臂海青，敏捷常笑，景升登臺呼鷹，鶴事美一時，語流千載，道光九野，德載八冥，談兵合吳合孫，孫子孟子，吳子論語，興家有文，有武，武王春王，文王元年，華胄燁燁，瓜瓞綿綿，牡丹海棠，不名馳，溫國年少，譽芝蘭，玉樹鍾秀，擬謝家風，流煽難兄難弟，成行，鴻鴈曰朋曰友，盈座貂蟬，地連三河之魏，景移八境之度，振起秦範，範政之先緒，熟讀定家，家隆之遺編，曼卿豪於歌，歐陽豪於文，太白豪於詩，歌詞妙絕，芳聲藉藉，胡照得其骨，韋誕得其筋，索靖得其

肉，骨格超越，筆勢翻翻，遊藝則効薛嵩，蹴鞠學射則勝羿氏，控弦匪管，整三代禮樂，矧又執一世威權，獻治安策，著勳業，鞭河南河北，從者無南無北，關東關西歸者自東自西，清見滄台，星照臨，雕輪啣軋，宇度演天人降下，羽衣翻騰，駐之無叫，莫要去，莫要去之鸚鵡，勸之有呼，不如歸，不如歸之杜鵑，烟光凝淺，問之嶽頂，橋聲報安倍之市廊，草木禽獸，借恩光，草木之主也，禽獸之主也，菟萋雉兔，沐寵渥，菟萋者往焉，雉兔者行焉，偉哉，威孫有後乎，魯，胥矣，昭王致士於燕，胸中自有丘嶽，公餘多愛林泉，五郎易之六郎，昌宗望清標於玉座，一人道安，半人鑿齒，引繩徒於門扇，修隣好而以投木李，以報瓊玖，貴淳風之不剪茅茨，不斲采椽，雖云比蓋世成功之項羽，可惜似不幸短命之顏淵，去後木枯之森，深秋寂寞，至今田籠之浦，佳月，嬋娟，三城帳，屬昇平夢，一曲鈴闌，恨望心，因懷公居幕府，萬里春從，逐客來，十年花送，佳人老，不圖吾赴齋筵，願言居易歸兜率，胡爲裴休生于闐，何處深林覓鷗，倭國富士，入金華學士之句，者風顛漢拏，虎臨濟老師，倡黃檗先師之禪，與其觀夢，幻泡影，易若挑廣續普聯，此山接本色住持，揭示妙門，流通正法，當處呵歷代諸祖，掃蕩直指，拂散單傳，論什麼，默時說，說什麼，偏中正，正中偏，向陰陽不到處，會父母未生前，了理上工夫，事上工夫，依循陸互見，普願成，棒下正覺，喝下正覺，睥睨韓愈，參大顛，頓消衆罪，霜露直領自己山川，也太奇，也太奇，蹈倒鑊湯爐炭，不動一步，勿可把，勿可把，打破地獄天堂，不勞一拳，濁世現烏鉢，虛空駕鐵船，正與麼時，香嚴童子出來，妙語芳鮮，曰如上所說，不如棄捐之，大禪定門受用，三昧底，不可以言宣，洒洒落落，雖本分歸田，即今感英檀孝心，向此法會象，取回旋，絲之無量化菩薩，挹袂拍肩，山野瞻仰，旂讚



歎旂以小祇夜一篇。

木人淚落暮春天、光景雖遷物不遷、聽麼燒香無譜曲、松風聲度十三絃。

景川和尚三十三回忌香語

松岳和尚

那伽三十有三年、舌上龍泉衝斗躡、莫道先師無此語、黃鸞啼破綠楊煙。

和松岳和尚韻

相國寺恕西堂

伊陽隔洛幾多年、仰見德星今聚躡、一雨過時百花發、春風吹起鷓鴣煙。

圓滿本光國師見桃錄卷之四終

國譯永源寂室和尚語錄

解題

寂室和尚語錄四卷は、近江國瑞石山永源禪寺の開山、勅諡圓應禪師寂室和尚一代の語要を輯録したるものにして、卷之一及び卷之二には偈頌二百六十九首、佛祖贊八十四首及び自贊三十二首を収録し、卷之三には小佛事三十四篇、說十九章及び書簡十五篇を録し、卷之四には法語五十八篇、本録刊行者性均の跋、増補一篇及び一絲文守和尚の筆に成る禪師の行狀記一篇を載せたり。編者は不明なれども、恐らくは師の侍者等の手に成りしものならん。師は天性超邁、特偉の資を以て殊に文辭に長じ、其の作る處の偈頌、法語等に到つては、咸、遊戲三昧の然らしむる所のものなり。今其の一二を採つて之を點檢するに、本録第一卷の偈頌に、「重陽」と題して曰く、「凌晨掃葉立庭際、籬落西風露濕裳、時有二山童來採菊、報言今日是重陽」と、又「書三金藏山壁」の一首に曰く、「風攪飛泉送冷聲、前峯月上竹窓明、老來殊覺山中好、死在巖根一骨也清」と。何ぞ其れ措辭の絶妙、境界の自在なるや、恐らくは専門の詩家も猶ほ遠くこれに及ばざるべし。是を以て本邦禪林の語録多しと雖も、本書の如く弘く世に流傳して、僧俗の間に愛讀せらるゝものは尠し。是れは皆其の宗旨を擧揚す



ると共に、文學的價値の甚だ優秀卓越せるが爲なり。  
 師の傳を案するに、諱は元光、字は寂室、俗姓は藤原氏、伏見天皇の正應三年五月十五日、美作國高田郷に生る。天稟超慧、早歲にして父母の命に従つて京に上り、東福寺の無爲昭元に就いて出世の法を學ぶ。十五歳にして落髮受具し、後、近江の田上郷に寓す。幾もなくして去つて關東に赴き、鎌倉禪興寺の約翁德儉(佛燈國師)に參す。其の到るの日、儉曰く、「昨夜、夢みらく諸聖の降現して、光明山河を照燭す」と。即ち名づくるに元光を以てす。徳治二年、約翁、公命に膺つて建仁寺に移るや、師相従うて湯藥に侍す。一日、約翁不安なり、師問うて曰く、「如何なるか是れ末後の一句」と、翁、驀面に一掌す。師忽然として領悟す。時に十八歳なり。

延慶二年、約翁、鎌倉に歸る、乃ち師をして金澤の慧雲律師に就いて毘尼を學ばしむ。繼か三月にして其の梗概を盡す。また東里會、寧一山、東明日の三大老に謁して益々薰灼を承く。元應二年、師年三十一、支那天目山の中峯和尚の道價を聞いて、可翁然、鈍庵俊等と海を渡りて元に入り、直ちに天目山に登りて中峯和尚に謁し、尋で徑山の元叟端、保寧の古林茂、鷄足の清拙澄、靈隱の靈石芝、般若の絶學誠、華頂の無見觀、天目の斷崖機等の諸大老に歴參し、皆其の推獎を蒙る。元の泰定三年(我が嘉暦元年)、船を發して長門の濱に歸著し、暫く三角に寓す。建武元年、備後國吉津の平居士、永徳寺を創して師を招く。觀應元年七月、長勝寺の命あれども辭して就かず、歸朝以來、二十五年の間、俗喧を厭

うて美作、三備の間に韜晦す。越えて同じく二年、攝津の福嚴寺に僑居し、又江州の往生院、美濃の東禪寺、甲斐の棲雲寺などに歴遷す。延文五年、師年七十一、江州の太守佐々木頼氏(雪江居士)、師の高徳を欽慕し、奥島、雷谿の二境を獻す。師、雷谿の幽邃なるを愛し、梵宇を締營す。山下の吏民、競ひ至りて役を執り、幾もなくして殿堂、樓閣、林際に聳立す、名づけて瑞石山永源寺と號す。是の時に當つて、四來の龍象來り從ふもの二萬餘人、皆巖に依り茅を結んで安居す。光明帝、屢々手詔を賜うて其の徳を旌す。又幕府、師をして建長、萬壽の席を董さしめんと欲すれども、辭して赴かず。帝、詔して天龍寺に住せしむ、當時、春屋妙葩、中巖圓月等、書を寄せて其の出世を趣がす。師固く辭して就かず。帝復を詔を下して法要を問ふ、師復た奏するに、「法常禪師、馬大師に問ふ」の因縁を以てす、帝之を見て忻然たり。師嘗て僧に示すの偈あり、曰く、「箇事明々呈似君、不須特地策三功勳、風和日暖黃鸝轉、春在花梢已十分」と。その詞藻の婉雅なること概ね此の如し。貞治六年、化緣應に終らんとして、弟子彌天、靈仲に命じて豫め祭文を作らしめ、九月一日、諸子を含空臺に集め、遺誡し、紇つて、偈を書して曰く、「屋後青山、檻前流水、鶴林雙趺、熊耳隻履。又是空華結空子」と、筆を投じて寂す。壽七十八、法臘六十六、勅して圓應禪師といふ。遺稿は本錄四卷の外、寂室法語一卷あり、附法の弟子は彌天永釋、松嶺道秀、靈仲禪英、越谿秀格、知庵元周等あり。猶ほ詳しくは本錄卷末の禪師の行狀を參看せられよ。



國譯永源寂室和尚語錄卷之一

偈頌 (合計二百六十九首)

偶作。

無業<sup>①</sup>一生莫妄想、瑞巖<sup>②</sup>只<sup>③</sup>喚<sup>④</sup>主人公、空山白日羅窓の下、松風を聴き罷んで午睡濃かなり。

此の閑房を借つて恰も一年、嶺雲溪月枯禪に伴ふ、明朝下らんと欲す巖前の路、又何れの山の石上に向つてか眠らん。

風飛泉を攪て冷聲を送る、前峯月上つて竹窓明かなり。老來殊に覺ふ山中の好きことを、死して巖根にあらば骨もまた清し。

九月十三日、田原村に遊んで、非舎に投宿す、同來の諸弟は、皆肱を曲げて寝に就く、獨り窓を開いて、月を觀て、聊か老懷を寫す。

①無業は大達國師なり、馬祖の法嗣、學者問を致せば、莫妄想と云ふ。  
②瑞巖、巖頭に嗣法す、常に石上に坐禪し、自から呼んで曰く、主人公、又自から應諾す、乃ち曰く、慳々著、他後人の謾を受くるなけれ。  
③金藏山、但馬太田の莊にあり、俗に金のくらと云ふ。  
④枯禪、立て枯れ禪なり、一點の生氣も亦無き也。



戊子の季秋まさに半ばならんとするの日、田原の村裡烟蘿に宿す、看  
來れば五十餘霜の月、幽興は今夜の多きに如かず。

長州の逸上人、袖より塊石を出す、兩峽對峙して、恰も青玉を劈  
くが如く、中に條白を夾んで、直下すること飛泉を懸るが如し、  
凡そ寒巖空洞幽趣餘態は、人をして、殊に丘壑の志を増さしむ、  
仍つて一絶を賦して、之に贈ると云ふ。

故舊懐を採つて奇物を示す、<sup>①</sup>巖岫たる流瀑勢千尋、<sup>②</sup>因つて思ふ時昔  
唐嶽に遊び、雙劍峰前に、<sup>③</sup>獨り自ら吟せしことを。

關西の龍侍者は、高標清致にして、眞に叢林の頭角なるものな  
り、山中に道聚して、共に枯淡を守りしが、遽爾として告別する  
に偈を以てす、仍つてために韻を次し、其の行色を壯んにすと云  
ふ。

雪後の諸峰翠嵐を漲ぐ、寒梅初めて綻ぶ野村の南、岐に臨むの一句只だ  
這れ是れ、<sup>④</sup>三喚機前に眼を著けて參せよ。

春日 吉備の中山に遊ぶの韻。

①樓、樓并とも使用して、手な  
もつて、ひきまわすことなり。  
②骨もまた清し、唐人の詩に、  
詩思清人骨の句あり。  
③戊子、貞和四年、禪師五十九  
歳。  
④條白、一條の白練。  
⑤巖岫、山の鋭き貌、又高也。  
⑥因思、塊石と盧山の瀑布と、  
相似たるより、思ひ起せしな  
り。

⑦獨り自ら云々、獨字味ふべし。  
異稱異客、花にも涙を凝ぐの  
韻ありしなり。雙劍峰は香爐  
峰と對す、廬山にあり。  
⑧頭角は傑出の義、斬然頭角を  
露すの語あり。

⑨三喚の故事は、傳燈第五に出  
づ、忠國師侍者を喚ぶの因緣  
なり。  
⑩吉備中山の詩は、實翁和尚の  
作に和する也、故に才拙云々  
の句あり。

勝地千年の寺、房々竹樹の間、落花は古徑を埋め、幽鳥は空山に叫ぶ、  
遊客晨を凌いで至り、歸程に月を踏んで還る、<sup>①</sup>留題誰か壁を燿さん、  
才拙にして追攀を愧づ。

長勝の專使護禪者に贈る。  
使なるかな使なるかな命を辱しめず、佳聲は須らく是れ叢林に播すべし、  
情を盡して話して、吾が師の席に到れば、月下の寒蟬夜深に咽ぶ。

蘆鴈二首。(飛鳴宿食し、一隻は懸立す)  
湘岸雙宿に慣れ、胡天幾行をか成す、平沙寒日の暮、獨り立つて恨  
み何ぞ長きや。

霜風秋を吹いて老い、楚甸稻梁稀なり、切に眼を呼び起すことなか  
れ、夢に飛んで北に歸るべし。

密叟侍者、遠く都下の建仁より特に山中に來つて、相探る、夜話して旦に達す、甚だ十年の  
傾想を慰す、今や長州に歸つて、師を省せんとす、二偈を留めて別る、韻によつて奉謝すと  
云ふ。

林下老來誰と與にか期せん、夢魂幾度か京師に到る、今宵安禪の榻を閑卻して、燈盞油を添へて偈

①留題云々、風詩を壁上に留  
て、光輝あらしむるは誰ぞ。  
追攀は和韻する也。

②長勝、鎌倉の長勝寺、禪師の  
師、佛燈を開山とす。專使は  
論語子路の篇に出づ、蓋し禪  
師を拜請に來りしならん。

③吾師は佛燈を指す、月下の寒  
蟬云々は懷憶嘆息。  
④此の詩懸立を詠す、湘岸は南  
方瀟湘の岸也、胡天は北地。  
⑤此の時飛鳴宿食を詠す、楚甸  
は楚國の郊外、即ち湘水の邊  
り也。

⑥相探は、人を訪問するを探水  
と云ふ、此處も亦此の意。



時を話す。  
利門名路の塵を踏むに慣く、千峰影裡に獨り神を凝す、故人俄に柴扉を把つて扣く、又聽く叢林  
事々新たなることを。

梅上人の遊方に賜る。

禪人來つて贈行の篇を討む、暗に枯腸を把つて苦に搜索す、渾て一句の君に呈すべきなし、月は空  
山を照して秋寂寥たり。

中秋雨に値ふ。

指話以前正に好し看よ、覺天洋なく影團々たり、頂門に沙門の眼を具  
せずんば、卻つて中秋の夜雨に瞞せられん。

靈叟和尚に寄す。

五更起坐して松風を聴く、故人を筭へ來れば半は空となる、識らず何れ  
の時か臭骨を埋めて。兄の閑夢を煩はして荒叢に入らしめん。

韻を廣いで雄藏主に酬ゆ。

交談と寄書とにあらす、同參の句子擧して餘りなし、年來老弟懶僻多し、  
區々として起居を問ふことを休罷す。

① 事々新は、古風日に凋落。  
② 指話、傳燈十八、玄沙の示衆也、正法眼藏大迦葉に付嘱すと云ふは、月を話するが如く、拂子を擧起するは、月を指すが如しと。  
③ 靈叟は佛燈の法嗣。  
④ 兄の閑夢云々、漫後の辨香を托すが如し。

東南月皎として海天晴る、惹動す高人萬古の情、沒絃の琴を把つて彈す  
ること一曲、風前誰か是れ希聲を聴かん。

靈叟和尚に寄す。(兵庫の福嚴に在つて作る)

我が此の門頭市廓に接す、那ぞ日々事の紛然たるに堪へん、百錢一柄の  
鏝を買ひ得去つて、青山を刷いて暮年を安んせん。

重陽。

晨を凌ぎ葉を掃ひて庭際に立つ、離落の西風露裳を濕す、時に山童の來  
つて菊を採るあり、報じ言ふ今日はれ重陽と。

成親の墓の韻。

身は王事に亡じて只名のみ存す、悲み看る荒墳の藓痕を長するを、千  
古中山春寂寞たり、岩花の香は幽魂を返すなるべし。

室山に花を看る韻。

野興人を催して青晝長し、行いては看る岩院滿庭の芳しきを、僧は玉樹  
陰中より過ぎ、鶯は瑤葩の重き處にあつて藏る、砌を擁しては應に山月  
の色を添ふべく、窓に飄つては又瓦爐の香を助けん、老來好景多く遇ひ

① 沒絃琴、陶淵明無絃琴一張あり、酒あれば則ち弄撫す、人其の意を問ふ、答へて曰く、若し琴中の趣を知らば、何ぞ絃上の聲を弄せん。  
② 希聲、老子に「大器は唯成、大音は希聲」とあり。  
③ 詩意、市近くで、うるさくて仕様がな、山の中へでもはいつて百姓でもせうと。  
④ 重陽、九月九日。  
⑤ 物さびた詩なり、重陽の氣分横溢す。  
⑥ 他人の作に和韻せし也。  
⑦ 王事に亡すは、藤原成親、後白河院の命を奉じて、平氏を滅さんとす、而も事終に成らず。  
⑧ 中山は吉備の中山也、清盛、成親を此地に誦し、終に之を在木の別所に殺す。  
⑨ 岩花の香云々、岩花の香體師



難し、眼風光に酔うて心狂せんと思ふ。

① 八塔寺に遊ぶ。

一嶽三府を歴し、白雲碧嶺を覆ふ、峯高うして萬仞に踰え、寺古うして千年に近し、僧は坐す虎堂の月、猿は吟す老樹の烟、言を寄す浮世の士、此に來つて塵縁を脱せよ。

② 神根の道中。

怪石奇巖碧澗の流、白雲紅樹夕陽の秋、吳山楚水曾て行き偏し、清興は何ぞ此の勝遊に如かん。

佛涅槃。

三界の導師涅槃せり、人天等しく是れ苦に傷悲す、溪山二月花錦の如し、錯つて秋風紅葉の時かと認む。

③ 調上人の京に行くを送る。

八月九月風月好し、一聲兩聲鴈聲寒し、公驗は分明なり須らく歩を進むべし、元來大道長安に透る。

再び大和寺に遊ぶ。

たるは、彼れの幽魂の化現なるべしと、一説、古註に十洲記を引いて、死人返魂香を開けば、即ち活す、今岩花香ばし、此の返魂香を以て、幽魂を呼び返すべしと。

② 室山は播磨揖四郡にあり。

③ 碑を擁して云々、庭のあなななをこつてゐるのは、山月に化粧をするであらう。

④ 窓に飄つて云々、窓先きに吹き亂れたるは、爐邊の香を助げんと。

⑤ 八塔寺は播磨美作備前三州の界にあり。

⑥ 神根は備後國藤野の保にあり。(舊註)

⑦ 吳山楚水、吾曾て南遊して、支那の名勝に遊ぶ、而も此の清興に如かずと。

⑧ 三四の句、杜牧之の詩句「霜葉は二月の花よりも紅なり」を襲案す。昔ながら冷水を流

此の地重遊を得たり、春残つて院落幽なり、花は樹上に歸し難く、雪は人頭に點じ易し、竹を鳴しては風夢を吹き、茶を煮ては客自ら留まる、明朝又杖を携へて、去つて林丘に臥せんと要す。

壽聖の養直和尚の來諭に酬い、兼て同門の諸法兄に簡して、長勝の命を辭す。

嘉音兩度まで林樾に到り、午眠を驚起して竹關を開かしむ、語を龍峰下の頭角に寄す、一生我を放して安閑を得せしめよ。

大澤庵主に寄す。

大士峰前に大澤を思ひ、安心山下に獨り安禪す、君今疾を抱き吾れ還た老ゆ、來往は知らず能く幾年ぞ。

曆應辛巳、七月六日の曉、偶々夢に將に死せんとして、偈を寫す、覺めて之を記すと云ふ。

錯つて黄金を把つて鐵牛を鑄る、草肥え烟暖かにして林丘に臥す、今年五十有二歳、且喜すらくは耕さずして還つて秋を見ることを。

建武丁丑、六月廿五夜、夢中に兩句を得、覺めて之を續ぐと

國譯永源寂室和尚語錄 卷之一

した懐な感じがする。

① 此の時最も流暢、誦すべし。

② 公驗は、身元保障の手形也、關所の番人に示すもの、此處の公驗は、釋迦達磨の親しく授與せし手形なり。

③ 花は樹上云々、上の句は、落花枝に上らず、下の句は白髮是れ公道と云ふが如し、花のちら／＼散つて、人の頭に降りそゞぐ處。

④ 長勝の命、觀應元年、禪師六十一歳、足利基氏、親しく帖を書し、師を請して長勝に住せしめんとす、師辭して赴かず。

⑤ 龍峰下の頭角、佛燈下の餘宿なり、龍峰は佛燈塔所の嶺。

⑥ 大士峰は、備前慈廣寺の山號。

⑦ 曆應辛巳、禪師五十二歳。

⑧ 黄金、百鍊の黄金を以て、鐵牛を鑄る。

⑨ 耕さず云々、耕さずして、取入



云ふ。

人生倏忽として露電に同じ、計較何ぞ曾て徒に自ら瞞せんや、萬事縁に随つて、胡亂に過ぐ、飽くまで白飯を餐して青山を見る。

● 椎村山庵の壁に書す。

澗水人間に下り、巖雲別山に過ぐ、聊か幽鳥の語を聴けば、野僧の閑を喜ぶに似たり。

和韻夜話。

● 三祇劫外の舊冤讐、一夜山庵に頭を聚むるを得たり、眠恨怨言傾倒し了る、錢を纏ひ鶴に騎つて揚州に下る。

● 訥堂和尚の過訪を謝す。

索寞たる春光巖下の寺、高人の金錫烟霞を拂ふ、空山日は永し何をもつて待せん、唯だ庭前一樹の花のみあり。

● 西禪寺に宿す。

火後の西禪寺、門庭灰よりも冷かなり、井河は聲寂寞、嵐嶠は碧崔嵬、唯だ山雲の宿するあつて、渾て俗駕の來るなし、上方の老禪伯、古格復た追回す。

友人を憶ふ。

山院春深うして客來らず、空庭花落ちて蒼苔を没す、流景を留めんと欲すれども策なきを怕る、猶ほ佳人を等つて念未だ灰せず、身老いて尤も世外に居るに宜しく、雲閑にして只だ合に巖隈に臥すべし、午眠一覺茶三椀、千峰を望斷して闔を推して開く。

茶を摘む。

枝頭葉底精神を著く、限りなきの芬芳遠く人に襲く、體用の中收不得、一藍漏漚す十分の春。

● 庚寅の冬、備前の金山に登つて、功上人の幽居を訪ひ、毫を授つて山中の四威儀を賦し、壁上に書すと云ふ。

山中の行、烟霞遠近歸程を失す、溪邊失脚して指頭破る、流水の聲は忍痛の聲に和す。

山中の住、草衣藜食朝暮を閑す、千峰盡日雙眸に入る、記せず、青黃の能く幾度なるを。

山中の坐、石榻跏趺す惟だ一箇、全く寂を樂むと喧を嫌ふとにあらず、獨り閑雲のみあつて相許可す。

八

時に逢ふたと、借金なしの時が來たと云ふことか、何分に夢のことであるから分る。

● 建武丁丑は延元二年のこと、禪師四十八歳。

● 兩句、蓋し三四の句ならん。

● 胡亂は不實也、ごまかしと云ふが如し。

● 椎村は備前國にあり。

● 三祇劫外云々、昔しなじみの喧嘩相手。

● 三四句、太平廣記に云ふ、數人あり、各其志を謂ふ、一人曰く、我れ腰に十萬貫を纏はん、一人曰く、我れは鶴に乗つて遊ばん、一人曰く、揚州の太守とならん、終りの一人曰く、腰に十萬貫を纏うて鶴に乗つて揚州に下らんと、是に原づく。

● 西禪寺、天龍寺の南にあり、開山石庵明禪師、明は宏辨訥

に嗣ぐ、訥は大覺に嗣ぐ。

● 老禪伯は蓋し石庵ならん。

● 體用、瀟山茶を摘む序で、仰山に謂つて曰く、終日茶を摘む、たゞ子が聲を聞いて、子が形を見ず、仰山茶樹を摘みず、瀟山曰く、子たゞ其用を得て、其體を得ず、仰山曰く、未審し、和尚如何、瀟山良久す、仰曰く、和尚たゞ其體を得て、其用を得ず、云々。

● 庚寅、觀應元年、禪師年六十一歳、功上人由真法燈下の入。

● 忍痛聲、あいた……。

● 青黃は春秋也。



山中の臥、高く蘿窓に枕して怠惰を繼にす、天風吹き折る老松の枝、耐へがたし吾を驚して、濃睡の破るゝを。

倫上人に寄す。

交を英俊に締んで自ら年を忘る、一夜情を馳せて困じて拳を枕とす、夢裡分明に相見し了る、爐邊雪を聽いて禪を對談す。

淨妙の實翁和尚に寄す。

日に聲光の高く天を耀かすを聴く、衰殘は舊に依つて巖烟に臥す、西來三世の重擔子、獨り荷山のみあつて隻肩を勞す。

雪中に東隆長老に寄す。

庵外には雪深く積み、庵中には僧獨り禪す、同人若し此に到らば、共に普通の年を話せん。

戊子姑洗之末、出遊して歸る、忽ち北巖侍者の寄せらるゝ佳什を視て、韻によつて懷を寫すとしか云ふ。

靑鞋踏み徧し幾春山、病翼飛ぶに倦んで今已に還る、宿雲の半榻を分つを待つに慣れて、日昏れて猶ほ未だ柴關を掩はず。

① 臘珠は求むること易かるべきも、心友は得ること尤も難し、獨り閑中の味を弄して、白頭にして碧山に對す。

北巖の濟侍者は、天資英拔にして、② 蘊藉淳素、頗る古衲の風あり、愚に従つて遊ぶこと最も久し、實に忘年の友于たり、丁亥の冬、事を慈光に謝して、餅錫を西祖明禪の間に止めんと欲す、

此の計未だ決せざるに、俄かに來つて辭を告げ、復た養恩庵に歸つて、清高の節を全くせんと言す、得て留遇すべからず、其の志亦嘉すべきに足れり、聊か拙辭を拵へて、之に贈ると云ふ。

多載頭を聚む誠に因あり、枯を拾ひ瀑を煮る寂寥の濱、口に甜く心に苦きは眞の相識、義斷え情忘じて道親み易し、高く松關を掩うて舊隱に歸り、俯して看る人世の浮塵に等しきを、竹房留め得たり老禪衲、獨り喜ぶ靑山の爲めに隣を作すことを。

鶯を聞く。

鶴 嘆は那ぞ曾て比況するに堪へんや、深花影裡に幽簧を弄す、人の聲前の旨を會得するなし、又春風を逐うて短牆を過ぐ。

鶯を聞く。

鶯 嘆は那ぞ曾て比況するに堪へんや、深花影裡に幽簧を弄す、人の聲前の旨を會得するなし、又春風を逐うて短牆を過ぐ。

① 淨妙は鎌倉五山の一、實翁諱は妙秀、茶航然に嗣ぐ、然は蘭溪に嗣ぐ。  
② 西來は大覺の塔所也。  
③ 荷山、淨妙寺の山號を稱荷山と云ふ。  
④ 同人は斷金の友也、普通は二祖雪に立つて、法を求めし年也。  
⑤ 戊子は貞和四年、禪師年五十九、姑洗は三月也。  
⑥ 宿雲の半榻云々、宿を借りに來る雲に、腰掛半分借すこと、常になつて居るから、まだ門を鎖ちすと。

① 臘珠、臘籠下の珠、莊子に出づ。  
② 蘊藉は寬厚、淳素はまじりけなき也。  
③ 友子は友だちなり、惟孝友子兄弟より出づ、書經にあり。  
④ 丁亥、貞和三年、禪師五十八歳、慈光、西祖、明禪は、皆備作の間にあり。  
⑤ 義は義理なり、情は人情なり。  
⑥ 鶯、鶯云々、鶯の鳴き聲を以て、鶯に比す、語頗る奇なり、是れ傳燈錄元安禪師の語に原づく。



韻を次して提藏主に酬ゆ。

是れ君によつて祖風を振ふべし、曾て聞く宗、説兩つながら俱に通すと、言ふなかれ下載知心少なりと。且喜すらくは今朝同志の逢ふことを、藏裡の摩尼は標字を照し、金の剛の寶劍は機鋒を快くす、徹背傾倒す無、生の話、月は上る遙峯古洞の東。

忍副寺の庵居を訪ふ。

何事ぞ衣を拂つて深く退藏す、亂峯影裡に禪房を卜す、雲居の庫下に華姪あり、終に楊岐六世の芳を續ぐ。

震巖和尚、前日三偈を惠まる、韻によつて謝し奉る、切に人に示すなかれ、羞らくは羅公の誦を招かんことを、一笑。

白雲の關振を撥轉し了つて、人天の眼目價聲増す、龍龍子を生ずるは尋常の事、且喜すらくは吾兄の佛燈を熾にするを。

深く愛す襟懐の月よりも明かなるを、又添ふ志氣の霜よりも烈じきを浙の東西と湖の南北と、共に話して還つて秋夜の長きを忘る。

宗眼高明にして道自ら尊し、任教我空門に表、率たるを、今朝坐

斷す青峰の頂、先師不報の恩を報するに堪へたり。

再び震巖和尚の韻を用ふ。

一たび人間を出で、百不能、衰窮疎懶日に相増す、餘生贏得たり丘壑に安することを、青眼にして佗の祖燈を續ぐを見る。

一別今に到りて三十、白蒼顏鶴髮風霜に老ゆ、秋窓雨夜青燈の下、同じく葛藤を打して許の如く長し。

末法の僧中誰をか尊ぶべき、紛々として多くは利聲の門に走る、清高獨り雲峰の在るあり、志を奮つて須らく佛祖の恩に酬ゆべし。

夜千光寺に宿す。

十有年前故人を問ふ、相看て手を把つて語春の如し、争か知らん此夜ひ陳跡に眠らんとは、月は寒窓を射て風箏を撼す。

寒夜即事

風寒林を攪して霜月明かなり、客來つて清話三更を過ぐ、爐邊に筋を闊いて煨芋を忘れ、靜かに聴く窓を敲く葉、雨の聲。

曇浚の相陽に之くを送る。

國譯永源寂室和尚語錄 卷之一

宗説云々、宗通は自分の修行、説通は未悟に示す、現今は多く宗旨と議論とに分つが如し。

藏裡摩尼、如来藏裡の摩尼寶珠。(證道歌)

金剛寶劍、或時の一喝は、金剛王寶劍の如し。(臨濟錄)

無生の話、龍居士の偈に、有男不婚、有女不嫁、大家團圓頭、共説無生話」とありて、幹も根も葉もなき話なり。

華姪は大慧より、應安を呼びし語也、應安曾て圓信に雲居に參す、故に雲居の庫下に華姪ありと云ふ、蓋し忍副寺は禪師の法姪ならん。(舊注)

羅公の誦は、羅公在説とは、職拙を露出するの方語。

白雲は龍聖寺の山號、澧州にあり、同翁和尚の遺跡なり、震巖は月翁に嗣ぐ、故に白雲の關振を撥轉す云々、關振はからくり也、ねぢなり。

浙の東西、湖の南北、浙東浙西、湖南湖北、則禪師曾遊の地。

表率是指導の意、青峰は佛燈の塔所。

前三首は敵を計る也、猶ほ己れを計るの一着を残す、故に此の續あり。

百不能、何一つ出来ないこと云ふ事也、然し疎懶を増し、所處に安し、青眼をなすでは、充分な働きと云ふべし。

青眼、支那の阮籍と云ふ人は、氣に合つた人來れば、青眼をなす、いやな客來れば、白眼をなす。(晉書)

白、一年のことを一白と云ふ、天然の方語。



心は龍峰に到つて身到らず、餘生已に近し鬼と隣を爲す、如今喜び得たり子が前去するを、我に替つて能く塔下の塵を除け。

會禪人の遊方を送る。

臨濟曾て參ず黃檗の禪、烏藤六十蒿枝拂ふ、今君が 行の爲に此の言を贈る。春山雨後碧きこと潑ぐが如し。

春日山行。

満頭の疎髮銀絲を燃る、來歳の逢春は未だ知るべからず、竹杖芒鞋野興多し、山花看て 幾株の枝にか到る。

夜龍 聖寺に宿す。(月窟の遺庵)

白雲峰下青松の境、一夜空房坐して明に到る、露は秋晏を洗つて月初めて上る、郎 忙として問訊す老師兄。

俊鈍庵を訪ひ、夜話且に達して、贈らるゝに偈を以てす、韻によつて之を謝すと云ふ。

一夕清談して襟字披く、道回且喜すらくは玄扉を扣くを、身を翻して重淵の底に跳下して、驪珠念八を奪得し歸る。

關西の素維那、淨智の實翁老兄の會中より來つて、巖居を相訪ふ、而して翁の惠む所の偈を出し示す、老拙輒ち其の韻によつて贈ると云ふ。

袖裡の金槌影動く時、桃花笑を含み柳眉を舒ぶ、克實は負かず老興化、又賣山山下に向つて歸る。

翡翠。

何の年か鬱林を離る、彩羽清泚を照す、身は枯葦の危に居て、心は深潭の底に在り。

鶴鶴。

管せず弟兄の難、獨り原上の石に翹つ、胡蝶の 飛ぶを貪り看て、其の幽寂を破るに似たり。

三月盡。

限りなき風光已に索然、殘花尚は自ら庭前に舞ふ、春歸りて定めて重ね來る日あらん、人老いて何ぞ曾て復た少年ならん、幻跡多くは留む青嶂の裡、幽懷常に在り白雲の邊、閑窓晝永うして歳を経るが如し、楞嚴を課し

①雲峯は白雲峯。  
②隣跡は其人既に死して、只隣跡のみ存す。  
③葉雨は雨寒更盡、開門落葉多しより來る、又風枝雨葉飄として秋を帯ぶの句あり。  
④龍峰は佛燈の塔所、前出。  
⑤行は送行也。  
⑥山花看て云々、是れで何本目かしらむと。  
⑦龍聖前出、美濃の白雲山龍聖寺。  
⑧郎忙は忽忙の意ならん、老師兄は、月翁。  
⑨驪珠念八云々、念八は二十八也、珠を聯ぬる廿八字の詩を贏ち得たりと、鈍庵の原作に曰く、「閑徑荒蕪菊未披、忽驚象駕顯三林、兩朝舊事話猶在、賣杖凌巖莫促歸。」  
⑩袖裡の金槌、百丈清談に、鉢を開き佛を念し、衆に白すには、皆鐘を鳴す、維那の職也、

白樺とも、金槌とも云ふ、大凡鐘は聖室を出でずとありて、高聲にすべからず、故に鉢を認むるのみ、今素公維那の職にあり故に此句あり。  
⑪克實云々、傳燈興化の章に出づ、克實亦維那の職にあり、故に引用せしなり、賣山は金賣山、淨智寺の山號也、昔の克實は、追出されて仕舞ふたが、今の克實は、老興に負かない。  
⑫翡翠は鬱林に生ず、泚は水の清きなり。  
⑬輕わざ使が、竹棒の絶頂で、鶴を仕ながら、見物の側具台を考へて居る様なものじや。  
⑭弟兄の難、詩經常棣の篇に、脊令原にあり、兄弟念難とあり。  
⑮縁が一疋書いてあつたと見ゆ。  
⑯よき詩なり。



罷んで几に隠れて眠る。

宏上人に贈る。

白雲深きところ茅茨を掩ふ、<sup>①</sup>慚愧す禪人の舊知を問ふことを、相送つて門を出でて兩つながら無語、長松影下に立つこと多時

清公上人の西禪和尚を歸省するに贈る。

鳥啼き花笑つて興悠なるかな、<sup>②</sup>知識門庭の破草鞋、<sup>③</sup>百衲君が如くなるは半箇も無し、孤筇我を過る已に三回、道情は應に是れ秋水よりも清かるべし、世慮は何ぞ其れ死灰よりも冷かなる、<sup>④</sup>一雙窮相の手を袖にすることなかれ、師の背上に光を放ち來らしめよ。

戊午の仲春、榻を東禪の客檐に借つて、涉句の留をなす、偶

偶花嶽庵に遊んで、心公法兄を訪ふ、其の<sup>⑤</sup>韜鋒の韻致を觀るに、幾んど<sup>⑥</sup>瓊亮の高風を追配す、愚謔に江湖に遊んで、二十載に垂とす、未だ歸休の計を獲ざるを以て愧となす、紫栗青鞵、他日重ねて來つて、公に水邊林下に從はんもの、愚にあらすして誰ぞや、因つて俚語を述べて、其の志を紀すと云ふ耳。

①慚愧云々、依然たる東吳の舊阿蒙也。

②知識門庭の破草鞋、上の句は破れわらぢの境界なり。

③百衲は大勢の坊さん。

④窮相の手は、貧乏くさい手なり、腕の太きこと三尺、指の短きこと一寸、昔し白雲和尚は、此手ぶりで容易に三齋を舞はぬと云はれたが、まあさう大切にしなさんな、御師匠さんの背中の掻い處を掻いて、あゝ心地よいと呼ばしめよと。

⑤戊午は文保二年、和尚二十九歳也、舊注に師六十三歳の時、澶州に往いて東禪に居る、(紀年録)、然らば此干支は誤るが如しと、下に江湖に遊んで二十歳の語あり、此干支の誤れること必せり。  
⑥韜鋒、韜はつゝむ、鋒はけづるにて、光をつゝみ、彩をけるなり。

寥々たる清夜幽情に適す、蘿月松風孰と共にか争はん、覺えす欄を敲いて舒ろに一嘯す、知音は只だ曉鐘の聲のみあり。

春は焼痕に入つて紫巖肥えたり、籃を携へ杖を拽いて禪扉を出づ、袖中の辣手未だ拈出せざるに、<sup>①</sup>輪與す拳を堅つる那一機。

此の生隱約して<sup>②</sup>寒巖による、流涕收め難く口緘むに似たり、幽鳥は知らず頻りに<sup>③</sup>話墮するを、亂峯影の裡語呢喃。

澗水旋や添ふ茶鼎の湯、山花時に助く石樓の香、破蒲團上に餘事なし、又見る林巔に夕陽を掛るを。

入定の猿。

盤陀石上に禪す、應に是れ攀縁を息むるなるべし、孤影<sup>④</sup>巫峽に沈み、

三聲<sup>⑤</sup>冷泉に斷ふ。

韻を次して、日峰和尚に酬ゆ。

一生贏ち得たり一身の閑、此の樂み自ら知る言及すること難し、物外の高人趣味を同じうす、杖藜時に復た林間に到る。

忠侍者の韻を借りて、幻居庵主に寄す、二首。(真前春日遊山ノ使弟)

づるなり。

①瓊亮は、芋燒備置と西山亮なり、湖濱の事は人皆之を知る、西山亮は廣く理論を究めて、天下無敵の稱ありしも、馬祖の一擲に遇ふて、一時に破家散宅し、西山に隱れて火種刀耕す。

②早蕨がにぎりこぶしを振りあげて、山の横づらはるがせぞふく。

③寒巖、寒山は寒巖に隱る、流涕はみづばな。

④話墮、靈門因みに信問ふ「光明寂照遍河沙、一句未だ絶えざるに、門邊かに曰く「是れ張拙秀才の語にあらすや、」僧云く、「是、門云く、「話墮せり、」此話墮と云ふことは大層面白い、斯く云ふも早や話墮して居る。

⑤入定猿、終南山に禪僧あり、時に袈裟を失ふ、猿あり之を



① 心字須ひす門上に書するを、一拳頭上に親疎なし、他時慧日と春日と、乾坤を照燦して光餘りあり。  
② 等閑に相見して俱に傾倒す、卻つて恨む平生心跡の疎なるを、道聚の情懷は唯だ一日、尋常の交舊十年餘。

③ 清見の方崖和尚、一偈を寄せらる、拆いて四絶となして之に耐ゆ。

④ 龍壽山中の老古錘、人間得難し箇の頑痴、今朝自ら笑ふ籃を携へ去つて、栗を拾つて餐する時皮を剥ぐことを忘る。

⑤ 松風白を吹く鬢邊の絲、應に是れ秋深うして、蒲柳衰ふるなるべし、忽ち同參叢席の盛なるを聴いて、園を鉏ぐの手を停めて喜で眉を舒ぶ。

⑥ 言を寄す此の千金の重きを保せよ、巨鯨背上に三山聳ゆ、大教を播揚す海潮音、那處の叢林か悚動せざらん。

⑦ 祥雲零落の時を扶起することは、須らく驚蟻の老宗師に還すべし、關門鎖さす家風大なり、去々來々誰をか礙塞せんや。

⑧ 材翁侍者 野部の新居を訪及す、終宵爐を擁して清話す、別に臨

んで、聊か小詩を成して、謝を致すと云ふ。

⑨ 茅を誅して新にトす空山の塙、遠く幽閑を問うて意輕からず、枯柴を燒き盡して言も亦盡く、共に聴く寒雨の窓を打つ聲。

⑩ 龜峰の悦山首座、山中を垂訪して、留まること兩月、歎話傾倒、益々道義の厚きを見る、別に臨んで、聊か拙章五十六言を寫して、以て之に贈ると云ふ。

⑪ 龜谷山中の悦山叟、軒昂の英氣、常流に出づ、南泉の位を擡く老黃

⑫ 葉、古寺の門を掩ふ陳陸州、衆衲服膺す眞の表率、佳聲耳を驚かす來由あり、這回歸り去つて、峻嶺に遺はす、宗風蕭索の秋を扶起せよ。

⑬ 賢姪繁茂林、當初備前の安國に來つて老拙に依止す、時に歲未だ志學に登らず、後十有二年、遠江野部の山中に邂逅す、手を執

⑭ つて舊を話し、相得て甚だ懽ぶ、庵を同じうして住せずと雖も、數々として來り訪ひ、風雨にも渝らず、既に亦涼燠を更ふ、益

⑮ 益其の道義の篤きを見る、老拙衰暮の極、又遠方に去つて、幽棲の地を求めんと謀る、今日一別せば、夢中にあらざるよりは、復

披して岩上に坐禪す、他の群小猿亦之に倣ふて坐禪す、(東山外集注)。

① 巫峽、荊州記に、巴東三峽巫峽長し、猿鳴いて三聲振雲を活す、蜀は山園にして猿多し。

② 冷泉、靈隱天竺寺にあり、三聲鳴いたら、泉の響も一時にとまる。

③ 日峰和尚、佛燈錄に、長壽寺に出世すと出づ。(舊注)

④ 心字云々、了心錄に、一老宿あり、住庵す、門上に一の心の字を書し、窓上に一の心の字を書し、壁上に一の心の字を書す。

⑤ 一拳頭上云々、趙州二庵主の因縁、以上二句庵主の二字より來る。

⑥ 君が一日の恩の爲めに、妾が百年の身を誤る。

⑦ 清見の方崖、驢河の清見寺方

⑧ 巖元主禪師は、佛燈に嗣ぐ、禪師の兄弟なり。

⑨ 龍壽山、遠州永安寺の山號。

⑩ 寂室和尚は、餘り達者で無かりしと見え、録中處々に蒲柳の語あり、かよわき體を蒲柳の質と云ふ。

⑪ 保は、保賢。

⑫ 巨鯨は、清見寺の山號なり、莊子に巨鯨背上に一山ありと、三山は、蓬萊、方丈、瀛州の三神山なり。

⑬ 祥雲、佛燈塔所の門額也、佛燈の宗旨今零落。

⑭ 遠州野部。

⑮ 此境を識らんと欲せば、鏡清の雨滴聲に參すべし。



た會見の期なし、之が爲めに悽然たるを免れず、仍つて四十字を寫し與ふ、後來若し想念せば、宜しく之を取つて見るべき者耶、一笑。

幻影深隱を圖り、秋風袂分たんと欲す、法多清夜の月、龍壽暮天の雲、去つて後誰か我を思はん、憐むべし獨り君あるを、精勤志節を持して、歳晩に斯文を振へ。

海印庵扁榜の後に書す。

吾佛當年輕しく指を按ず、指頭放出す大光明、庵中の主は此の三昧を得たり、月は珊瑚枝上より撐ふ。

僧に示す、二首。

箇の事明々に君に呈似す、須ひす特地に功勳を策つることを、風和日暖かにして黃鸝啼

⑦常流、尋常の流輩、乃ち有り觸れたる人物なり。

⑧南泉云々、黃檗の運和尚、南泉に在つて首座たりし時、一日鉢を持して堂に入り、王老師の位に向つて座せんとす(會元)、是れ南泉の位を據すと云ひし也、據は據奪、俗語の「ひつたくる」なり。

⑨古寺云々、睦州は黃檗に嗣法して、晩年門を閉ぢ、蒲鞋を繼つて母を養ふ(會元)、南泉の句は機鋒を語り、睦州の句は孝心を賦す。

⑩峻極は、高位に拔擢せらるる也。

⑪志學、十五歳。

⑫涼燠云々、一年程たちしと云ふ也、寒暑は夏と冬、涼燠は春と秋也。

⑬者耶の二字は、別後に之を見て、想ひ出にせよと、云ふべきを憚して、疑語とせしなり。

⑭法多寺の清夜の月は、誰れと俱に影を照して寒き、龍壽山頂の雲は、冉冉として蝸を出づ、別るゝ時の景也。

⑮斯文、論語の子罕の篇に出づる文字にて、孔子は斯文我に在りと、自ら慰められた、然し神僧の斯文は、不立文字の活文字也、此叢社零落の時に、宗風を扶起せよと。

⑯起承の二句は、楞嚴經の「我れ指を按ずれば、海印光を發す、汝心を舉すれば、塵勞先づ起る」に本づく、海印は海水澄んで、萬象を印する也、三昧は正定の梵語。

⑰巴陵和尚は、「如何なるか吹毛劍」と問ひしに、「珊瑚枝上月を撐著す」と働かれた、今寂室師師は、五本の指から海印三昧を發するを、月は珊瑚枝上より撐くと頌せられた。

す。春は花梢に在つて已に十分。

參禪は實に大丈夫の事、一片の身心鐵打成す、欄看よ從前の諸佛祖、阿那箇か是れ閑情を弄す。

賢姪石洞、特々として來り訪ひ、相陪すること旬餘、爐を擁して歎話、甚だ道義の厚きを感じ、今又偈を留めて別る、免れず韻によつて之を謝するを、敢て望むらくは輒爾。

閑寂たる空巖霜夜の月、薛羅庵裡老夫が情、明朝子又山を下り去らば、何れの日か重ねて戸を敲くの聲を聽かん。

實翁和尚復庵和尚を悼むの韻。

古佛光を撮めて聊か徒を誡む。言ふことを休めよ今日無餘に入ると、禪は幻住に參じて人皆委す、義は空巖に在つて我虚しからず、塵は積る風に越く群衆の榻、篋には残る道を問ふ指紳の書、年來宗社寥落を増す、只蒼々に向つて幾嘘を打す。

老弟特に來つて瞻拜す、偶々師兄暫く出づ、便ち歸去せんと欲す、而も日既に夕なり、一夜西軒の下に獨坐し、聊か五十六言を述べ、

功勳は、拈錫整拂、棒を行じ、喝を下すなり、是れを功勳邊の事と云ふ。

⑱參禪は是れ鐵漢なるべし、手を心頭に著けて即ち判すと、李邕語は頌じた。

⑲閑情緒思で、のり、くらりと出て出来るものは、我慢放逸と、地獄の業である、閑情とは閑居して不善を爲す、閑事の爲めに無明を長すとありて、性根にすぎの出来る也。

⑳特々は得々、輒爾は口を開いて大笑する也、空巖は古法に不明とあり、蓋し空生巖畔より來りし語ならん、薛羅はつたかづら。

㉑復庵諱は宗巳、中峰明本に嗣ぐ、常陸の法雲寺の開山也、延文三年九月二十六日示寂す、實翁の悼詩頗る巧也、今は省略す。

㉒徒を誡むとは、執着心や常住



以て所懐を據ぶと云ふ、伏して希はくは鞞爾、玉砌師兄和尚几下。

老龍隱は是れ我が知心、特に幽栖を問ふて蓬林に入る、寶杖晨を凌いで何の處にか去る、空房に宿を投じて更の深きを覺ゆ、人を照すの山月は顔色全く、耳を洗ふの松風は語音正し、謂つべし這回眞の會見と、明朝春々として青岑を下らん。

臘八雪に因つて。

黄面今朝成道了る、卻つて禍事を將て人天を惱す、我儂は星兒の火を求め得て、爛枯柴を焼いて雪を看て眠る。

康安辛丑の春、余亦を江州飯高山下、越溪の上に誅す、時に松侍者なるものあり、余が舊識空室老師の高弟なり、百濟の僧舍に寓す、數々として孤寂を訪はる、相對して時を移すと雖も、多くは是れ一詞を交へずして去る、然れども其の英邁の標、粹美の韻、霏然として眉宇の間に溢る、竊に喜ぶ、衰暮偶々忘年の友子を得ることを、一日別を告げて、東受業に歸る、余も亦之が爲め

- ① 聖の迷徒を警醒するなり。
- ② 或は空巖云々は、復庵は三たび天子の命を辭し、二たび龜山の請を卻け、寂寥たる空巖に禪す、之を我慮しからずと云ふ。
- ③ 嘘の字實翁の原時に嘘嘘と用ふ、故に已むを得ず新くの如く次せし也、嘘とは吹也、氣をはくなり、天を仰いで幾たびか嘆聲をもらすなり。
- ④ 人を照す云々、二句、皓々たる空中の孤月輪、是は師兄眞の面目なり、微風幽松を吹いて、近く聽けば聲愈々好きは、師兄眞の語言なり。
- ⑤ 師兄の明誠を春々服膺して、青山を下らん。
- ⑥ 黄面は釋迦、禍事は厄介な荷物なり。
- ⑦ 康安辛丑、和尚時に七十二歳。
- ⑧ 越溪、越智川也。
- ⑨ 百濟寺、飯高の西里許にあり、

に黯然を増すを免れざるのみ。袖より紙を出して語を需め、將に再會の記と爲さんとす。因つて卒に二十八言を携べて、以て贈ると云ふ。

老來生鐵心肝となす、一句何ぞ曾て舌端に上らん、今日君が爲めに線路を通す、西風霜葉溪山に滿つ。

余が忘年の端友、悦雲峯、一別二十有餘載、夢寐にも想念して已まず、一日忽ち巖扉を叩く、手を執りて舊を話し、相得て甚だ懽ぶ、而して亦妙偈を惠まる、唱歎の餘、韻によつて謝し奉る。蒼顏白髮、經年別る、彼此昔人昔人にあらず、今夜肝腸傾け盡さざるに、曉曉の霜月水輪を落す。

周姪に與ふ。

當に信すべし吾宗に語句なきことを、爾來つて得々として何をか求めんと欲す、草鞋跟底西風急なり、八月依然として是れ仲秋。

夜、向陽寺に宿す。

夜向陽山裡の寺に宿す、開基の尊者は我が知心、壁間の遺像を參拜して立てば、春禽啼き斷ふ縁松

- ① 聖德太子の開基、天台宗。
- ② 西風霜葉溪山に滿つ、是れが一線路也。
- ③ 端友、孟子離婁下に「尹公他は端人なり、其友を取る必ず論し」と、端は正也。
- ④ 經年別るとは、別れてより幾年を経過すの意。
- ⑤ 昔人云々は、華法師の不遜論に出づ、おまいさんも變つたが、おいらも變つたよ。
- ⑥ 向陽寺は伊勢にあり、江州より伊勢に遊び、此作ありしなり。



の陰。

鳴海の浦。

幾人か東に去り又西に還る、潮は沙頭に滿ちて行路難む、<sup>①</sup>截流の那一句を會得せば、何ぞ妨げん海門關を抹過することを。

偶作。

即心即佛は鏡裡の像、非心非佛は火中の水、雨過雲開いて關に依つて眺めば、<sup>②</sup>遠山無數碧層々。平生渾て玄談を愛せず、多懶須ふるところは唯だ<sup>③</sup>黒甜、老鼠偷かに牀脚を咬んで響く、日は疎竹を穿つて西齋を照す。

知足禪者に與ふ。

如何なるか是れ<sup>④</sup>佛即心是、梅山の梅子熟すること多時、苦風酸雨村烟斷ふ、日暮れて行人路岐に迷ふ。

<sup>⑤</sup>圭巖方書記に寄す。(時に園林寺に住す)

吾兄歸隱す舊園林、衰朽猶ほ居す雲壑の深きに、又是れ天寒歳こゝに暮る、爐を擁し雪を聽いて知心を憶ふ。

相陽の瑞侍者、山中を迂訪して、款話すること一宵、厥の志嘉

① 鳴海、尾州。

② 截流、盤門に三句あり、截斷衆流の句、函蓋乾坤の句、隨波逐浪の句。

③ 黒甜、支那の北方の人は、並睡を黒甜と云ふ。

④ 二句大梅禪師の因縁、入梅時分の作也。

⑤ 舊注、永安彌天和尙に圭巖方庵主の語下文あり、云ふ、松源の遠裔、大應の傳云々、想ふに此人ならんと。

すべし、且つ曰く、「故里に還つて、先師の靈塔を省觀せんと欲す、<sup>①</sup>廬はくは一偶を得て、以て途中の警策とせんのみ」と、余老いたり、平仄を辨せざること久し、然れども懇求して已まず、卒に筆を迅らして之に贈ると云ふ。  
<sup>②</sup>潭北湘南客夢驚く、一筇千里歸程を問ふ、誰か知らん綠水青山の外、限りなきの風光畫けども成らず。

西明寺の壁に書す。

去春此の地に花を尋ねて到る、今日又看る黃葉の秋、<sup>③</sup>嶺上の白雲凝つて動かす、自ら慚づ衰朽の閑遊を好むを。

休耕庵。

閑田一片山前にあり、來相抛ち來る三十年、只だ松花を採つて午飯に充つ、煙蘿深きところ扉を掩うて眠る。

村上人に示す。

道人來つて我が柴門を叩く、參禪の旨要を把つて論せんと欲す、怪むなかれ山僧が口を開くに懶さを、<sup>④</sup>老鶯啼斷す落花の村。

辛卯の歲口占。

① 潭北は響湖の北、湘南は相陽を寓す、忠國師傷に、湘の南、潭の北、中に黃金あり、一國に充つとあり。

② 大慈山西明寺は、永源を去ること二里にあり。

③ 白雲の沈靜を以て、自己の忽忙に影帶す。

④ 辛卯、觀應二年、師六十二歳、權正行南都に勤王し、尊氏直義と相争ひ、天下寧日なし。



四海の煙塵は幾日か收まらん、山林朝市盡く戈矛、昨宵の一夢金にも換へがたし、聊か無何郷裡に入つて遊ぶ。

古靈山に遊ぶ。

爛却す靈山の古蘭若、春來尙ほ自ら遊人あり、二千年遠岩前の樹、花は頭陀を引いて笑轉た新たなり。

達禪者の少林に之いて、祖を禮するに贈る。

大道本通達、心をもつて安を覓むるをやめよ、老胡肉猶ほ暖かなり、嵩巖天に倚つて寒し。

謙侍者蠟燭を惠まるゝを謝するの韻。

白雲青嶂石溪の邊、惜むべし長年戸を掩うて禪するを、文武の火光高きこと萬丈、君に憑つて一燈の傳はるを看んと要す。

光知客の韻に和す。

客來つて我が爲めに花偈を投ず、字々珠の細くにして宗眼高し、萬別干差供に截斷、且つ驚く句裡に吹毛あるを。

戊戌の秋、初めて馬郡の如意寺に投宿す、擅那明海、一見故の如く、

①無何、無何有辯なり、有無を離れて有無に打乗つた場合

②斯かる境界も何ぞある無からんやである、禪師除夜にぐつすり寐込まれしと見ゆ。

③古靈山の寺は敗毀せり。

④世尊靈山會上にあつて、花を指して衆に示す、是の時衆皆默然たり、唯迦葉尊者破顏微笑す。

⑤老胡は達磨、老胡肉猶暖かなりは、達磨者に贈す。

⑥謙侍者、夢窓下の人。

⑦文武の火、無準開爐上堂に、「初冬の時節又相催す、清々たる諸方爐竈開く、獨り徑山文武の火あり、知らず幾人かを爛却す」と、義堂曰く「無準徑

掌を拍つて清談す、秋宵猶ほ短し、仍つて一偈を留めて去る、他日之を取つて見れば、則ち余に對すると同じからん。

馬村の信士明海と號す、家中にありと雖も出家に勝れり、只だ道情を堅密にし去らしめば、那ぞ憂へん鐵樹の花を開かざるを。

翼姪の石塔の客居を訪ふに與ふ。

道人雪を踏んで寓舎を問ふ、月は寒窓を照して坐して牀に對す、瓦鼎に茶を煮て春一盞、豈政老の橘皮湯に同じからんや。

定巖の一侍者、余に於て宗黨の瓜葛なり、遠く山中に來つて、相共に苦を攻め淡を食つて、屢々居諸を閱す、酷だ道義の篤きを見る、今朝忽ち告辭して、覺雄師翁の舊隱に歸る、余が殘齡

既に桑榆に迫る、恐らくは復た會見の日なからん、老懷之が爲めに悽愴するのみ、因つて俚語を擲べて、以て其の行を壯にすと云ふ。

三年首を聚む空巖の下、未だ腸を傾け亦肝を瀝るに暇あらず、此の地須らく留むべし、末後の句、歸り來つて爲めに間へ屋頭の山。

山に住する十八年、兩たび同錄に遺ふ、故に文武の火と云ふ。

①吹毛、刃上に毛を吹きかくれば、其毛自ら斷つ、之を吹毛劍と云ふ、衲僧の一言は、人囁るれば人を斬り、馬囁れば馬を斬る、光侍者の光より吹毛劍を呼ぶ。

②戊戌、延文三年にして、和尙六十九歳。

③馬郡、上野の群馬郡。

④是れ一番寒骨に徹せずんば、争で梅花傲骨の清きを知らん。

⑤石塔客居、紀年錄に、延文四年師七十歳、江州に來つて石塔教寺に寓止すと、蓋し當時の作。

⑥政老の橘皮湯、餘杭の政禪師、好んで月を飯ぶ、九峰の韻、門下に客とし、常に之を笑ふ、詎一夕將に臥せんとす、禪師



●天關老兄、山中に來つて、一夏道聚して、日夕相共に逍遙す、時あつて懷を論じて、結角羅紋の處に至つて、彼此手を舉げて搖曳するのみ、今秋涼を趁ふて舊隱に歸るを告げて、佳什一篇を示さる、韻に依つて以て贈ると云ふ。

天涯海角を蹈躡して還る、茅を誅して偶々此の幽閑を得たり、白雲は實に是れ無心の友、因つて憶ふ古人、半間を分ちしことを。

老拙一生幻影を山色水聲の中に寄す、邇來古江の飯高山下を經由す、林溪幽邃にして頗る野情に愜ふ、因つて室數椽を築いて、安眠燕坐す、只だ此に居て殘喘の盡るを俟つを圖るのみ、旋、空閑を愛樂するの道流あつて、憶々として沓齋し、松根石上に茅を誅して散處す、蓋し物は類を以て聚る、理の然らしむる所以か、關西の薰聞叟も亦其の一也、夫人となり、爽拔精緻、孜孜として道の爲にす、眞に佳弟子なり、ある時從容として語つて曰く、「昔し親を辭し郷を離るゝの日、自ら謂へらく、吾れ早に大方に徂いて撥草瞻風し、良道善友に、<sup>①</sup>として晨夕咨參し、己事を究

人をして船を召さしむ、船思へらく、又月を見せしむるか、と、響韻して至る、禪師曰く、明月皓々たり、幾人か之に對せん、船唯々するのみ、時に船帆を切に藥石を思ふ、而も久しうて楊皮湯一盃あるのみ、船大に困す。(芥間錄)

①瓜葛は姻戚と云ふが如し、瓜葛は蔓延相及ぶ、故に云爾。

②居諸は日月なり、無理な故事にして、詩經の柏舟に日居月諸の句あり、居諸の二字は語助にて、日や月やと讀む。

③覺雄、大覺の法嗣、無障圓範の證號、桑榆、日の入る處に桑榆の二木あり、故に日没を桑榆と云ふ。

④末旨句、寂室和尚の末後句ならん。

⑤天關老兄、瀘州多藝の莊、安久の郷、庄福の開山。(古抄)

⑥結角羅紋、應庵錄に、結角羅

明して、父母劬勞の恩に報じ、佛祖覆蔭の德に酬ひんとす、幸に名蓋に掛錫するを獲て、荏苒として茲に十霜なり、同じく伏臘を閱するもの五七百衆に下らず、其の一人を擇んで、將て言行の師となさんと要するに届つては、何ぞ止だ波を撥つて火を求るが若きのみならんや、凡そ見聞に屬するものは、唯だ菩提の種子を焦敗するのみにあらず、殆んど輪回の業根を滋潤すべし、深く知る、今時一日も出で、衆に隨はゞ、萬劫にも利を己に失せんこと必せり、因つて憶ふ、古人法席全盛の時すら、尙ほ名跡の累を逃れて、弗茨石室果食洞飲し、終身世と遯如たり、嘗て僧となつては須らく是れ巖谷に居すべしと聞く、又、柳標横に擔つて人を顧みず、直に千峰萬峰に入り去ると云ふ、吾れ今忝く隱哲の勝軌を攀ち、衣を拂つて遠引し、永く雲山の深うして更に深き處に歸せんとす、乃ち竊に自ら誓ふ、寧ろ身をもつて火坑に投す可くとも、復び脚叢林の間に跨らす、寧ろ荒藪の下に窮死すべくとも、搢紳豪富の門に謁せず、寧ろ枉げて斷舌の火に遺ふべくとも、

故に至つて游及磅礴、大自在を得」とあり、按ずるに、結角は牛の角と角とを結び合はすの意ならん、羅紋は綾羅の紋にて、極めて微細のものなり。搖曳は、左右前後に搖すなり。

①半間、廬山芝庵主の偈に、千峰頂上一間の屋、老僧半間雲半間。言は一間の家を分つて、半分は雲のやどり場、半分は自分のれどころとす。

②孜孜、汲々として勤めてやまざるなり。

③伏臘は、冬夏なり。

④僧となつては云々、政黃牛の詩なり、昨日曾て今日を將て期す、門を出でて杖に倚つて又思惟す、僧となつては須らく巖石に居すべし、國士蓬中太だ宜しからず」と。

⑤柳標横に擔云々、趙州の法嗣、嚴陽尊者の頌なり。



未だ悟らすんば安りに般若を談せじ」と。予其の詞の至當痛のなるを聽いて、覺えず涕下つて、嘉嘆すること之を久しうす、仍つて筆を迅せて記取し、系るに二十八言を以て贈ると云ふ。

西山亮去つて唯だ幽谷、南嶽の瓊亡じて空しく白雲、清標高格を追慕するもの、又巖下に來つて獨り君を尋ねん。

康安辛丑に、余老を江の飯高山下に投ず、時に霜林の果侍者、京師より來り、同じく枯淡を守つて春を経て冬に抵る、余他の天資絶倫にして聰明のために惑されず、致子兀々として斯の道斯れ勤めて、敢て斯須少間も、虚しく捨つる底の工夫なきことを愛す、一夜爐を擁して閑談の次で、語けて曰く、「吾、衆に陪するの日、古書を嗜好し、幾んど寢を廢し餐を忘す、忽ちに自ら省することあり、學解機智は、動もすれば、即ち無明を長じ、我見を増し、殆んど聲利を求むるの基本となる、寧ろ生死の根株に非ざらんや。如かず、元字脚を以て心上に留めず、甘じて百不會不知底の漢となつて、歩を退けて己に就き、悟を以て期と爲さんに

南北朝時代は、丁度漢籍の後漢時代と同じで、禪宗の全盛期なり、而も此頃あり、時に感ずる杜老は花にも涙を瀧ぐとは、是れなり。

西山亮南嶽の瓊、前に出たり。霜林、下に説あり。

斯須はしばらくなり。

元字脚古くより、用ふる語なれども、明解なし、趙州和尚も、若し一箇の元字脚を記して心におかば、永劫に野狐精とならん、一休和尚も糞夜脚におく元字脚、是非人我一生喧びすしと頌せらる、蓋し元の字の脚は凡にして、机なり、臺なり、物を載するものなり、文字の葛藤を云ふ。

百不會百不知、眞言の熱靈者も、斯れが氣に入たと見え、百不知童子と號せられた。溪に菜葉を流す、潭州の龍山和尚也。(會元三)

は、亦思ふ、古人大法既に明かなるの後すら、尙ほ物迹の累を逃れ、或は一たび西山に入つて、永く復た返らず、或は溪に菜葉を流して、始めて人の爲めに知られ、或は世事悠々たり、山丘に如かず、藤蘿の下に臥して塊石を、頭に枕す等の句あり、吾が儕何人ぞや、只寢に首を聚めて打闕して、徒に衰葛を閱せんや、今より後、誓つて復た衆に入らず、隱哲の芳躅を追踐して、此の生を斷送せんのみ」と、余益、其の機見高妙にして、實に碌々たる餘子の遠ぶところにあらざるを嘆す、偶を爲つて以て贈ると云ふ。

我れ江山深き處を擇んで住す、溪頭の石徑雲の臻るを看る、稚龍雛鳳は英靈の子、殘月長庚は衰暮の身、共に茆茨を掩うて庭雪を積み、旋や椿棚を焼いて室春を生ず、言ふことなかれ法社今岑寂と、異日林丘自ら人あらん。

鏡庵主に贈る。

即心即佛太だ郎當、非心非佛絶商量、芒鞋踏破す關山の雪、處々の寒

世事悠々、南嶽瓊環和尚の歌なり。

打闕は、無駄言ふて日を送るなり、衰葛を閱すとは、年を過すなり、夏葛冬衰。

隱哲、西山亮、龍山和尚、彌瓊禪師等、斯くして此一生成へんと。

長庚は運暮の身に喩ふ、金星に兩名あり、朝は日に先つて出で、晩は日に後れて入る、朝の時は啓明と呼び、晩の時は長庚と名く、英靈の子は果侍者、衰暮の身は寂室禪師。

椿棚はそだ、木頭と訓す。郎當は俗語の零落の意、玄宗、藤山の亂に蜀に幸す、黃幡綽に問うて曰く、「車上の鈴聲頗る人の言語に似たり」と。對へて曰く、「三郎郎當、三郎郎當と言ふに似たり」と。黃幡綽は滑稽の士なり、玄宗の弄臣。郎當又老倒にも、潦倒に



梅鼻を撲つて香し。

靈叟和尚の韻に和す。

丘嶽の襟懷 氷雪の面、庸流は世に満ちて斯の賢少なり、憐むべし虚しく光陰を度り了ることを、高標を見ざることも又十年。

芝巖書記、累に山中に枉顧せらる、道義を忘れざるを見るに足れり、況んや亦惠むに佳什を以てするをや、唱歎已ます、其の續貂を愧ちて、敢て韻尾を攀ぢず、別に小偈を寫して奉酬す、切に人に出し示すなかれ、只だ前頭に將ち去つて、窓に糊し、或は是れが用心の勤めたるを知らん。

年老身窮して人に棄てらる、吾兄何事ぞ庵居を問ふ、行に臨んで語を求む説くべきなし、強ひて拳頭を擧て、贈車に當つ。

牧書記を送る。

夫子文章の印を掃除して、如來藏裡の珠を擊碎す、一策の春風 阿刺々、此の行那ぞ敢て脩途に涉らん。

水車。

も作る。

續貂は佳篇に次ぐに惡詩を以てする也、貂足らず狗尾續くは、西晉時代の故事なり。

② 韻を覆ふは、酒がめのめばりなり。

③ 夫子の文章、論語公冶長篇に出づ、學問も修行し、擊碎掃蕩。

④ 阿刺々、方語に急速也。

奔流光裡に機關立す、便ち曹溪の大法輪を轉す、器々相傳へて異味なし、群生一洗す 渴心の塵。

清居軒。

青山一抹紅塵を隔つ、蘿月松風能く隣を卜す、機境都來高く坐斷す、寥寥として見す門に到るの人。

成親の墓。

忠を含んで命を殞す最も憐むに堪へたり、恨を蒼苔に掩ふ二百年、無事來ることを休めよ 平氏の客、恐らくは泉下永宵の眠を驚かさん。

中秋偶作。

中庭人無くして月自ら明かなり、索々たる金風 衣袂に入る、旋落英の地に盈ちて香しきを拾ふ。冥鴻聲は遠し情何ぞ極まらん。

月は中秋に到つて最も 利害、人をして特地に閑情を惱ましむ、一年三百六十夜、輪卻す今宵半刻の明に。

山居。

名利を求めず貧を憂へず、隱處山深うして俗塵に遠さかる、歲晚天寒うして誰れか是れ友、梅花月を帯びて一枝新なり。

① 器々相傳、是れば、田舎にて言ふ、「銀鬼の喉」と云ふ水車ならん。  
② 渴心塵は、枯渴の病と云ふが如き。  
③ 清居軒、龍峰庵禮の間の額也。(舊注)  
④ 平氏の客、肥馬輕裘せる、平家のきんぢら也。  
⑤ 種、古得の切、衣前の襟也(舊注)、旋落は拾ひまはる也、落英は倒れたる菊の花、落の字、説多し。  
⑥ 利害、相反する字を、偏用して、利の字を取りしものならん、漢籍に此例多し、治亂を亂ると用ふるが如し、利は鳥の乾は大いに亨る、貞に利しの利の義にて、中秋月最も宜



丙午歳の試筆。

山中の氣象即辰新なり、<sup>①</sup>盡く是れ明心見性の人、添へ得たり満空に瑞雲を飄すを、梅は開く五葉一花の春。

一毫頭上に春容を發す、徧界靄然として和氣濃かなり、管するなかれ山僧が頭已に白きことを、曉來の雪は萬年の松を覆ふ。

金剛寺に宿す。

隣寺屢來遊す、通宵談未だ了せず、山村更鼓なし、窓白うして天の曉くるを覺ゆ。

耕月。

鐵牛を起ひ起して頻に鞭を著く、山前何れの處か是れ閑田、一犁雨は過ぐ千峰の外、玉兔輪を推して曉天を下る。<sup>②</sup>

無參。

當處に非を知つて放下して休す、何の箇の事の馳求すべきかあらん、南方丫角の小童子、空しく百城の煙水に向つて遊ぶ。

江月。

渺茫たる楚水空を拍つて流る、湖は錢塘を滅して夜收まらず、玉鑑光は寒し萬波の底、依前たり天上一輪の秋。

遁巖。

塵世蹤を逃れて、秦を避くるが如し、碧松崖下に孤貧を寄す、寥寥として鳥の花を含んで落すなし、許さず空生の來つて隣を卜するを。<sup>③</sup>

竹隱。

貞節と虚心とを憐むが爲めに、特地に茆を移して更に深きに入る、片帆を擲つて軽く一撃するを休めよ、閑聲恐らくは是れ叢林に落ちん。

竹堂。

憶ふ昔香巖の一撃し來ることを、六門長へに遠峯に對して開く、茫茫として葉を摘み枝を尋ぬる底、多くは是れ空しく關外より回る。

孤雲。

一片飄すこと無うして自在に飛ぶ、卷舒開合更に何にか依らん、笑ふ他の多くは是れ龍に従つて去ることを、獨り舊山の深き處に向つて歸る。

雪樵。

しと云ふ意。

①貞治五年、和尚七十七歳。盡く是れ明心見性の人、新年の御慶千里同風、明心見性の人とは不盡の妙味あり。

②金剛寺、蒲生郡日野の金剛寺、絶海中津の寺也。(舊註) 發願合計壹百一首。

③上の二句は耕を頌し、下の二句は月を頌す。

④二句疊の字を反説す、丫角は稚兒まげ也、丫角の小童子は善財を指す。

⑤華嚴會上に、善財童子、一百十城を歴て、五十三の善知識に參じて、無上菩提を得と、宋の佛國禪師五十三頌を賦して之を勸す、文殊指南圖善財也、續藏中に收む。

①上二句は江、下二句は江月。秦を避く云々、武陵桃源の人は、皆秦の無道を避くるの人也、(陶潛の桃花源記)。

②上二句は遁巖、下二句は巖也。空生、須菩提也、岩中に燕坐するとき、諸天花を雨らし贊嘆す、響實之を拈じて「空生巖畔花須藉」と頌せらる、今遁巖には、其體な巖々しき男は寄せ付けぬと。

③第二句隱。片帆云々、香巖擊竹を隱ふ也、閑聲云々の句、冷俊なり。

④六門、六根門境に對して開く、即堂の字。

⑤一片と云ひ、獨りと云ふ、是れ孤の字。



風空花を攪いて片々飛ぶ、<sup>①</sup>老盧斧を提げて柴扉を出づ、自ら知る徹骨寒來つて重きことを、無根樹子を擔取して歸る。

要翁。

三玄を把つて排列し去ることを休めよ、寧ろ至徳を以て家風に比せんや、是れ佗親切爲人の處、老いんたり矣西を指して還つて東となす。

別宗。

月を標す指頭邊を離ると雖も、是れ拈花微笑の禪にはあらず、聞くならく泥牛木馬に參じて、迦文の法派更に流傳すと。

悟山。

礙膺の物を除卻してより、地を抜く高風萬仞寒し、一點の迷雲飛び到らず、峰頭夜々月團々。

慧海。

一點の靈知定によつて發す、無邊の香水衆流を納る、<sup>②</sup>泥牛關つて洪波の裡に入り、高く吼ゆ珊瑚明月の秋。

堪叟。

面上の唾痕は雨點の如く、耳邊の惡語は雷轟に似たり、長年一種平懷し去る、添へ得たり眉毛の霜幾莖ぞ。

月翁。

廣寒宮殿の高に坐斷して、<sup>③</sup>天風鬢を吹いて半は霜毛、光萬象を呑んで邊表なし、烟々たる雙眸老いて益々豪なり。

柏翁。

千年の貞操松根に<sup>④</sup>伴ふ、蒼老の勢は龍の屈蟠するが如し、今日叢林梁棟の漢、看來れば盡く是れ我が兒孫。

本閑。

深く萬法を窮めて靈源に徹す、豈末流と日を同じうして論せんや、物外寥寥として常に獨坐す、任他地覆ひ復た天翻るを。

敬庵。

動靜常に居す慎肅の中、何人か這の家風を仰がざらんや、低頭獨坐す茹簷の下、百鳥蹤を潛めて春晝空し。

雲叟。

①老盧、六祖俗姓は盧氏、家貧にして樵採以て給す、宋の朱文公は破佛家であつたが、晩年に目を病んで盲となり、六祖の法寶壇經を聞き、嘆じて曰く、「六祖は眞の聖人なり」と。  
②第一句は悟、第二句は山。  
③香水は滌の名、華嚴經に華藏界中に大蓮華あり、其蓮華の中に香水海あり。  
④泥牛云々、潤山と雲師伯と、

俱に、龍山和尚を問ふ、和尚曰く、「兩箇の泥牛關つて海に入る、眞に今に至るまで消息を絶す」と。  
①一種平懷、信心銘に出づ、一種とは一粒種なり、平懷は坦蕩々と同じ、動靜寒温是非善惡のでこぼこの混した處を一種平懷と云ふ。  
②第二句翁の字。  
③邊表、邊は中邊の邊、表は表裡の表、儒教には邊幅の語あり。  
④松根に伴ふ、孔子曰く、「松柏の後凋を知る。是れ松の伴侶なり」。  
⑤如何なるか、是れ祖師四來意、趙州曰く、「庭前柏樹子、後來の兒孫、葉を摘み芽を摘み、天下を覆隆す」。  
⑥上二句本、下二句閑。  
⑦敬庵、是れは宋儒の學に淵源す、寂室和尚なども、既に宋學



舒卷無心にして轉た淡然、千峯萬壑幾か年を経たる、既に雨となつて龍に従ひ去ることを休む、自ら兒孫の垂れて天に布くあり。

寤翁。

措磨淨盡す 一靈臺、曠劫の古菱花正に開く、未生前の面目を照破して、雪眉掀卻して笑哈哈たり。

通叟。

萬法の根源都て達し了る、さもあらばあれ年老亦身閑なるを、卻つて千聖流傳底をもつて、兒孫に分付して高く關を掩ふ。

友山。

茫茫たる塵世知己少なり、眼界蕭條として秋よりも冷じ、渠儂が眞の伴侶を見んと要せば、千峰萬岳碧眸を凝す。

西峰。

五天獨り登えて勢巍然たり、高く壓す 東方の萬八千、寸歩移さず窮めて頂に到る、稍僧脚下是れ 通玄。

悅堂。

平生を慶快するは等閑にあらず、燈籠露柱笑つて顔を開く、誰か知る千古分明の意、大坐當軒風月寒し。

怡雲。

我が此の山中心悦適す、清奇冷淡舊相依る、欄に倚つて盡日 目を縦にするに堪へたり、卻つて怕る龍に従つて雨となつて飛ぶを。

懶庵。

獨り疎慵を逞しうして萬縁を謝す、柴門深く掩うて殘年を度る、人に對して猶ほ自ら口を開くことを忘る、怪むなけれ強ひて 拳を堅つるに無心なるを。

喝巖。

忽雷轟破す太虚空、 嶮布き危分る幾萬重ぞ、千里に風を聞いて驚いて舌を吐く、啼猿は尙ほ月明の中に在り。

月窓。

氷輪高く輾る碧天の秋、光虚耀に透つて 瀧氣流る、内外玲瓏として常に不夜、如何ぞ 睡彌猴を著得せん。

月屋。

國譯永源寂室和尚語錄 卷之一

に染指せられしは明かり、宋代理學の先生は、多く禪僧と議論を上下す、當時の語録紀談に多く其事を載す、故に禪籍を讀むもの、宋學を兼學するは勢の然らしむる處、故に日本宋學の最初を論ずれば、禪の渡來と同時に云ふも不可なきなり、玄惠桂庵は邦も末也。

① 第一句雲第二句雙。

② 一靈臺、唯一の眞心、莊子に出づ、古妻は鏡。

③ 第四句翁。

④ 五天は西の字。

⑤ 東方萬八千、法華の序品に、爾時佛眉間の白毫相光を放つて、東方萬八千界を照す。

⑥ 通玄、天台祖師、通玄峰に住す、頃あり、通玄峰頂是れ人間にあらず云々。

- ⑦ 欄に倚つて、雲の徂轍を見る。
- ⑧ 趙州一庵主に到り、問ふ「有りや、有りや」庵主拳頭を竖起す、なまくらな和尚よ。
- ⑨ 忽雷轟破す太虚空、どつしりした句なり、嶮布危分幾萬重は、巖の字、嶮危を幾千萬重に分布するなり。
- ⑩ 瀧氣は白色の氣、秋の色なり。
- ⑪ 睡彌猴、猿も目醒むれば、六



圓未圓の前眼 俗開す、茆茨變じて玉樓臺となる、縦ひ物外に超ゆる。南泉老も、許さず門を敲き戸を推し來ることぞ。

玉斧修し成す幾度の秋、瓊樓金殿類伴しうしがたし、直饒光境俱に亡する底も、争でか似かん且く門外に居して休せんには。

石室

嶺巖たる 函丈誰か能く入らん、戸牖堅頑にして蘇痕鎖す、碧眼嵩山に寒壁に面ひ、黃頭摩竭に空門を掩ふ。

無塵

倒に生鐵の秃苜帚を拈じて、驀忽に身を翻して一掃し來る、諸人を普請して脚下を看せしむ、閑々地上に纖埃を絶す。

月山

圓と未圓の前須らく眼を著くべし、屋頭の青山廣寒宮、若し光影 那邊より看ば、雲鎖し煙籠む千

萬峰。

桂輪高く掛つて碧天寛し、萬朶の峯巒玉一團、巖下の空生腸斷たんと欲す、孤猿 叫び落として五更寒し。

が多く書いてある。

是れば、一人に二偈を與へられしにあらず、二人に月屋を用ひられしなり、編集の時、一處に合せし迄也。

函丈、函は容也、丈を容るとは、四方一丈也、曲禮に出づ、蘇痕鎖すとは巧なり。

碧眼嵩山、達磨は之に向つてにらみあひなしてゐる。

黃頭摩竭、釋迦はこの中でしやちこばつて居る。

是れば、いかな輕わざ使でも出來ぬ藝當、衲僧の掃地の仕方なり。

那邊より見ば、こちらからあなたを見て居る様ではの意。

叫落、孤猿一聲月夜空し。

つの窓から頭をひよこしく出すが、睡て仕舞へば森としたものぢや、而し此月下の窓には睡れる猿も寄せつけないと、睡狸は傳燈六、中邑思禪師の章に出づ。  
南泉老、馬大師が、四堂百丈南泉と、月見をせられた、馬祖曰く、「正與麼の時如何ん、堂曰く、「正好供養、丈曰く、「正好修業、泉は拂袖して去る、馬祖曰く、「經は藏に入り、禪は海に歸す、唯だ普願のみあつて物外に超ゆ」と。  
玉斧修成、月の中に八萬三千の樓臺あり、之を修繕するに玉杵を用ふ(西陽雜俎)、此の西陽雜俎と云ふ本は、唐の段成式の著で、新條の奇怪の事



# 國譯永源寂室和尚語錄卷之二

大林。

森々として植立す閑淨樹、枝葉交加して歲月長し、恒河沙數の客を覆蔭して、炎天日として清凉ならざるはなし。

字山。

毫端を拈起して義炳然たり、孤峰峭峻にして勢天を凌ぐ、更に一點已前より看れば、未だ必ずしも須彌半邊に到らず。

順叟。

物と相逢ふて未だ曾て逆はず、流に隨ふを得る處且つ流に隨ふ、滿頭の白髮三千丈、餘算今年八十秋。

古巖。

今時に落ちず高く眼を著けよ、玲瓏八面碧崔嵬、空劫以前の事を知らんと欲せば、且く懸崖に向つて手を撒し來れ。

竺雲。

靈鷲峯頭、膚寸より興る、五天使ち見る影層々たるを、幾たびか雨となつて沙界を霑す、歸つて半間屋を分つの僧に伴ふ。

空極。

諸法は何を以て座とするや、十方立せず一微塵、是の心窮めて無心の地に至る、選佛場中及第の人。

竹澗。

一兩莖は斜に三四は曲る、當頭直に永く根源を截る、後來末學枝葉を論ず、昨夜前溪に月痕を撈す。

樵屋。

榮枯直下に一刀に斫る、擔取し歸り來る溪畔の家、買人に賣與するに人見えず、柴門高く掩うて煙霞に臥す。

斧を腰にして擔ひ歸る枯欄柴、茅廬只だ是れ溪に傍ふて棲む、盧郎常に入る新州の市、門は寒雲に掩うて日又西なり。

石澗。

① 高き須彌山も、字山の半分迄屆かぬ。  
 ② 第一第二順、第三第四叟、流に隨ふ云々、臨濟錄に、流に隨つて性を認得すれば、喜も無く又憂もなし。  
 ③ 第一古、第二巖、第三古、第四巖。

④ 膚寸、手のひらの厚さを膚と云ひ、指を按ずるなすと云ふ。  
 (公羊傳注)  
 ⑤ 半間、衲僧半間雲半間の語あり、一間の腰掛を、半分は自分に半分は雲に掛けさすと云ふことなり。  
 ⑥ 選佛場、禪堂なり。  
 ⑦ 六祖、其の先は范陽の人、其の父新州に左遷せられて、茲に住す、新州は今の廣東に近く、當時は實に邊鄙にて、中國の人は猿の棲家かと思ふ程の處也、故に五祖、六祖を擲するに、嶺南の人に佛法なしと申さる。



最も 碓磌の處平かにして砥の如し、下に寒溪あつて徹底清し、大小山中の閑佛法、流傳し將ち去つて 大忙生。

傑堂。

門風挺出す 萬人頭、寂寞たり庭前 丈草の秋、正に是れ衆中の 尊貴墮、燈籠露柱笑休み難し。

隱溪。

光を頼み彩を鈍る幾春秋、淵底に苒を誅して頭を蓋卻す、恐くは是れ世人の住處を知らんことを、菜葉をして 放 に流に隨はしむるなかれ。

默耕。

口未だ開かざる前に不二を談す、山河大地怒雷轟く、鐵牛鞭起す一犁の雨、祖父の田園秋已に成る。

玉巖。

一片瑕無うして萬山を耀かす、玲瓏八面又高寒、連城の至寶得難きにあらす、便ち請ふ懸崖に手を撒して看よ。

愚隱。

才を棄て智を混じて癡頑に返る、拙跡留むるに懶し塵世の間、常祖茅を移して深處に去り、亮公杖を拽いて西山に入る。

徹叟。

百而千重 列祖の關、一時拶透は難しとせず、而今年老ひて餘事なし、素髮垂々として心自ら閑なり。

茂林。

深沈鬱密として影敷榮、梁棟の奇材集めて大成す、因つて憶ふ 雄峯に叢席を翫めしことを、徧界を蔭涼して古風清し。

月舟。

桂輪高く拄つて碧天清し、萬頃の煙波一葉横ふ、光境俱に忘れて忘も亦立せず、蓬窓靜かに坐す夜三更。

休庵。

古德茅を縛す泉石の邊、僧を見て尙ほ自ら 空拳を擧つ、如かじ一歌に一切歇し、門煙蘿に掩うて盡日眠らんには。

西溪。

萬里の 岷峨碧流を夾む、急なることは劈箭の如くにして源由あり、回巖亂石欄れども住らす、

①素、繪事業に後すの素、白也。  
②雄峰、大雄峰なり、百丈和尚  
技に住す、百丈叢規を定めて  
禪道完し、白雲端和尚此功績  
を感謝し、達磨に配祭す。  
③趙州の二庵主、即庵の字。  
④岷峨は蜀にあり、支那の西方  
にあり、又峨眉山と云ふ。



直に東溟に到つて方に始めて休す。

大年。

試に壽域を將つて乾坤に配す、無始無終寧ろ元を紀せんや、算へて威音より彌勒に至るまで、聖凡は是れ我が小兒孫。

一洞。

源脈何ぞ曾て二三に落ちん、支派を將つて多談に渉ること莫れ、誰か知らん常流に混せざる底、涓滴全く無うして湛へて藍に似たり。

一叟。

湖海に横行して孤風を逞しうす、今古應に無かるべし第二翁、試に生來年幾許ぞと問へば、眸を擡げて笑つて指す太虚空。

松嶽。

蒼翠豈惟だ千萬年ならんや、風濤激起す 祝融巔、大夫の名は貞操を汚さず、諸峯を壓斷して高くと天に挿じ。

不立。

誰か論せん是句と非句とを、一切剷除して當處に空す、鴈字行を成す秋日の暮れ、端なく玷辱す

我が宗風。

祖庭。

少室門前平坦の地、千年徒に自ら莓苔を長す、一方の明月光雪の如し、斷臂の師僧殊に未だ來らす。

華嶺。

五葉開く時萬木香し、此の山領し得たり幾春光、誰か能く拈起し誰か微笑す、絶頂寥々として又夕陽。

靜中。

一室寥々として常に獨坐す、渾て外事の閑情を動するなし、有る時は截らんと欲す窓前の竹。耳は亂る風枝雨葉の聲。

直翁。

人を指して性を見せしむるも還つて迂曲、特地に如何が父の羊を證す。争でか似かん三家村裡の漢、垂々たる霜鬢耕桑を事とせんには。

愚默。

百不能の時心已に灰す、飢渇渴飲癡狀を放にす、然も娘生の口を杜絶すと雖も、誰か聽かん

①耳は亂る云々、金屑賣しと雖も、眼に落ちて塵となる。  
②葉公子高が、孔子に自分の郷里には、正直者あり、父が羊をぬすみしを、子が訴へ出たと話した。  
③娘生、娘は母なり。



其の聲怒雷を轟かすを。

歸海。

須らく知るべし。格物本無功なるを、衆水は皆奔る渤海の中、當日馬師  
御か月を翫ぶ、大雄峰頂浪空に瀾る。

曉山。

玉兔已に過ぐ西嶺の外、金鳥初めて上る最高峰、霜天曙けなんと欲して  
唯だ寒色、萬嶽千巖一目の中。

實堂。

餘の二は眞にあらす唯だ一事のみ、滿軒の風月意分明、舉揚已に得た  
り虚偽なきことを、管せず庭前荒草の生するを。

覺海。

大圓滿の果活として無邊、自ら金波の湧いて天を拍つあり、始本雙び  
忘して忘も立せず、珊瑚枝上月嬋娟。

藏叟。

恰も似たり摩尼の寶光を箱ひに、身を退けて深く隠る幾青黃ぞ、教佗魔佛の窺ひ見難きを、白鬚

を吹いて夕陽に坐す。

雲澗。

溪邊に歸り去つて幽石を抱く、當初岫を出で、行きしを悔ゆるに似たり、此より凝然として、閑不  
微、さもあらばあれ流水の太忙生。

日峰。

金鳥飛び上る碧層巖、鳴谷咸池曙けなんと欲するの天、刹々塵々照臨  
の下、孤高峭峻是れ通立。

塵沙刹界照臨圓かなり、屹立す。扶桑鳴谷の邊、脚下何人か黒うして  
漆の如くなる、且く來つて此の最高巖に登れ。

梅山。

昨夜一枝雪を凌いで開く、千巖萬岳春の回るを見る、心即是佛の旨に參  
せんと欲せば、最高峯に向つて歩を進め來れ。

竹叟。

心虚に體勁うして直くして還た清し、叢林に獨立して老成と稱す、且喜すらくは此君の氣節を増  
すことを、龍孫龍子歳を遂うて生す。

① 格物本無功、格物の一物一物に就いて、其理を極むるなり、其れは勞して功なしと、朱注の大學でも讀んで居られたらしい。

② 馬師月を翫ぶ、禪は海に歸すの語あり、此海から大雄峯と呼び起せるなり、大雄峯は惠海禪師の住所、此處禪師の三字を識らすんば殆んど通じ難し。

③ 餘の二は眞にあらす、法華に出づ。

④ 始本、始覺本覺、本覺は體、始覺は用。

① 閑不微、閑の極なり。

② 鳴谷咸池、淮南子に「日は鳴谷に出で、咸池に浴す。」

③ 扶桑、鳴谷の中にある。

④ 暗くて困まれば、夜明をまて。

⑤ 第一句竹、第二句叟。

⑥ 龍子龍孫、竹子を龍に喩ふるは、筍の尖の方の房の下る處は龍の頭なり、勢よくのびた處は龍の體に似たり。



霜山。

青冥露結んで寒威を布く、千林を染め盡して錦機を暈す、唯り孤峰のみあつて白うして雪の如し、  
曉天雲静かにして峭嶮々。

春谷。

雲は桃花をこめて洞口に横はる、呼ぶがごとく答ふるがごとし亂騷の聲、  
風光長く是れ二三月、  
卻つて笑ふ廬山錦繡の名。

旨庵。

宗訣を得て後便ち歸り去る、石室茅茨三十年、此の意人の來つて問取す  
るなし、寥々として戸を掩ふ緑蘿煙。

萬山。

等閑に指を倒して算へ來つて看ば、疊嶂重巒 十千に歸す、數量に涉らす高く眼を著くれば、通  
玄峰頂青天を挿む。

方外。

本色の禪僧眞の住處、上下四維の間を遠離す、憐むに堪へたり歷代傳燈の祖、西天東土を出得する  
こと難し。

釣月。

垂絲千尺扁舟を泛ぶ、意は金鱗にあり幾度の秋ぞ、今夜把竿の手を空しうせず、玉蟾影動いて鈎頭  
に上る。

桃隱。

煙霞鎖斷して洞中空し、獨り愛す花開いて爛熳として紅なることを、許さず 秦を避る人の此に到  
ることを、夕陽流水幾春風ぞ。

松峰。

風千年の蒼翠を攪いて動かす、山頭日夜驚濤を激す、凡木の枝葉を交ふ  
るを嫌ふに似て、立處に雲を凌いで萬仞高し。

自閑。

是れ他によつて方に現成するにあらず、從來已事太だ分明、山堂夜静にして聊か聽を傾く、雨後の  
前溪聲を添へ得たり。

徹叟。

身を翻して透得す祖師の關、百市千重 也是れ閑なり、老去つて渾て些子の力なし、筇によりて獨  
立して青山を看る。

① 避秦の人云々、あちらへ避け、  
こちらへ逃げまはる様な漢  
は、來ることならぬ、寄せつ  
けぬぞ。

② 風光長く是れ二三月、是れは  
武陵桃源の時候也、廬山錦繡、  
廬山に錦繡谷あり。  
③ 十千、萬なり、萬は數の終り  
なり。



無寫。

佛語猶は嫌ふ耳邊に到るを、等閑に<sup>①</sup>眇視す祖師の禪、渾て一法の吾意に投するなし、只青山に對して枕を高うして眠る。

石叟。

人に對して<sup>②</sup>點頭の心あるに似たり、苔髮霜を垂れて歲月深し、<sup>③</sup>歷劫應に消する日なかるべし、兒孫大小山林に滿つ。

端堂。

門庭徑直にして恰も弦の如し、本是れ梁方又棟圓、古意分明なり人<sup>④</sup>薦めず、滿軒の風月轉た蕭然。

仙巖。

閑名留め得たり<sup>⑤</sup>赤松子、陳跡徒に存す<sup>⑥</sup>黃石公、猿蒼崖に叫んで秋夜半ばなり、解空は須らく坐すべし月明の中。

明海。

心月孤圓にして影流れんと欲す、金波自ら湧いて幾時か休せん、さもあらばあれ靈源を味まささる底、直に見る珊瑚枝上の秋。

① 眇視、さげすむなり、孟子に出づ。

② 道生法師、石に對して涅槃經を講ず、石皆點頭。(佛祖通載七)

③ 歷劫云々、四十里四方の石も、一劫たてば、仙人の羽で磨り消える。

④ 薦は薦得なり。

⑤ 赤松子、黃初平、松峯を服すること五萬日、遂に仙を得て赤松子と號す。

⑥ 黃石公、濟北穀城山下の黃石となりし仙人張良に三略を與へし人也。

絶照。(首者)

工夫日用光<sup>①</sup>影を弄せば、歷劫何ぞ曾て道の成するを得ん、臺に當る閑古鏡を打破して、本來の面目自ら分明。

高庵。

我が箇の芥を誅するの地を知らんと欲せば、三十三天も下方にあり、佛祖仰望するに由なき處、如何ぞ百鳥去つて忙忙たる。

月峰。

靈山<sup>②</sup>の話と曹溪の指と、只だ平常光影邊に在り、峭々魏々高く眼を著くれば、通玄孤頂一輪圓かなり。

瑞巖。

靈芝生する處玉玲瓏、絶壁懸崖半空を壓す、昨夜孤猿明月に叫ぶ、聲々都て呼ぶ<sup>③</sup>主人公。

聞翁。

聲を宇宙に飛ばして雷の奔るに似たり、耳を側つる人皆膽魂を喪す、雙鬢霜寒うして秋已に老ふ、盡閻浮界是れ兒孫。

① 光影は、かげばうしなり。

② 玄沙曰く、靈山の付囑は、月を話するが如く、曹溪の豎拂は、月を指すが如し。(傳燈十八)

③ 瑞岩和尚日々主人公と呼び、又自ら應諾す、故に此處瑞巖の號に主人公を使用す。



太原。

昔年箇の師僧の在るあり、法身を講じ罷んで我が家に歸る、畫角風前唯だ一曲、寒梅落盡す幾枝の花。

信庵。

諸の善法を養ふ道の源、此に居して長年獨り門を掩ふ、春過ぎて空山人到らず、紫藤花落ちて離根を擁す。

默齋。

毗耶口を杜ちて古風存す、晝日寥々として獨り門を掩ふ、箇の事未だ曾て輕しく漏洩せず、溪山簷外已に多言。

天叟。

碧霄漢は是れ我が生縁、俯しては看る三千と大千と、烏兔輪を推して脚下を過ぐ、眉毛白盡して年を知らず。

鐵面。

堅頑露出す、六州の邊、妙密の鉗鎚打得して全し、鼻孔眼睛本來具す、口を開いて笑はんと擬せば臘年を待て。

①太原學上座、光孝寺に在つて、涅槃經を講じ、法身の妙理を談す、一禪者あり、覺えず失笑す、學講了の後、發奮死坐、五更に至り、鼓角の聲を聞いて、忽然契悟す。(會元七)

②諸云々、信と云ふものは、疑惑を除いて、諸の善法を養ひ、又大道の根源となるもの、(華嚴經)信は道源功徳の母なり。

③毗耶、維摩詰の住所。

④烏兔、日月也。

⑤六州の邊、羅紹威、魏博の牙兵の驍甚だしきを以て、盡く之を殺し、遂に朱温の爲めに割せらる、乃ち嘆じて曰く六

重雲。

百千萬片一片となる、那ぞ得ん輕々に軸を出で、飛ぶことを、牛峰を鎖斷して閑不徹、老融は須らく半間の扉を掩ふべし。

潭月。

古今誰か蒼龍の窟に下る、湛々として藍の如く萬丈深し、唯だ寒蟬のみあつて光皎潔、夜來舊によつて波心に落つ。

昨は防州の騰上人のために、所居の廬に扁して、幽棲と云ふ、復た來つて別稱を安せんと請ふ、仍つて高庵と號す、乃ち偈を作つて贈ると云ふ。

萬象森羅の上に獨居して、下視す諸方門戸の低きを、拳頭を豎起して春又過ぐ、人の此に來つて幽棲を問ふなし。

布衲。

曹溪の屈胸は是れ争の端、鷲嶺の金襴傳ふること卻つて難し、我が箇の麻衣些子に較れり、年々補綴して寒を遮るを得たり。

世に布衲と謂ふは、乃ち直綴なり、內衣の稱のごとくにして、全く

州四十三縣の嶺を築めて、一箇の窟を鑿る。

②老融、牛頭山の法融禪師、牛間、前に出づ。

③君が爲めに農たびか蒼龍窟に下る。鸞賣。

④布衲、是れ亦號頭ならん、然れども一種の號頭なり。

⑤屈胸、達磨より傳ふ處の法衣の名、兒孫の者の争ひの端とは五祖傳法の時の事也。

⑥金襴、靈山にて經迦より迦葉に傳ふる處、是れば傳ふこと中々困難じや。

⑦些子に較れりとは、少しばかりましと云ふ事なり、食へもせぬ飯の館ころ餅より、馬鈴薯めしの方がよいぞ。

⑧此解は布衲の題にて袈裟を誅じたが世間では布衲は衣の事じやと難するであらうが、さうでない、古人も袈裟の事を麻衲と使ふて居ると、辨せら



袈裟の類に非ざるなり、余が偶意、大いに差誤するに似たり、但し予大元至治辛酉の春、南嶽に遊ぶの次、草衣寺にいたる、寺の後に岩洞ありて、極めて幽邃なり、寺記を讀むに、云く、「蜀の僧字は奉初、馬祖に嗣ぐ、嘗て草を編んで衣となし、是に隱る、因つて草衣岩と號す、今は寺となりて、草衣寺と名く、云々。」余廊廡に經行して、壁間を回觀するに、古今の名賢宿衲の留題甚だ多し、獨り張一無盡の一聯、絶唱と稱す、云く、「古人一悟して便ち心安し、計較何ぞ曾て萬百般ならん、草衣衣下の事を識得せば、任他麻衲と金襴と。」余此の詩を引いて、以て證となすのみ。

高巖。

巖あり巖あり青霄を摩す、玲瓏八面轉た岩。曉、煙霞猶ほ自ら飛で到らす。烏兔還つて疑ふ半腰を遶るか。古今仰觀するに堪へたり、若何ぞ躋攀を容さん、佛祖も崖を望んで退き、空生も坐を得ること難し、道人素より衝天の志を具す、我れ斯の巖を取つて以て字となす、名や實や正に抗衡し、乾や坤や隣比すること少なり、世を擧つて都て高尚の情なく、區

- ① 解は猶ほ名の如し。
- ② 張無盡は備者では、森賊の如く罵る先生もあれども、宗眼明白の人であつた、當時のおつさん方が、無茶におだて上げたから、よい氣になつて、雲居の羅漢を氣取つた様子があつた、もちとぶんなぐつてやると、よかつたのじや。
- ③ 是れは成程最な事が歌ふてある、印可證明にして、傳法衣にして、唯だ信を表するまで、眼目は草衣衣下の一著子なり、して見れば、外のものは麻製装でも金襴でも、どちらでもよし。
- ④ 是亦號頌の古體也。
- ⑤ 岩曉は山の高き貌也、烏兔は日月也。
- ⑥ 空生は、須菩提尊者なり、空生岩畔に坐すれば、天花亂墜す。

々として日に下流を逐うて行く、早晚か歸つて幽鳥の花を含んで落すを看ん、誰と與に同じく孤猿月に叫ぶの聲を聽かん。

星攀山の僧舎に遊ぶ。

千峰嶺 醉として一目に收む、臂を引いて戯に斗牛を攀ちて立つ、徐歩す煙嵐紫翠の間、逶迤として石磴零葉を躡む、老屋空山秋日寒く、土塔の積雨苔錢疊む、因つて思ふ佛を呑んで雲霄を視ることを、誰か復た茹を移して深處に入らん、此の道今人渾て蔑如たり、風松吟じ罷んで草露泣く、歲晚幽棲意自ら容す、且つ猿鳥を呼んで爲めに相揖す。

獨り東谷の知足庵に遊ぶ、時に濟北巖病を下庵に養ふ、遂に其の壁間に題して去る。

襟を披き來つて禪扉を扣き、煙霞の痼疾を問はんと欲す、孤雲は袖を出で、歸らず、只だ松風のみあつて瑟瑟たり。

感侍者、山庵に來つて道聚し、同じく枯淡を守る、夏罷んで別を告げ、龜峰の桂光庵に歸る、岐に臨んで偈を求む、卒に長句を成し、以て贈ると云ふ。

- ① 嶺は高峻の貌、第一句は、星攀山の眺望。
- ② 逶迤はそろそろ行くこと也。
- ③ 佛を呑云々、實誌公、南岳思禪師に傳語して曰く、何ぞ山を下つて、衆生を教化せざる、目に雲漢を視て、何をかなすと、思曰く、三世の諸佛、我に一口に呑盡せらる、更に何の處に、衆生の化すべきあらん、(會元)此處言は我れは南岳思公の高躡を思ひ塵化に意なしと。
- ④ 容は、容雍の意、のんびりするなり、猿鳥に揖するは、交際を願ふ也。
- ⑤ 濟北巖、上巻に出づ、天寶英拔にして、古衲の風あり、實に忘年の友子云々。
- ⑥ 煙霞痼疾とは、山水に放浪するを云ふ、又之に對して泉石の膏肓の語あり、言は北巖の風流を訪訊せんと思ひしと。



僻居窮谷を卜し、石をもつて牀脚を支ふ、道人何より來る、且喜すらくは幽獨に伴ふことを、三尺茅簷の下、首を聚めて一夏を度る、柴を討ぬると蔬を挑ぐると、安禪何の暇かあらん、氣質群ならず又妙年、它時九層の天に平歩し、於菟の頭上に鱗角を戴かん、俄然として我れに別れて巖烟を下る、布毛吹起する處、侍者便ち悟り去る、一等に業識を弄して、茫々として本據なし、此の事若んか論せん、笑倒す鐵崑崙、争でか如かん送つて松門の外に出で、山を看水を看て雨つながら忘言せんには、草鞋跟底清風生ず、行け行け臂を掉つて等閑に行け、行いて中秋三五の夕に到らば、龜峰の孤頂柱光明かならん。

珍上人の常州に之いて、復庵和尚に見ゆるを送る。

巖桂清香飄る、西颯吹いて颯々たり、江天雁聲寒く、關山古月耀く、臨濟德山も頭を縮むるに堪へたり、釋迦彌勒も且く舌を結ぶ、描すれども就らず畫けども成らず。知んぬ他は畢竟是れ何物ぞ之に迷ふものは徒らに石上に蓮花を覓むるに勞し、之を悟るものは也た是れ眼中に金屑を著く、全く巴鼻なく甚だ怪奇なり、古往今來委悉し難し、珍禪や珍禪や、

① 孤雲、亦北巖に比す。  
② 龜山は、鐵倉の壽福寺。  
③ 於菟云々、虎のあたまに角が生えたと云ふとて、虎は爪だけで恐ろしいに、まして角を持たせては、尙ほ手に合はぬ、於菟は虎也、左傳に出づ。  
④ 布毛云々、鳥糞と布毛侍者の因縁、上に塵禪に暇なしと云ふことあり、故に此二句切なり。  
⑤ 一等、諸方、禪と説き、道と説くもの、……。  
⑥ 笑倒す云々、奈良の大佛さんが腹をかへて笑ふと。  
⑦ 忘言、言はうとしたが、はや忘れた。(莊子に出づ)。  
⑧ 等閑、そろり／＼と、足なみそろへて、御出なさい、他と稍用法別也。  
⑨ 初の四句、現成底、途中の受用也。  
⑩ 臨濟云々、上の四句を承けて

道の爲めにするに専切なり、我は蒲柳の衰弱を憐み、汝は松筠の貞節を守る、九登三到早く心を留め、千山萬水暫く相別る、一千七百の爛葛藤を掃はんと欲せば、先づ去つて常州の老活佛に參見せよ。

僧の復庵和尚に贈するに贈る。(此の僧五臺に遊んで、放光落髮の二石を得て歸る、亦曾て高麗に遊ぶ、云々)

上人袖裡に五臺あり、放光落髮太だ奇なるかな、惟だ親しく文殊に見え去るのみにあらず、南方の知識に參じ遍うして來る、吳雲楚水是草鞋底、又三韓に向つて走ること一回す、常州の古佛今説法す、行け行け切に忌む此に徘徊することを。

古播の言侍者、首を山中に聚め、孜孜として道に在るの佳衲子なり、一日來つて告辭す、乃ち古風一篇を贈ると云ふ。

言前に旨を領するも早く是れ遅し、句外に宗を明むるも猶ほ未だ徹せず、三呼謔に討の犀牛兒、争でか識らん七華又八裂なるを、倒に鐵馬に乗つて崑崙を過ぎ、空に和して踏破す水中の月、徳山手を拱して高く棒を聞き、臨濟首を抵れて且く喝を收む、且く喝を收むも卻つて切但、雨霏れて亂峯青く、春禽花裡に聴し。

言ふ。  
① 舌を結ぶとは、言ふ能はざるなり、描は線に屬し、畫は彩色と見るべし、書くことも、みどることも出来ぬと。  
② 金屑は黄金のかけ、貴くはあれども、目へはいつては、目つぶしなり、委悉は吟味なり。  
③ 蒲柳の衰弱は禪師自ら自己の病身を憐むなり、松筠は松竹なり。  
④ 九登三到は、三たび投子に至り、九たび洞山に登る也、雲峯和尚の故事。  
⑤ 一千七百、大藏經は、五千四百十八卷、古則公案は一千七百と云ふが、此一千七百と云ふ數は、傳燈に載せたる和尚の數じや、別にこれ／＼の一千七百と云ふ公案はない。  
⑥ 放光落髮とは、石の形によつて名けしならん、五臺山の文殊を禮するは、入唐僧の行事



釋 侍者に贈る。

凝滯頓に 釋け、灑々落々たり、電卷き星飛び、龍驤り虎躍る、疎備の  
老頭陀、一生丘壑に投ず、同志遠方より來る、慚愧す氷 藥を嘗むること  
を、酷だ愛す 芥を移して深に入ること、糞 火煨芋の標格、古風振はざる  
こと久し、林下年々蕭索たり、千 峯玉立して秋晏を掃ひ、冷翠たる岩屏  
飛瀑を挂く、今朝君已に岩曉を下らば、誰と共に 山月の白さを看  
ん。

松 嶺秀侍者の東歸に贈る。

侍者侍者禪に參得す、草鞋跣跳して飛んで天に上る、虚空口を開いて笑  
不 徹、須彌顛倒して走つて烟の如し、一條の拄杖活して龍に似たり、等  
閑に吞卻す十方空、威音王佛は驚いて舌を吐き、二 三四七は盡く蹤を瀆  
む、誰か管せん氷藥を嘗むることを、歩々清風を起す、千里の江山晴日照  
し、白雲漠々として遠峰に生ず、偉才豈是れ討ね易からんや、頽れんと欲  
するの法幢を扶取せよ、葛藤の舊枝蔓を截斷して、金剛劍を把つて磨慧を加  
へよ、將に謂へり叢林已に凋落すと、且つ看よ冬嶺に孤 松秀づることを。

英 侍者の歸省に贈る。

侍者禪に參得し了んぬ、倒に鐵馬に騎つて空  
裡に走る、唯だ崑崙兒を笑殺するのみにあらず。  
須彌を驚起して筋 斗を打せしむ、八十の衰翁  
百不能、寧ろ期せんや英 俊の聊か首を聚めん  
ことを、祖庭箇の長 松樹あるを喜ぶ、當に晚  
節を霜後に持すべし、珍重す楊岐の栗 棘蓬、  
如今既に是れ君が手に入る、他時放出して人に  
與へて吞ましめよ、四七二三も口を下し難し、  
那ぞ堪へん我に別れて層巒を下らんとは、風  
前杖に倚つて獨立すること久し、蒲 鞋を織り  
罷んで留連することなかれ、再び柴扉を叩いて  
暮年を問へ。

照禪人の故郷に歸るに贈る。

百花爛熳、幽鳥關々、春水千澗、春雲萬

の一に成つて居る、成專の日  
記や、華覺の巡禮記に、道往  
きの具合が、精しく書いて居  
る。

①南方の知識云々、善財の南詢  
に擬す。

②在道、念々委宛にあり。

③言前云々、言侍者の名を打す、  
以下の詩多く此消息あり。

④三呼、忠國師因縁。「犀牛兒、  
「驢官の因縁。」

⑤七華八裂「らり、つばい。」扇  
子破れ果んぬより來る。

⑥惛悞は、勞心なりと解す、此  
處は親切の推し賣りと云ふ程  
なり、兩雲云々、只此上に會  
取せよと、現成を指示す。

⑦彌天の永壽師師は和尚の法子  
なり。

⑧釋の字を拈弄す、贊語贈語等  
に、多く其名字を打するは、  
大いに仔細のあることなり。

⑨氷藥、白樂天の詩に、「三年刺

史となり、氷を飲み復讐を食  
ふ」とあり、龜は苦きものな  
り、千辛萬苦な、氷藥を嘗む  
と云ふ、釋侍者に擬す。

⑩篝火云々、懶瓚師は南山に  
隠れて、牛篝火中に芋を煨れ  
り、之を篝火煨芋の標格と云  
ふ、此句上を承く。

⑪千峰云々、二句儉過なり、別  
時の光景。

⑫松嶺は、和尚の法嗣、諱は道  
秀、武州河越の人。

⑬笑不徹は、雲の凝然として、  
落ちつきし處を、雲は嶺頭に  
あつて閑不徹と云ふ、是れよ  
り轉せしならん、蓋し笑つて  
やまざるなり。

⑭西天の四七東土の二三。

⑮秀孤松、秀拔衝天の孤松なり、  
陶淵明の四時の詩の句也、秀  
侍者に擬す。

⑯英侍者は靈仲譯英禪師なり、  
又和尚の法嗣。

⑰筋斗を打すとは、「さかとんぼ  
りかへる」なり、氷苑七に文  
字の解あり。百不能は動なし  
張と云ふこと也。

⑱英の字を打す。

⑲栗棘蓬、會元十九に、楊岐僧  
に問うて曰く、「栗棘蓬你作麼  
生か吞まん。」栗棘蓬は「くり  
のいご」也。

⑳那ぞ堪へん、二句、何等の情  
調。

㉑陸州和尚蒲鞋を織りて母を養  
ふ、留連とは「なま川で」、遊  
び暮すと云ふこと。(孟子に出  
づ)。

㉒關々、和鳴なり。

㉓擗踏、擗は刺す也、擗踏とは  
眼玉を突きつづす也。

㉔好正觀は、好し正に觀ると云  
ふ文字で、「如何にも見ごたへ  
あり」とでも釋する可い。

㉕擗不住は、止めても止まらぬ  
也、觀世音の千本の手で、留



山、衲僧の頂門眼を搦、瞎して、照用同時也。是れ閑なり、太奇絶、好正觀、大慈千手も欄不住、歩々親しく舊路より還る。

備前の要侍者、予と偕に、但の金藏山に寓すること、冬より春に迄る、忽ち一日辭して京師に往く、俚語以て賚別に代ふと云ふ。

子病夫に伴ふ、金峯索寞たり、雪に對して爐を擁し、口邊に醜を生ず、三玄三要商量するに懶し、四句百非渾て剗卻す、今朝又春風を逐うて帝郷に歸る、何の日か相逢うて共に山月の白きを看ん。

龍岩の油藏主に贈る。

貞治 癸卯仲秋の月夕、余が忘年の友子、光徳の龍岩老兄、特々として遠く來つて岩居を訪はる、相得て懽ぶこと甚だし、同じく錦藍亭上に下つて月を翫ぶ、余龍岩に謂つて曰く、「靈山の指、曹溪の話等は、且く置いて論ぜざるなり、寒山子の云ふ、「吾が心秋月に似たり、云々。」正に是れ秋月、今夜目に溢れて最も好し、只だ吾が心實に未だ其の所在を知らざるなり」と。然して龍岩將に箇の語に酬いんとするのころ、時に山童あり、旁に侍す、松根を敲いて歌つて曰く、「心心心、何の所に向つてか尋ねん、

めてもとまらぬと。

舊路より還るは、自分の舊路によつて、歸家糧坐することなり。

口邊に醜を生ず、會元十三に、雲居膺上堂に云く、「體得底の人は、心臘月の屬子の如く、口邊に醜出づ」と、醜は「かび」なり、はくそなり、兩人無言、故にはくそがたまる。

四句百非、有の句、無の句、亦有亦無の句、非有非無の句、之を四句と云ふ、之を開いて百非となす、切嚴長水疏に詳かなり。

此文は入れ處なきにより、茲に收めしと見ゆ、是れより前の作と體別なり。

貞治癸卯、和尚七十四歳也。

錦藍亭、永源の山門の前に遺跡あり。

只だ吾心實に未だ所在を知らず、白拈賊。

山中閑寂たり、良霄深からんと欲す、皓月高く懸つて、虚籟林に満ち、溪聲潺潺として、玉に激ぎ琴を鳴す、石女木人起つて鼓舞し、虚空口を開いて笑吟々たり。余勵聲詞して曰く、「休ね休ね、小子多口なり」と、二人手を携へて庵に歸り、寢に就く、翌旦毫を援つて記し、以て龍岩公に贈ると云ふ。

佛祖の賛 (合計八十四首)

釋迦三尊。

三界獨り尊と稱し、十方等匹なし、普賢は乃ち左輔、文殊は是れ右弼、象王回旋を休め、師子嘯呻を忘る、元來金剛座を起たす、萬徳の金容刹座に應ず。

菩提樹下の金剛座、満口縦横大脱空、此れより二千三百載、依然として明月清風に伴ふ。

任 任 任 流水の人間に下ることを、怪むなかれ浮雲の故山に歸るを、六載の艱辛柴骨露る、這回果して改む舊時の觀。

皓月、虚籟、溪聲、雲石、林木、天籟等は是れ心の所在、  
「あは、は、は、ちや」と。

以上合計十四首。

脱空、虚言、或は法螺と云ふ如し、俗語也。

依然とし明月清風に伴ふ、是れ寂室和尚の宗旨じや。

石は流れて、木の葉は沈む。



氷<sup>ひょう</sup>を嘗<sup>な</sup>め藥<sup>くすり</sup>を嚼<sup>か</sup>んで何事<sup>なにごと</sup>をかなす、通身<sup>つうしん</sup>を討得<sup>たうとく</sup>すれば瘦<sup>しほ</sup>せて柴<sup>しば</sup>に似<sup>に</sup>たり、四十九年<sup>しじゅうくわんじゅうしゅうねん</sup>三百會<sup>さんびやくかい</sup>、夢<sup>む</sup>中に夢<sup>む</sup>を説<sup>と</sup>いて癡<sup>ち</sup>獣<sup>じゆう</sup>を誑<sup>たぶらか</sup>す。

雪嶺<sup>せつれい</sup>に故坐<sup>こざ</sup>して、箇<sup>こ</sup>の甚<sup>な</sup>麼<sup>ま</sup>をか成<sup>じやう</sup>す、勉強<sup>べんきやう</sup>して出<sup>い</sup>で來<sup>き</sup>る、人天<sup>にんてん</sup>の殃禍<sup>あうくわ</sup>、閑<sup>かん</sup>に放過<sup>はうくわ</sup>す二千年<sup>にせんねん</sup>、今日<sup>こんにち</sup>相逢<sup>あひまひ</sup>ふて親<sup>した</sup>しく勘破<sup>かんぱ</sup>す。

杜陀<sup>つた</sup>の釋迦<sup>しやくぢあ</sup> (鉢盂<sup>はつむ</sup>を擧<sup>あ</sup>げ錫杖<sup>せきじやう</sup>を持<sup>も</sup>つ岩邊<sup>いわのへ</sup>の下<sup>した</sup>に立つ)

雪嶺<sup>せつれい</sup>の沙門<sup>さもん</sup>、枉<sup>へ</sup>げて人間<sup>にんげん</sup>に出<sup>い</sup>づ、鉢盂<sup>はつむ</sup>底<sup>そこ</sup>なく金錫<sup>きんせき</sup>光寒<sup>くわんげん</sup>し、岩泉<sup>がんせん</sup>は應<sup>ま</sup>に倒流<sup>たうりゆう</sup>の日<sup>ひ</sup>あるべきも、滿<sup>まん</sup>面の慚惶<sup>さんかう</sup>は洗<sup>あ</sup>ふこと卻<sup>かへ</sup>つて難<sup>かた</sup>し。

彌陀佛<sup>みたつたふつ</sup>。

塵念<sup>じんねん</sup>頓<sup>とん</sup>に除<sup>ぞ</sup>き、明鏡<sup>めいけい</sup>の面<sup>めん</sup>の如<sup>ごと</sup>くなれば、安養<sup>あんやう</sup>の三尊<sup>さんそん</sup>即時<sup>じし</sup>に示現<sup>しげん</sup>す、區々<sup>くく</sup>として若<sup>ごと</sup>し是<sup>こゝ</sup>れ西方<sup>さいほう</sup>を望<sup>のぞ</sup>めば、華池<sup>けわぢ</sup>寶樹<sup>ほうじゆ</sup>怕<sup>おそ</sup>らくは見難<sup>みがた</sup>し。

紫<sup>むらさき</sup>金光<sup>きんかう</sup>聚<sup>しゆ</sup>、慈容<sup>じよう</sup>恒<sup>とこ</sup>赫<sup>く</sup>、區々<sup>くく</sup>たる迷徒<sup>めいと</sup>は外<sup>ほか</sup>に向<sup>むか</sup>つて求覓<sup>ぐま</sup>す、閑思<sup>かんし</sup>念<sup>ねん</sup>をとつて暫<sup>しばらく</sup>時に忘<sup>わす</sup>せば、樂邦<sup>らくぱう</sup>は果<sup>はた</sup>して西方<sup>さいほう</sup>にあらす。

閑<sup>かん</sup>くならず、此<sup>こゝ</sup>の無量<sup>むりやう</sup>壽佛<sup>じゆうぶつ</sup>の尊像<sup>そんざう</sup>、一夕<sup>いつせき</sup>回祿<sup>くわいろく</sup>の災<sup>さい</sup>に罹<sup>か</sup>る、而<sup>しか</sup>も後<sup>のち</sup>に之<sup>これ</sup>を熱<sup>ねつ</sup>灰堆<sup>かいたい</sup>中<sup>ちゆう</sup>より得<sup>え</sup>たり、空相<sup>くうさう</sup>皆<sup>みな</sup>燼<sup>せん</sup>して、像<sup>ざう</sup>は壞<sup>こ</sup>するところなし、遐邇<sup>せゐ</sup>奔趨<sup>ほんすう</sup>して驚駭<sup>きやうがい</sup>嗟嘆<sup>そたん</sup>す、逆<sup>さか</sup>め知る、劫火<sup>せつか</sup>洞然<sup>どうぜん</sup>として大千<sup>だいせん</sup>俱<sup>く</sup>に壞<sup>こ</sup>するも、敢<sup>あへ</sup>て他<sup>た</sup>に隨<sup>したが</sup>ひ去<sup>い</sup>らざるを、神異<sup>しんい</sup>寔<sup>じつ</sup>に測<sup>はか</sup>るべからず、因<sup>よ</sup>つて香<sup>かう</sup>を焚<sup>か</sup>き、稽首<sup>きしゆ</sup>して、聊<sup>いささ</sup>か贊詞<sup>さんし</sup>を述<sup>の</sup>ぶと云<sup>い</sup>ふ。當初<sup>当初</sup>甚<sup>な</sup>に因<sup>よ</sup>つてか安養<sup>あんやう</sup>を離<sup>はな</sup>る、今日<sup>こんにち</sup>端<sup>はし</sup>なく火坑<sup>くわかう</sup>に入る、幸<sup>さいはひ</sup>に是<sup>こゝ</sup>れ幻身<sup>げんしん</sup>燒<sup>や</sup>けども爛<sup>た</sup>れず、且<sup>しかも</sup>く茲<sup>こゝ</sup>の士<sup>し</sup>に居<sup>ゐ</sup>して群生<sup>ぐんじゆう</sup>を度<sup>た</sup>せよ。

觀音<sup>くわんおん</sup>大士<sup>だいし</sup>。

手<sup>て</sup>に念珠<sup>ねんじゆ</sup>を拈<sup>に</sup>り、足<sup>あし</sup>に蓮華<sup>れんげ</sup>を踏<sup>ふ</sup>む、流<sup>なが</sup>れ<sup>の</sup>を<sup>か</sup>へ<sup>て</sup>入<sup>い</sup>りて所<sup>ところ</sup>を亡<sup>な</sup>じ、聞<sup>き</sup>を返<sup>かへ</sup>して覺<sup>かく</sup>を遺<sup>い</sup>る、衆生<sup>しゆじゆう</sup>界空<sup>かいくう</sup>しうして、我<sup>わが</sup>が願<sup>ねん</sup>方に極<sup>ごく</sup>まらん、刹<sup>せつ</sup>々<sup>々</sup>塵<sup>ちん</sup>々<sup>々</sup>、靈光<sup>りやうかう</sup>赫<sup>く</sup>々<sup>々</sup>たり、首<sup>くび</sup>を回<sup>かへ</sup>らして水中<sup>すいぢゆう</sup>の月<sup>つき</sup>を貪<sup>せむ</sup>り觀<sup>み</sup>て、眼<sup>がん</sup>裡<sup>り</sup>に金<sup>きん</sup>屑<sup>せつ</sup>を著<sup>ちやく</sup>くるを知らず、別<sup>べつ</sup>別<sup>べつ</sup>、無量<sup>むりやう</sup>劫<sup>けつ</sup>來<sup>らい</sup>一<sup>いつ</sup>概<sup>がい</sup>を得<sup>え</sup>たり。

瀑布<sup>たふた</sup>石<sup>いし</sup>を透<sup>と</sup>り、松崖<sup>しょうがい</sup>空<sup>くう</sup>を撐<sup>さ</sup>ふ、碧草<sup>へきそう</sup>を座<sup>ざ</sup>となし、瓶<sup>びん</sup>柳<sup>りゆう</sup>の春風<sup>しゆんかう</sup>、眼<sup>がん</sup>處<sup>じよ</sup>に聞<sup>き</sup>き耳<sup>みみ</sup>處<sup>じよ</sup>に見<sup>み</sup>る、知らず何<sup>なん</sup>の劫<sup>けつ</sup>にか圓通<sup>えんつう</sup>を悟<sup>さと</sup>らん。

閑思<sup>かんし</sup>修<sup>しゆ</sup>より、三<sup>さん</sup>摩<sup>ま</sup>地<sup>ぢ</sup>に入る、一<sup>いつ</sup>身<sup>しん</sup>分<sup>ぶん</sup>化<sup>け</sup>す三十<sup>さんじゆう</sup>有<sup>いう</sup>二<sup>に</sup>、衆生<sup>しゆじゆう</sup>の心<sup>しん</sup>に應<sup>おう</sup>するは月<sup>つき</sup>の水<sup>みづ</sup>に印<sup>いん</sup>するが如<sup>ごと</sup>し、大智<sup>だいぢ</sup>の光<sup>くわう</sup>明<sup>めい</sup>處<sup>じよ</sup>として至<sup>いた</sup>らざるなし、苦海<sup>くかい</sup>に沙<sup>さ</sup>を算<sup>さん</sup>へ念珠<sup>ねんじゆ</sup>指<sup>さし</sup>を輪<sup>りん</sup>る、迷<sup>めい</sup>途<sup>と</sup>歸<sup>き</sup>ることを忘れて寶蓮<sup>ほうれん</sup>趾<sup>し</sup>に襯<sup>せん</sup>す、春<sup>はる</sup>は百<sup>ひやく</sup>花<sup>か</sup>に透<sup>と</sup>り、鶯<sup>う</sup>千里<sup>せんり</sup>に啼<sup>な</sup>く、南無<sup>なむ</sup>觀<sup>くわん</sup>音<sup>おん</sup>、圓通<sup>えんつう</sup>大士<sup>だいし</sup>。

那伽<sup>なぢあ</sup>定<sup>ぢやう</sup>に入<sup>い</sup>つて、圓通<sup>えんつう</sup>を示現<sup>しげん</sup>す、悲心<sup>ひしん</sup>一<sup>いつ</sup>點<sup>てん</sup>衆生<sup>しゆうじゆう</sup>界空<sup>かいくう</sup>す、巖<sup>いん</sup>泉<sup>せん</sup>何<sup>なに</sup>事<sup>ごと</sup>ぞ響<sup>ひび</sup>玲瓏<sup>れいろう</sup>たる。

① 千辛萬苦。

② 等閑の二句、出山佛を、面白く言ひふせられた、此佛は二千年も、どこの山へ隠れてゐられたか、一見瞥見見てとつた。

③ 滿面の慚惶云々、金輪の寶位を去つて、乞食坊主となる、あなほづかし、風無きに波を起すじや。

④ 紫磨黄金の光りのかたまり。⑤ 恒赫、舊注に、恒は恒に作るべし、恒赫は照耀なり。

⑥ 暫時、一時の意、圓證せざるなり、用法尋常と別也、二句、唯心の淨土、己身の彌陀なり、何ぞ四方にあらん。

⑦ 流を入して所を亡すとば、前塵に隨ひ、流轉起滅するを取つて返して、回光すれば、所緣の境自ら泯滅するなり。

⑧ 聞を返して覺を遺るとば、聞の自性を返聞すれば、無上菩提現前する也。

⑨ 知らず云々、耳根圓通は是れ何の乾屎橛ぞ。

⑩ 三摩地とは、禪定を以て心を攝するなり。



妙相觀々たり、梵音落々たり、擬議不來、鐵圍懸かに隔る、白花巖上千尋の瀑。

盤陀石上と、古瀑岩邊と、悲願海潤く、妙智光圓かなり、聞は聞性を空じ、見は見縁を離る、圓通の三昧、隨所に現前す、塵々刹々法雨を澍ぐ、手裡の春風柳色鮮かなり。

圓通三昧、塵刹に現成す、耳裡の山色、眼中的水聲、劫外の春風瓶柳青し。

滄溟千尋、悲心甚だ深し、崖瀑聲無うして、聞塵自ら清し、大士圓通三昧力、世間那ぞ苦衆生あらん。

塵沙の刹土、人の患難を救ふ、將に謂へり一たび去つて萬劫にも還らずと、喫補陀巖上自ら安閑。

十方一華座、徧界大圓光、何ぞ止だ分身三十二のみならん、春來つて萬國百花香し。(圓相の中に坐す)

塵々圓成す水月の場、刹々渾て是れ空花の座、歷劫にも人の入得し來るなし、普門元自ら曾て鎖さず。百千の三昧は水中の月、四八の應身は空裡の花、歸り去つて捕陀岩上に坐す、青山老卻す幾烟霞ぞ。

圓通の門戸等閑に開く、龍天を惹き得て特地に來らしむ、終日寂寥として岩瀑に對す、流を入し所を亡じて坐堆々。

清淨の光圓かに、弘誓の海潤し、楊柳春青く、類伽水活す、寥々として獨坐人の來るなし、惜むべし普門の徒に自ら開くことを。

三有の苦海、一葉の慈舟、普く群類を度して、彼の岸頭に到らしむ、壺中春は滴る楊柳の露、塵刹圓通法雨流る。

寶華王の座坐して觀々たり、湛然として深く三摩地に入る、刹々塵々應現の身、豈惟に四八のみならん矣。

古皇の天下無爲を樂むも、化跡猶ほ存す丘索の類、争でか如かん慈容を瞻仰するの人、過を悔い邪を捐て、妙理に伏せんには、船を燒き水を背にするも籌策に勞す、龜を滅じ兵を添ふるも又多事のみ、大士未だ聲氣を動するによらざるも、生死の魔軍自ら逃避す、普門歷劫關鑰を缺く、願海何ぞ嘗て涯涘あらん、聞を返して聞盡き見は見に非ず、鳥啼き花笑む只だ這れ是れ。

盡く謂ふ龍天來つて耳を側つと、慈を垂るゝことは何ぞ必ずしも音聞に

① 迷途云々、足に寶蓮と云ふは、樹がくつゝいて居るから、迷途を去ることが出来ぬと。

② 巖泉云々、是れは和尚の耳が鳴つてゐるのじや。

③ 不來は來也、來らざらんやと云ふ反語を用ひしもの、ちらりと横矢がはいれば、白雲萬里ぞ。

④ 白衣觀音。

⑤ 將に謂へり云々、本分の家山へ歸つて、二度と娑婆へ還らないと。

⑥ 此結句氣に入つた。

⑦ 青山老卻云々、穩坐堆々、幾千年の意、以て衆生の機に應ずる也。

⑧ 龍天、畫中の景也。

⑨ 類伽は、水瓶なり、形類伽鳥に似たり。

⑩ 寶華、七寶蓮華なり。

⑪ 古皇の天下云々、五帝三皇堯舜の世、無爲にして化すと云ふも、矢張り化と云ふものがある、又八索九丘と云ふ書物も殘つて居る。

⑫ 船を燒くとは、周輪、曹操を赤壁に燒打ちせし也、水を背にするは、韓信背水の陣を張つて、陳餘を破りし也。

⑬ 龜を滅すは、孫臏、龐涓の軍を破りし時の事也、兵を添ふは廣淵強兵を示して、羌寇を破りし也、此四皆稱僧分上の事也。



在らん、人の三摩地に入得ることなし、海畔の青山空しく白雲。  
大圓滿の光、妙相堂々たり、昏夜の星月、苦海の舟航、如今深く三摩地に入る、瓶裡の芙蓉定香を吐く。

瀑泉石を穿ち、岩樹雲を凝す、天真の明妙、見を泯し聞を亡す、終日願を支へて坐す、眼は瓶柳と青し、人の三摩地に入得するなし、争でか識らん普門元局さざることを。

如意輪觀音

終日願を捨へて坐して思惟す、善哉深く悲願海に入る、群生を度し了つて已に多時、珍重す如意觀自在。

長州の逸禪者、舊印本の普門品一卷を收む、首に補陀大士の像あり、嘗て回祿に罹る、然して後に之を灰中に得たり、空紙少き燻すと雖も、像と經字とは敢て壞する所なきものなり、予に従つて贊を需む、乃ち稽首拜手して、謹んで其の上に書すと云ふ。

眞空の妙相、圓通の三昧、劫火光中、巖々如是、咳、黒底は墨白底は紙。

文殊大士。

覺城の東際に、童子を救壞す、設に師子を把つて御つて馬と作して

①定香とは、五分法身香の一也。  
②終日云々は、聞を亡するなり、眼は瓶柳と青きは見を泯するなり。  
③空紙は文字なき處。

騎る、祇だ方寸吹毛の利なるに縁つて、自ら肯ふ七佛の師となるに堪へたりと。

没字の殘經看ること未だ了せず、亡鋒の古劍只だ空しく持す、長年癡坐す金毛の背、誰か信せん曾て七佛の師と爲ることを。

地藏。

切利天宮、佛の遺付を受く、苦に沈む者あれば、誓つて我れ救度す、度生甚の慈氏に到るとか説かん、虚空は盡くると雖も窮已なけん。

切利天宮、親しく佛勅を受く、虚空は盡くるとありとも、悲願は極りなし、寶珠掌に在つて世間の困窮を救拔し、金錫威を振つて地下の牢獄を擊推す。

六環の金錫、一顆の摩尼、物を雨らして乏しきを救ひ、苦を抜いて慈を垂る、虚空地に墜つるの日ありと雖も、應に濟度人を乘るの時なかるべし。

達磨三首。(渡江二、半身一)

梁王相對して相識らず、夜半扶桑杲日紅なり、大江を踏断して一滴なし、莖蘆葉は冷かなり幾秋風ぞ。(右呆侍者の請)

①覺城は、事苑に福城に作るべしと云へり、童子は、善財童子也、教壞とは、人を教へてめくらにすること、是は大切の事であつて、主人は丁稚を教壞する、師家は學者を教壞する。  
②吹毛は、利劍なり、毫毛刃を渡れば尋断々壞す、方寸は心なり、心中の利劍。  
③没字の殘經とは、無字の經卷なり、蓋し智慧を拈ぜしならん、普賢とまされ易し。  
④七佛の師は、普超三昧經に、過去無數の佛は、皆其の弟子とあり。  
⑤切利に遺付を受くるは、地藏本願經に詳なり。  
⑥窮已なけんは、誓願力に打切りなき也。  
⑦寶珠、如意寶珠。  
⑧六環の金錫、錫杖經に、二股



剛て道ふ廓然無聖と、乃ち是れ觀體現成す、元來自救不了、若何ぞ迷情を度し得ん、長江は萬古東流し去る、脚下依然として蘆一莖。  
六◎宗邪は破る一言の下、五葉華は開く萬國の春、普◎通の年より今日に到るまで、是れ誰か箇の全身を見ることを得ん。

寒山。

家は五臺に在つて歸ること得ず、路頭忘◎卻して已に多時、毫を援つて側立す寒岩の下、想ふに亦應に落韻の詩を題するならん。

強ひて謂ふ吾が心秋月に似たりと、争でか知らん肚裡暗昏なることを、須ひす合掌して人事を勞することを、五臺に歸り去つて且く門を掩へ。

拾得。

峨嵋の好風月を抛卻して、赤城の山水に且く逍遙す、人の字を寫すを見て墨を研ぐことを忘る、首を回らして那ぞ知らん劫石の消するを。

峨嵋の銀世界を閑卻して、國清寺裡に伴狂を恣にす、數行の貝葉看て未だ了せざるに、枯木岩前又夕陽。

布袋。

率陀天上、幾時か還るを得ん、灰頭土面、且つ癡痴を放にし、箇の人の來るを等つて渾て見す、長汀の風月誰が爲めにか寒き。

誰か信せん化身千百億と、獨遊獨處す四明の廓、卻つて天上長年の樂を將つて、人間の一覺眠に換へ得たり。

跡を四明關の外に寄せて、灰頭土面人の憎を得たり、自ら謂ふ化身千百億と、我れは言ふ天地の一閑僧。

頭を回らし腦を轉じて何事をか笑ふ、終日茫茫として市廓に走る、長汀風景の好きを愛するが爲めに、多時忘卻す率陀天。

政。

黃牛。

盆を浮べて聊か既ぶ清池の月、偶を留めて還つて辭す國士の筵、白鷺鷺の邊り黃犢の角、眼中老卻す幾風煙。

郁山主。

一類當頭に三際斷す、卻つて魚目を將つて明珠となす、安んぞ知らん今日溪橋の上り、又蹇蹇に跨つて畫圖に歸せんとは。

大覺 禪師鏡中に觀音の像を現す。

六環は迦葉佛の製、四股十二環は釋迦佛の製とあり。  
①大江を踏斷、徐ろに行いて踏斷す流水の聲。  
②六宗とは、有相宗、無相宗、定慧宗、戒行宗、無得宗、寂靜宗也、達磨大師は此六宗を説破せられしなり。  
③普通云々、半身達磨の贊として、申分なき働きなり。  
④寒山は、文殊の化身、台州始豐縣の四七十里に寒明の二岩あり、其寒岩の中に居止するを以て、寒山と呼びし也。  
⑤五臺山は、文殊應現の靈場。  
⑥十年歸ること得ずんば、來時の路を忘却す。  
⑦落韻とは、無脚支離の意也。  
⑧是れは、寒山の合掌せし圖ならん。  
⑨拾得は、普賢の化身なり、蜀の峨嵋山は普賢應現の處。  
⑩赤城、豐子禪師經行の序で、

赤城の道側に拾ひ得たり、故に拾得と名く。  
①人の字を寫す云々 舊注に、「此圖は寒山字を寫し、拾得墨を磨するを畫く」と。  
②銀世界、普賢は六牙四足の白象に騎る、故に然り云ふか。  
③四首、布袋は、傳燈廿七に傳あり、又定應大師別傳あり、甚詳なり、普賢の化身、名は契此、又長汀子と號す。  
④箇人の來るをまつ云々、布袋曾て街衢にあり、僧問ふ、「和尚茲にあつて什麼をかなす、發曰く、箇の人の來るを俟つ、」僧曰く、「來れり來れり、發曰く、汝は是れ箇の人にあらす、僧曰く、如何んか是れ道の人、發曰く、我に一文錢を與へよ。」  
⑤四明、布袋は明州の奉化に放浪す、四明はもと山の名なり、應は市廓也、雜沓の地。



之を大覺と謂ふも全く不是なり。喚んで圓通となすも眼に瞞せらる、二大士の眞體を知らんと欲せば、手を東平に借て鏡を破つて看よ。

大覺禪師。

金錫巫 峽を出で、楚水吳雲を踏遍す、泥牛窓樓を過ぎて、清風明月を吼破す、方に隨ひ感に赴いて祠、山の靈神化權を助け、物に應じ形を分つて鏡裡の圓通醜拙を呈す、端的人を驗む、手親しく眼活す、邪禪の輩氣を飲み聲を呑む、老聶翁の遺風餘烈、特々として西來す何の所爲ぞ、箇れは是れ本朝最初教外別傳の師、問世の英哲蜀川の權奇、松源の的派、無明の光輝、初めて本朝に來たつて別傳の師に同じ、邪徒妬害して百の流支を累す、回瀾の砥柱は屹然として高く崎つ、迷情を啓迪して深慈痛悲なり、天

- ① 關闈は市門なり。
- ② 自ら謂ふ化身云々、彌勒眞彌勒、分身千百億、時々示し時人、時人不二自識、是れ布袋の作也、布袋の偶多し、然れども此の偶最も人口に膾炙す。
- ③ 政黃牛は千古の逸人なり、僧實傳十九に傳あり、又羅湖野錄にも逸話を載す。
- ④ 盆を浮云々、大だらびに乗つて、月を見し也。
- ⑤ 偶を留むは、坊主が在家に交るは面白からず、矢張り嚴谷がよしと云ふ名偶あり。
- ⑥ 黃樓、惟政禪師は常に黃樓に乗りしなり、雙眼風烟を見て老ゆ。
- ⑦ 都山主、會元六に傳あり、驢馬に乗つて溪橋を過ぎ、まつさかさまに水にはまつて、豁然大悟す、技に於て我に明珠一顆ありの偶を賦す。
- ⑧ 魚目をもつて明珠となすと

は、用ひ機、頗る面白し。恨めしやと迷ふて出たの、これでは、悟らぬ前と同じ、となり。

⑨ 大覺禪師、元亨釋書六に傳あり、此の鏡の事又載す、蓋し新様の細工せし鏡を所持せられしと見ゆ、さりながら其の當時は之を神秘視せるなり。

⑩ 眼に瞞せらるとは、目にだまされるなり、大抵のものは目にだまされるものじや。

⑪ 東平云々、仰山東平に住する時、瀉山鏡を送らしむ、仰山提起して曰く、是れ瀉山の鏡か、是れ東平の鏡か、道ひ得ずんば打破せん。衆無語、仰山則ち打破す。

⑫ 巫峽は、蜀にあり、大覺は四蜀の人、楚水吳雲云々は、楚の諸神知識に多ぜられし也。

⑬ 祠山の靈神云々、鶴岡の八幡祠の神來つて新道を尙量せし

下の建長雄基を開闢し、千古萬古福山嶺々たり。(建長老の請) 奇なるかな大覺と圓覺と、同徳同風道も亦同じ、震旦扶桑に鼻祖となり、分身揚化して宗風を振ふ。

中 峯和尙。

若し這の老和尙の面前を論せば、則ち山河大地も也た是れ幻、色空明暗も也た是れ幻、三世の諸佛も也た是れ幻、歴代の祖師も也た是れ幻、乃至菩提涅槃眞如實相等一々幻にあらずといふものあることなし、掩光の後三十年、箇の幻にあらざる底を留め得て、塵尾の拂を握つて曲柔床に踞す、燐々煌々たり、堂々巍々たり、勢は西天目山と其の高寒を争ふ、徧く盡大地の人をして瞻仰肅恭せしむるのみ。

萬徳莊嚴圓滿の身、虚空を舌となすも若何が申べん、我れ今免れず強ひて道取することを、佛より已來唯だ一人。

南浦 和尙。

息耕の眞印を佩びて、先聖の途徹を離る、舊横岳の雲に眠り、晚に巨峯の月を翫ぶ、手に塵尾を握つて坐して來機に趣く、崖崩れ石裂く、電卷き

- ① 老聶翁は、松源也、松源は晚年耳聾す。
- ② 無明は大覺の師也。
- ③ 別傳師は、達磨大師也。
- ④ 邪徒妬害云々、大覺禪によつて卍州に流さる。
- ⑤ 圓覺は達磨圓覺大師。
- ⑥ 中峯諱は明本、傳は増集續傳六に出づ、著に中時廣錄あり、家藏戸誦す。
- ⑦ 中峰は幻住と稱す、故に幻の字を拈弄す。
- ⑧ 燐々は光明也、煌々は梵燿の鏡。
- ⑨ 南浦は大應國師なり、大應錄の下に、塔銘あり、續群書類從の史傳部にも載す、日本二十四流の禪、今日存するものは南浦の一流あるのみ、兒孫浩々地法播騰々たり、嗚呼偉なるかな。
- ⑩ 息耕は虛堂和尙なり、大應は